第1章　岡崎市の歴史的風致形成の背景

1-1.位置と市域

(1)位置

本市は、愛知県のほぼ中央部に位置し、名古屋市から約 35 キロメートル、東京から約 250 キロメートル、大阪から約 150 キロメートルの距離にある。北は豊田市、東は新城市、西は安城市及び西尾市、南は豊川市、蒲郡市及び幸田町と接し、総面積は 387.20 平方キロメートル(平成 27 年(2015) 3 月 6 日現在)である。

図1-1-1　愛知県の位置

図1-1-2　岡崎市の位置

(2)市域の変遷

明治４年(1871)７月、廃藩置県により岡崎藩は岡崎県となった。同年 11 月、岡崎県、西尾県、刈谷県など 10 県が合併して額田県となり、岡崎城内に県庁を置いた。翌年の明治５年(1872)11 月に額田県は愛知県に統合された。そして、明治 22 年(1889)の町村制施行により岡崎町が誕生した。

明治 35 年(1902)には男川村の一部(欠)と、明治 39 年(1906)には三島村、乙見村の一部(稲熊・小呂)と、大正３年(1914)には広幡町と合併し、大正５年(1916)７月１日に面積 19.68 平方キロメートル、人口 37,639 人で、県下３番目、全国 67 番目に市制を施行した。昭和３年(1928)には、岡崎村、美合村、男川村、常磐村の一部と合併した。昭和の大合併により、昭和 30 年(1955)に矢作町、岩津町、福岡町、本宿村、山中村、藤川村、龍谷村、河合村、常磐村の３町６村と、昭和 37 年(1962)に六ツ美町と合併した。面積は市制施行当時の約 11 倍の 226.97 平方キロメートルに、人口は約５倍の 185,959 人となった。

平成 15 年(2003)４月に中核市へ移行し、平成の大合併により平成 18 年(2006)に額田町と合併して、面積 387.24 平方キロメートル、人口 36 万人以上を擁する岡崎市となった。

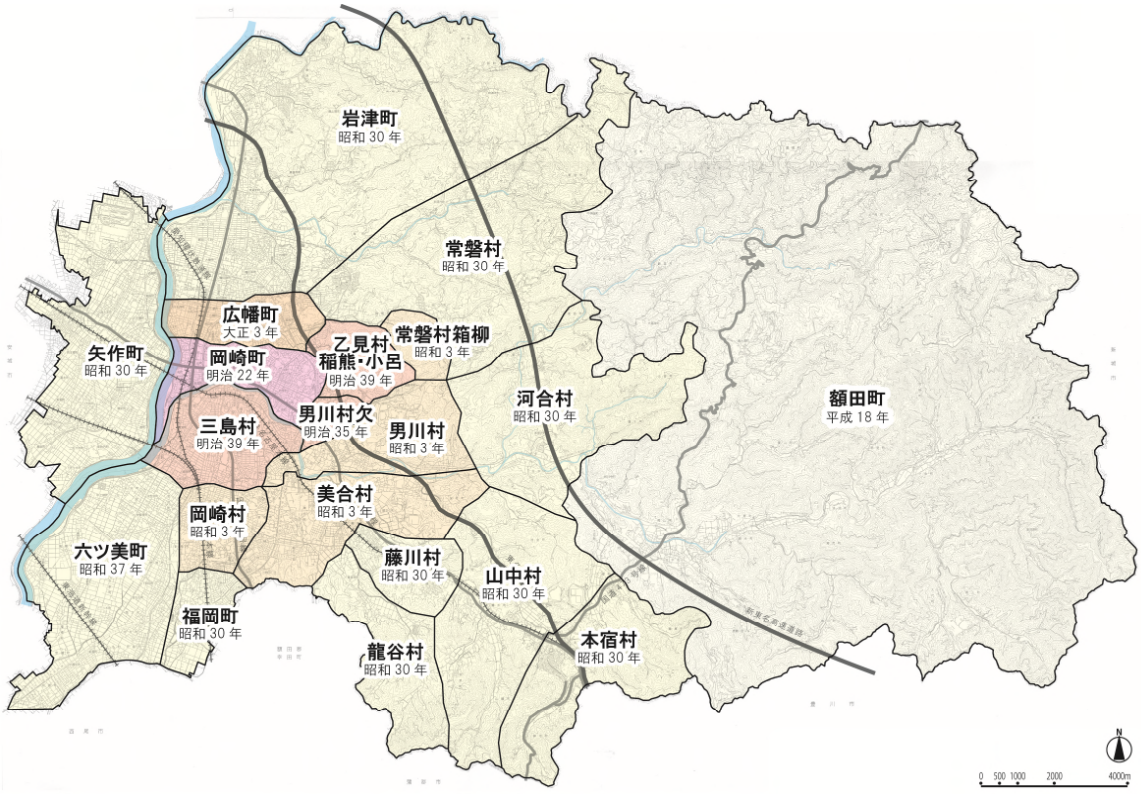


図1-1-3　合併による市域の拡大

表1-1-1　岡崎市の合併経緯(明治 22 年以降)（1/3）

明治22年以前		明治22年10月1日	明治23年～明治45年			大正1年～大正15年		昭和1年～昭和64年			平成1年～現在	現在
岡崎城下	岡崎横町	岡崎町	岡崎町			岡崎町	T5.7.1 市制 岡崎市	岡崎市	岡崎市	岡崎市	岡崎市	岡崎市
	岡崎亀井町											
	岡崎久右衛門町											
	岡崎下肴町	魚町										
	岡崎康生町											
	岡崎材木町											
	岡崎十王町											
	岡崎松本町											
	岡崎伝馬町											
	岡崎田町											
	岡崎唐沢町											
	岡崎島町											
	岡崎投町											
	岡崎能見町	岡崎能見町										
	岡崎中町											
	岡崎八幡町											
	岡崎板屋町											
	岡崎福寿町											
	岡崎門前町											
	岡崎祐金町											
	岡崎裏町											
	岡崎両町											
	岡崎連尺町											
	岡崎六地蔵町											
	岡崎籠田町											
	岡崎上肴町	岡崎上肴町										
	岡崎六供町	六供村										
	岡崎八軒町	梅園村										
	杉本村											
	岡崎松葉町	八帖村										
八町村												
菅生町		菅生村										
極楽寺門前（岡崎蛤町）		中村										
日名村		広幡村	M28.5.13 町制 広幡町			T3.10.1 岡崎町に編入						
能見村												
井田村												
伊賀村												
久後村		久後崎村	三島村	三島村	M39.5.1 岡崎町に編入	岡崎町	岡崎町					
国崎町												
下六名村		下六名村										
中六名村												
上六名村												
上明大寺村		明大寺村										
下明大寺村												
西明大寺村												
福島新田												
欠村		男川村	男川村	男川村	M35.9.23 岡崎町に編入	男川村	男川村		S3.9.1 岡崎市に編入			
大平村		大平村			男川村							
西大平村												
丸山村		丸山村										
丸平新田												
小美村												
高隆寺村												
洞村												
馬頭村		和合村	美合村	美合村		美合村						
生田村												
平地村												
岡村												
保母村												
羽根村		岡崎村	岡崎村	岡崎村		岡崎村						
柱村												
戸崎村												
若松村												
針崎村												
箱柳村		乙見村	乙見村	M39.7.1 合併 常磐村		常磐村						
小呂村				M39.5.1 岡崎町に編入		岡崎町	T5.7.1 市制 岡崎市		岡崎市			
稲熊村												
田口村				M39.7.1 合併 常磐村		常磐村			常磐村	S30.2.1 岡崎市に編入		
板田村												
大井野村												
岩谷村		岩中村										
中畑村												
滝村		常磐村	常磐村									
米河内村												
安戸村												
小丸村												
新居村												
蔵次村												
大ケ谷村		大柳村										
柳村												
北須山村												
岩津村		岩津村	岩津村	M39.7.1 合併 岩津村		岩津村			S3.5.1 町制 岩津町			
八ツ木村												
西阿知和村												
東阿知和村												
真福寺村												
西蔵前村												
東蔵前村		東蔵前村										
磯部村												
丹坂村												
恵田村												
駒立村												
奥殿村		奥殿村	奥殿村									
桑原村												
川向村												
宮石村												
渡通津村												
日影村												
上細川村		細川村	細川村									
下細川村												
仁木村												
奥山田村												
大樹寺村		大樹寺村	大樹寺村									
大門村												
上里村												
鴨田村												
藪田村												
百々村												

表1-1-1　岡崎市の合併経緯(明治 22 年以降)（2/3）

明治22年以前		明治22年10月1日	明治23年～明治45年		大正1年～大正15年	昭和1年～昭和64年			平成1年～現在	現在
土呂村	福岡村	福岡村	M26.11.8 町制 福岡町		福岡町	福岡町	S30.2.1 岡崎市に編入	岡崎市	岡崎市	岡崎市
山畑村										
高須村										
菅園村										
永井村										
上地村	上地村									
大谷村										
本宿村		本宿村	本宿村		本宿村	本宿村				
上衣文村										
大幡村										
鶴巣村										
鉢地村										
龍泉寺村	龍泉寺村	龍谷村	龍谷村		龍谷村	龍谷村				
尾尻村										
桑谷村										
才熊村	才栗村	河合村	河合村		河合村	河合村				
栗木村										
秦梨村	秦梨村									
友久村										
切越村										
蓬生村										
須淵村										
岩戸村										
茅原沢村										
古部村										
生平村										
羽栗村		山中村	山中村		山中村	山中村				
池金村										
舞木村										
山綱村										
藤川村	藤川村	藤川村	藤川村		藤川村	藤川村				
市場村										
蓑川村										
柳田村	桜形村	形埜村	形埜村		形埜村	形埜村	S31.9.30 合併 額田町	額田町	H18.1.1 岡崎市に編入	
名ノ内村										
麻生村										
鍛冶屋村	鍛埜村									
大林村										
土村										
南須山村	南大須村									
大山村										
大河村	大高味村									
高薄村										
法味村										
笠井村	井沢村									
竹沢連村										
上毛呂村	毛呂村									
下毛呂村										
小楠村	小久田村									
桃ケ久保村										
赤田和村										
切山村										
亀穴村		宮崎村	宮崎村		宮崎村	宮崎村				
石原村										
明見村										
中金村										
大代村										
雨山村										
河辺村	河原村									
栃原村										
十万町村		巴山村	M23.12.17 改称 栄枝村	M39.5.1 宮崎村に編入						
木下村										
柿平村	夏山村			M39.5.1 合併 豊富村	豊富村	豊富村				
井ノ口村										
平針村										
鬼沢村										
寺平村										
寺野村										
樫山村		豊岡村	豊岡村							
桜井寺村										
牧平村										
鹿勝川村										
下衣文村										
細野村	細光村	高富村	高富村							
光久村										
片寄村										
滝尻村										
淡淵村										
鳥川村										
保久村	中伊村	下山村	下山村		下山村	下山村	(一部、下山村、その後豊田市へ)			
中保久村										
伊賀谷村										
外山村										
一色村										
富尾村										
上田代村	田折村									
折地村										
田代村										
蕪木村										
蘭村										

表1-1-1　岡崎市の合併経緯(明治 22 年以降)（3/3）

明治22年以前	明治22年10月1日	明治23年～明治45年		大正1年～大正15年	昭和1年～昭和64年			平成1年～現在	現在
合歓木村	阿乎美村	M24.11.10 分立 合歓木村	M39.5.1 合併 六ツ美村	六ツ美村	六ツ美村	S33.10.15 町制 六ツ美町	S37.10.15 岡崎市に編入	岡崎市	岡崎市
福桶村									
高橋村									
上青野村		M24.11.10 分立 上青野村							
下青野村									
在家村									
下中島村	中島村	中島村							
安藤村									
高畑村									
上和田村									
法性寺村									
牧御堂村									
井内村									
宮地村									
赤渋村									
中之郷村									
土井村									
下和田村									
坂左右村									
野畑村									
定国村									
国正村									
中村									
正名村									
上三ツ木村									
下三ツ木村									
矢作村	矢作村	M26.2.19 町制 矢作町	M39.5.1 合併 矢作町	矢作町	矢作町	S30.4.1 岡崎市に編入	岡崎市		
坂戸村	中郷村	中郷村							
島村									
小望村									
池端村									
館出村									
桑子村									
西牧内村									
富永村									
新堀村									
西本郷村	本郷村	本郷村							
東本郷村									
北本郷村									
暮戸村									
渡村		M34.4.4 分立 渡村							
筒針村									
西大友村	長瀬村	長瀬村							
東大友村									
中園村									
舳越村									
北野村									
森越村									
橋目村									
橋目村	（下記以外）茶臼、中茶臼、宮東、新居林、北茶屋浦、郷前						S35.1.1 安城市に編入	（安城市）	（安城市）
尾崎村	志貴村	志貴村							
柿碕村									
宇頭茶屋村									
宇頭村									
小針村									
上佐々木村	藤野村(一部)	M24.8.8 分立 志賀須香村					岡崎市	岡崎市	岡崎市
下佐々木村									
東牧内村									
河野村							S35.1.1 安城市に編入	（安城市）	（安城市）

1-2.自然的環境

(1)地勢

市域は、東西 29.1 キロメートル、南北 20.2 キロメートル、面積 387.20 平方キロメートルに及び、県内では豊田市、新城市に次ぐ３番目の規模である。

市の北東部は中部山岳地帯に連なる三河山地、西部は広大な岡崎平野、南部は三河湾国定公園に含まれる山地となっている。中心部から北東部にかけて標高 100～300 メートル程の丘陵地がみられ、さらに、北東部にかけて 300～600 メートルの山地が嶺を連ねている。標高は東端に位置する本宮山（ほんぐうさん）の 789.2 メートルを最高地点とし、南西部の中島町の 6.2 メートルを最低地点とする。中心部から南東部にかけては桑谷山（くわがいやま）や扇子山（せんすざん）など 400 メートル以上の山々が連なり、やや急な地形を形成している。市内の標高差は 700 メートル以上に及ぶ。

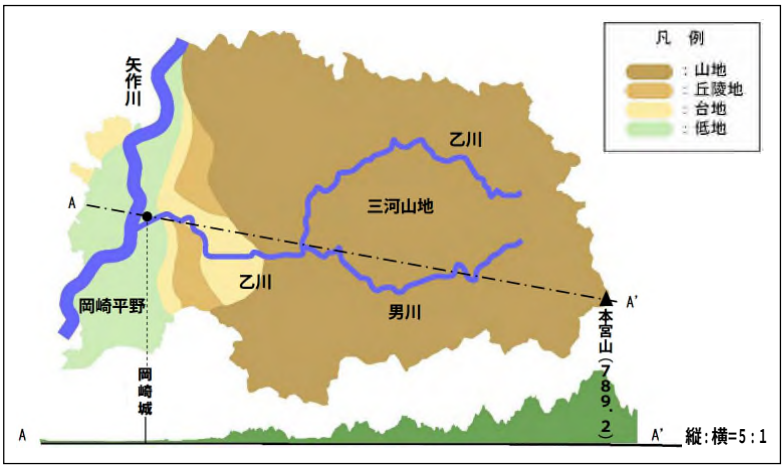


図1-2-1　岡崎市の高低差

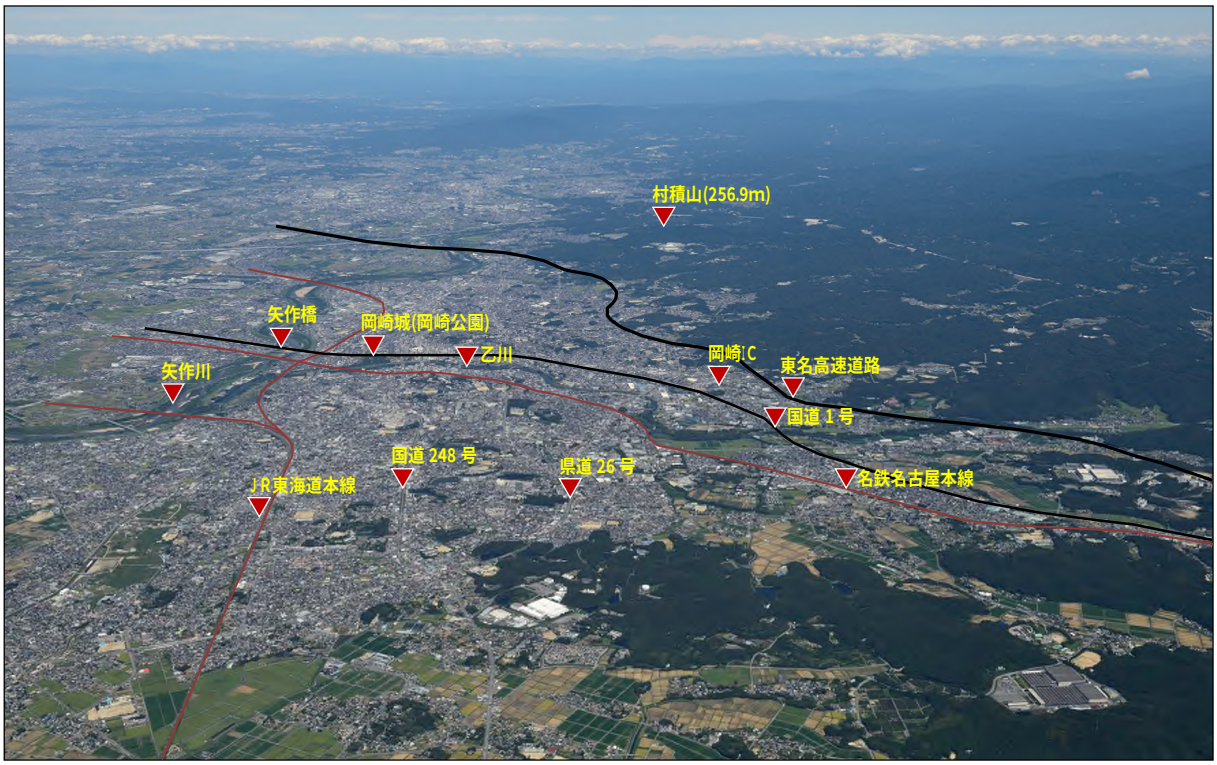
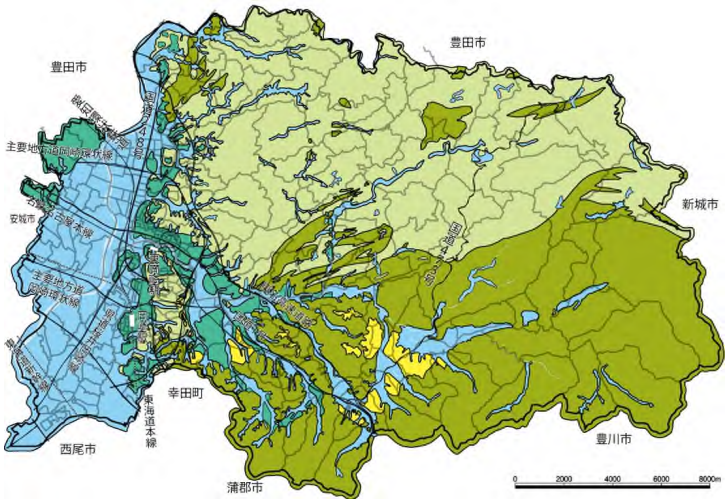


図1-2-2　航空写真(岡崎市街地)

(2)地質

中心部から北東部の山地を形成するのは白亜紀に作られた花崗岩類であり、良質の花崗石が採れたことから江戸時代より石製品づくりが盛んとなり、石都・岡崎として発展していった。南東部の山地を形成するのは同じく白亜紀に作られた変成岩類であり、丘陵地には新第三紀に作られた砂岩、シルト岩、礫岩が分布する。平野部は、第四紀に作られた礫・砂からなる段丘堆積物が分布しており、平野部の西側は矢作川が運んできた礫、砂、粘土が堆積してできた洪積層や沖積層により形成されている。



百万年前	地質年代		地質名 岩石名	凡例	地質の特徴	地形区分
0.01	第四紀	完新世	沖積層	A	低地を形成する未固結な砂、れき、粘土などです。	低地部 山間低地部
2		更新世	洪積層	D	低地の周辺に分布する段丘を形成する砂れき、砂、粘性土などです。沖積層よりは締りのよい地層です。	台地
65	新第三紀	鮮新世 / 中新世	新第三紀層	Tn	丘陵地を形成する半固結～固結した砂岩、シルト岩、れき岩などです。	丘陵地
77	白亜紀		領家新期花崗岩類	Gr	山地を形成する岩盤です。花崗岩類と変成岩類が分布します。いずれも新鮮部は硬質ですが、地表部付近では、割れ目が発達し、割れ目に沿って風化が進んでいます。	山地部
100			領家変成岩類	Ry		

図1-2-3　地形･地質

(3)河川

中央アルプス南端の長野県に源を発する矢作川が岡崎平野の丘陵地を北から南へ貫流し、清流がゆるく流れて三河湾に注いでいる。矢作川によって形成された沖積地は見事な水田地帯となっており、豊富な表流水及び伏流水は水力発電、農工業用水、そして飲料水として利用されている。矢作川の主な支流は、巴山に源を発する乙川、本宮山に源を発する男川等であり、矢作川と乙川の合流部付近に、中心市街地が広がっている。

乙川は、市域を東から西へと流れ下るにつれて、ホタルの生息地としても知られる山間部の渓流から、市街地の中心部、河川緑地が整備された川幅の大きな下流部へと姿を変化させる。青木川が流れる滝町では、明治時代からその水流を使用したガラ紡績が盛んになり、近隣の郡界川、男川、山綱川、鉢地川等の流域各地に広がり発展していった。

図1-2-4　河川の分布

(4)気候

７月～８月の夏季の平均気温は27℃前後、12月～２月の冬季の平均気温は５℃前後である。年間平均気温は16℃前後であり、四季を通じて温暖な気候である。

降水量は一年を通じて６月～７月、また９月～10月が多く、年間平均降水量は1,300ミリ程度である。降雪はほとんどない。

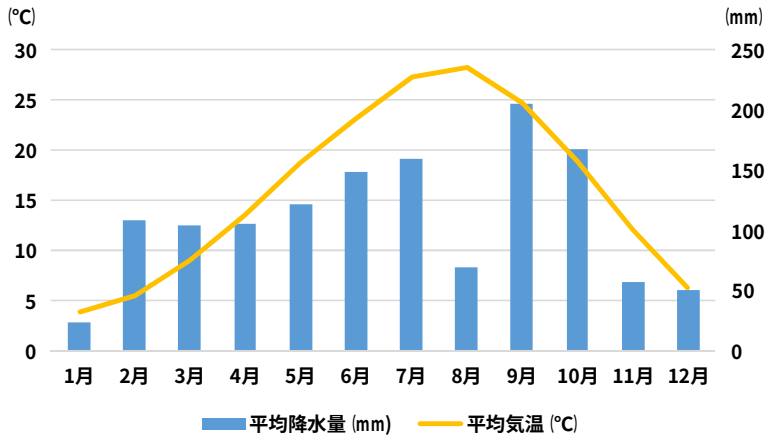


図1-2-5　平均気温と平均降水量(平成22年(2010)～26年(2014))

1-3.社会的環境

(1)人口

①総人口の推移と将来推計人口

平成 27 年(2015)10 月 1 日の国勢調査によれば、人口は 381,051 人であり、県内では名古屋市、豊田市に次ぐ 3 番目の規模である。増加傾向が続いており、平成 2 年(1990)に 30 万人を超え、平成 18 年(2006)に旧額田町との合併を経て、現在まで順調に推移している。今後もゆるやかに増加を続け、令和 12 年(2030)の 396,056 人をピークに、その後減少に転じると推計されている。

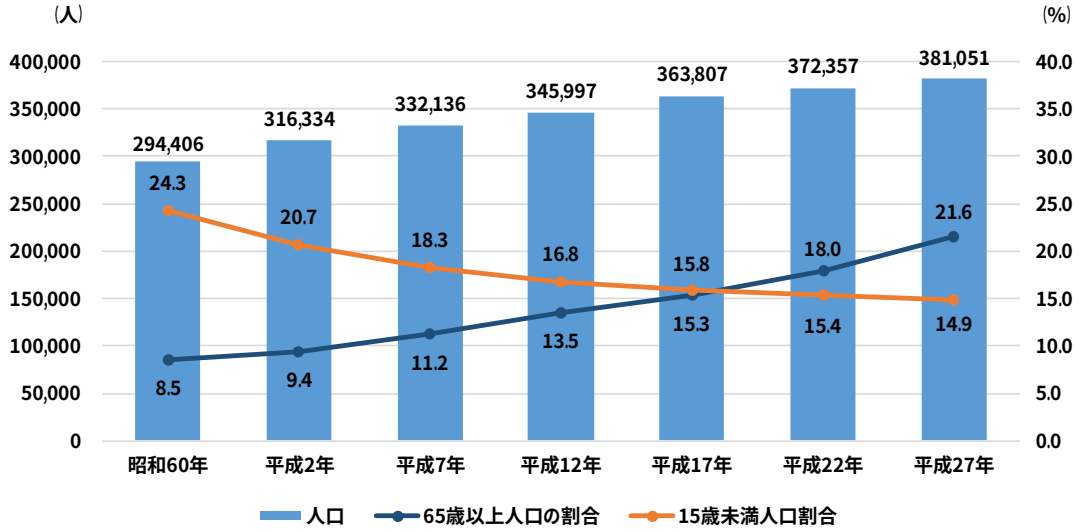


図1-3-1　総人口の推移と老年人口･年少人口の割合
※旧岡崎市と旧額田町の数値を合算したもの

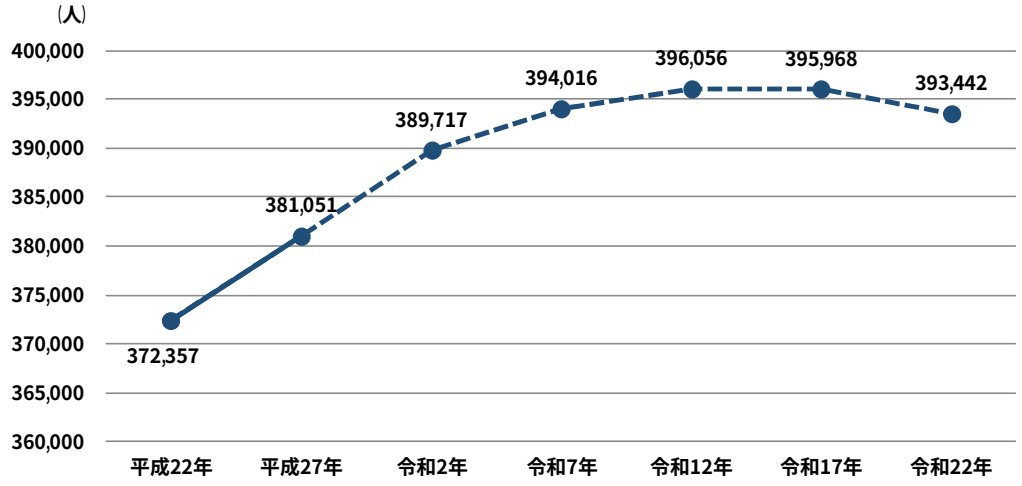


図1-3-2　将来推計人口(総人口)

②年齢別人口

平成 27 年３月の年齢別の構成比は、15 歳未満の年少人口が 57,344 人(15.06%)、15～64 歳の生産年齢人口が 243,380 人(63.91%)、65 歳以上の老年人口が 80,098 人(21.03%)となり、初めて老年人口の割合が 21%を超え、超高齢社会に突入した。平成 18 年(2006)11 月に 65 歳以上の老年人口が 15 歳未満の年少人口を上回り、年少人口及び生産年齢人口は減少し続け、老年人口は増加を続けている。老年人口割合は今後も上昇が続き、令和 22 年(2040)には 30.8%になると推計されている。

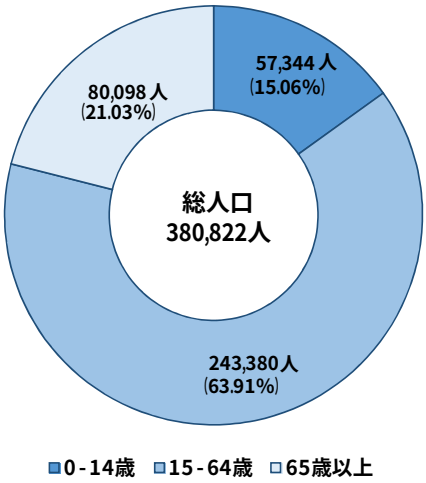


図1-3-3　人口の年齢別構成
(平成 27 年(2015)3月1日現在)

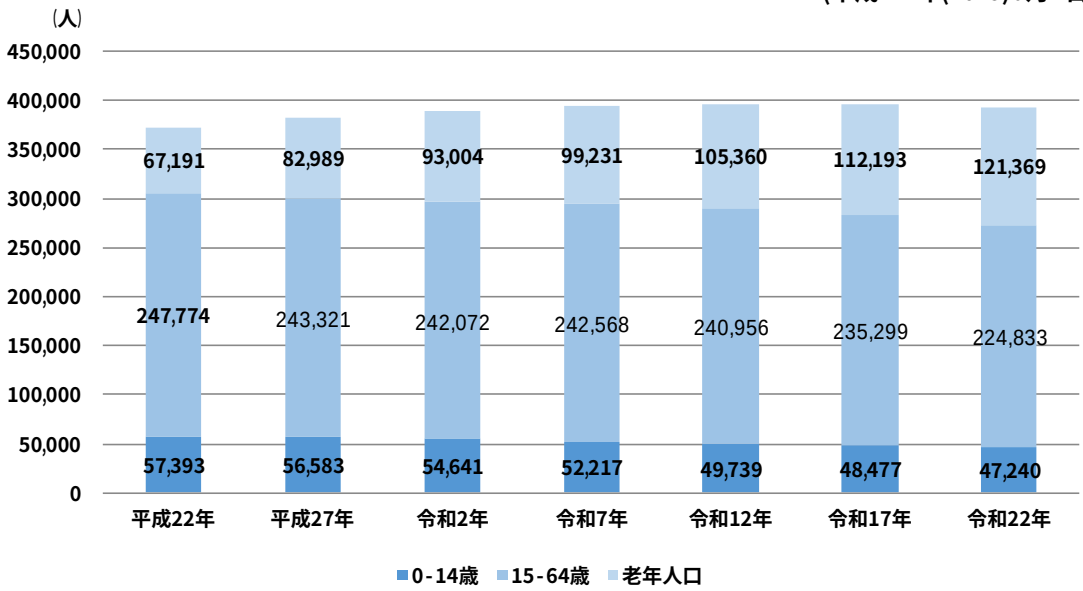


図1-3-4　将来推計人口(年齢3区分)

③世帯数

人口が増加するにしたがって世帯数も増えていくが、一世帯当り人員数は減少している。

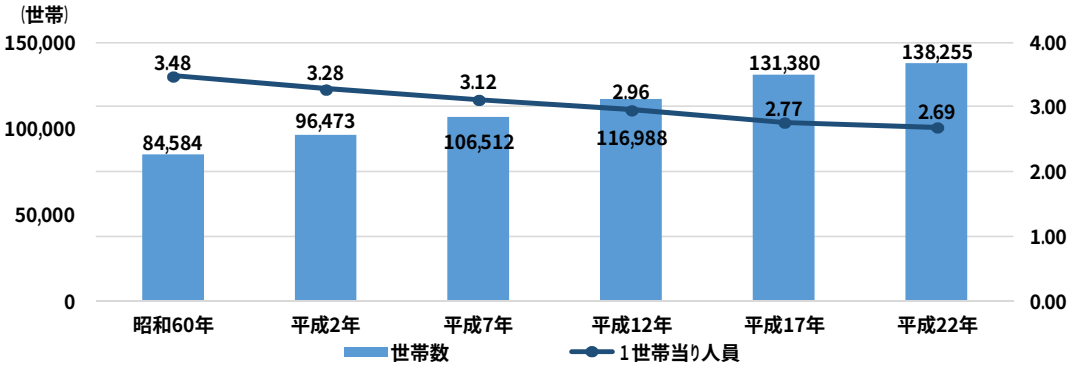


図1-3-5　世帯数

(2)土地利用

土地利用の構成比は、森林が市域の59.9%を占め、宅地 11.8%、農地 8.8%である。

なお、森林のうち 98.4%が私有林であり、国有林は 1.3%である。また、宅地の 64.3%が住宅地であり、11.9%が工業用地である。

市域の 67.3%が都市計画区域であり、そのうち 22.2%(市域面積の 15.0%)が市街化区域である。

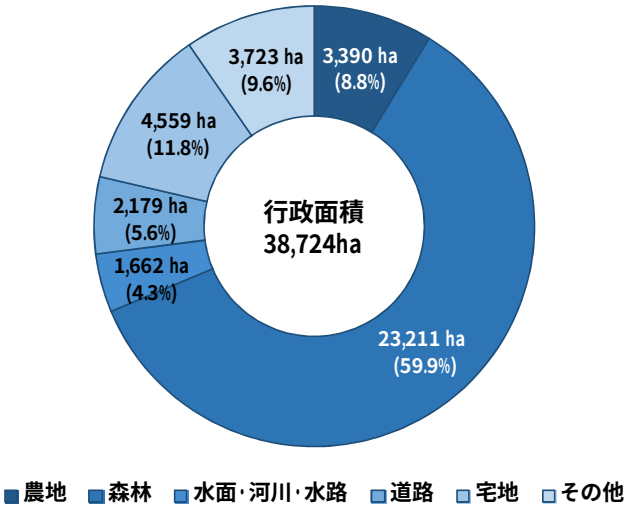


図1-3-6　地目別土地利用面積の構成比
(平成 26 年(2014)度)

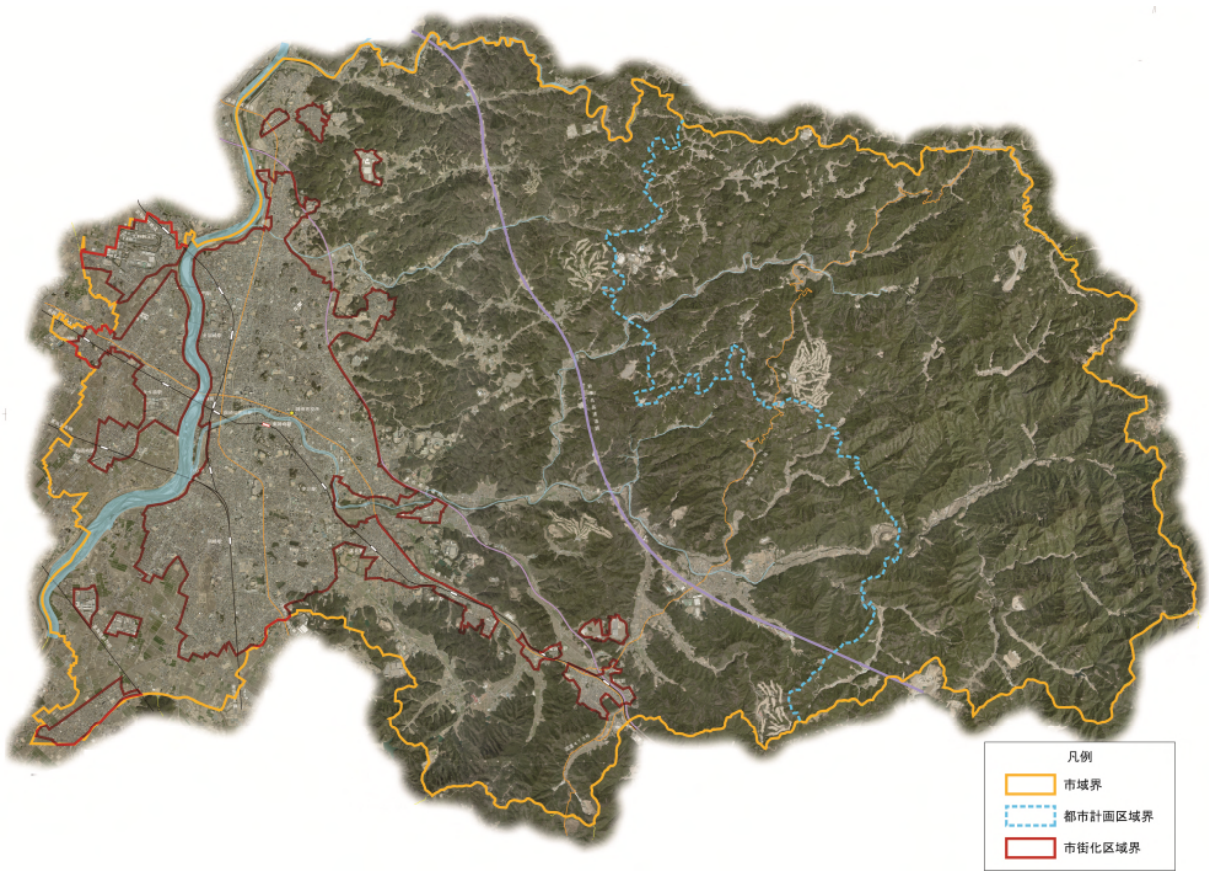


図1-3-7　岡崎市全域の航空写真

(3)交通

東西には、東京都中央区を起点として大阪市へ至る国道１号が横断し、南北には、蒲郡市（がまごおりし）を起点として岐阜市へ至る国道 248 号と、蒲郡市を起点として牧之原市へ至る国道 473 号が縦貫している。これらを軸として、主要地方道岡崎環状線、主要地方道岡崎刈谷線等の県道で幹線道路網が形成されている。広域交通網としては、東名高速道路が市域を東西に走り、岡崎インターチェンジが供用されている。これに加えて、平成 28 年(2016) 2 月に新東名高速道路が開通し、岡崎東インターチェンジが供用開始された。

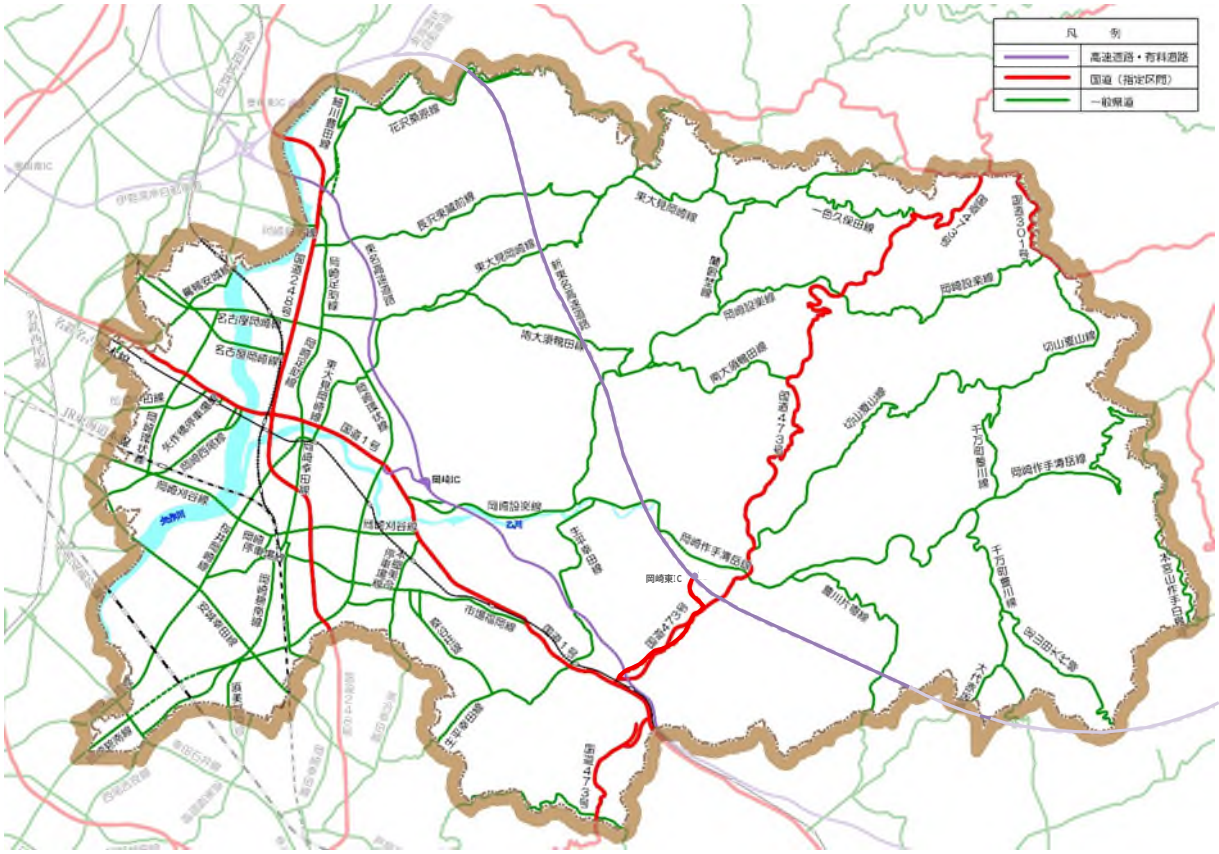


図1-3-8　道路網図

鉄道は、JR 東海道本線に２駅、名鉄名古屋本線に９駅、愛知環状鉄道に６駅を有している。市街地を中心に、名鉄が東西を、JR が南と西を、愛環が南北を結んでいる。平成 25 年(2013)度の市内鉄道利用者は約 2,388 万人であり、近年増加傾向にある。

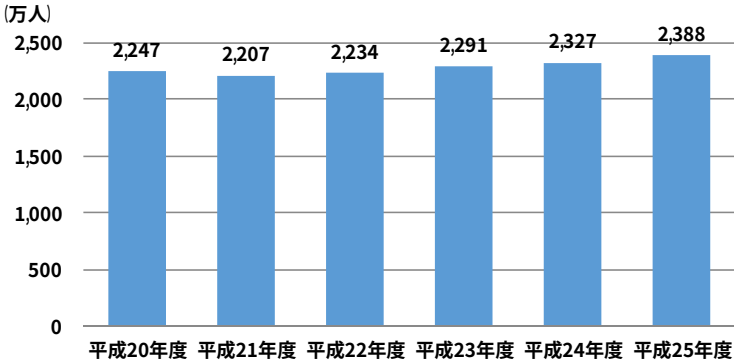


図1-3-9　市内鉄道利用者数(乗客数)

バス路線は約 50 路線ある。名鉄東岡崎駅、大樹寺、岡崎市民病院、JR 岡崎駅、名鉄美合(みあい)駅等を起終点とし、それら拠点間を結ぶ基幹路線と日常の生活拠点を中心とした地域内交通のネットワークが形成されている。

平成 25 年(2013)度のバス利用者数は約 672 万人であり、近年横ばい傾向にある。

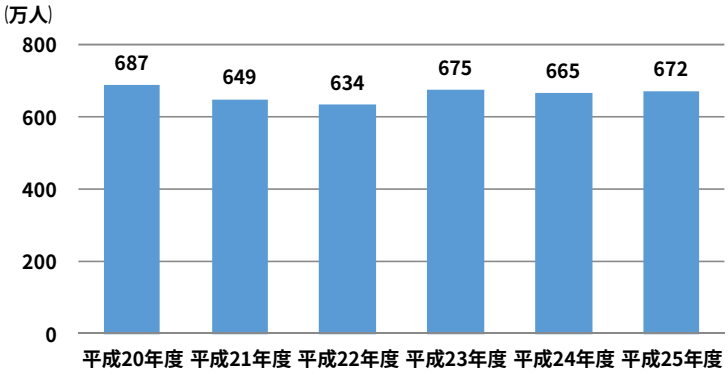


図1-3-10 市内バス利用者数(乗客数)

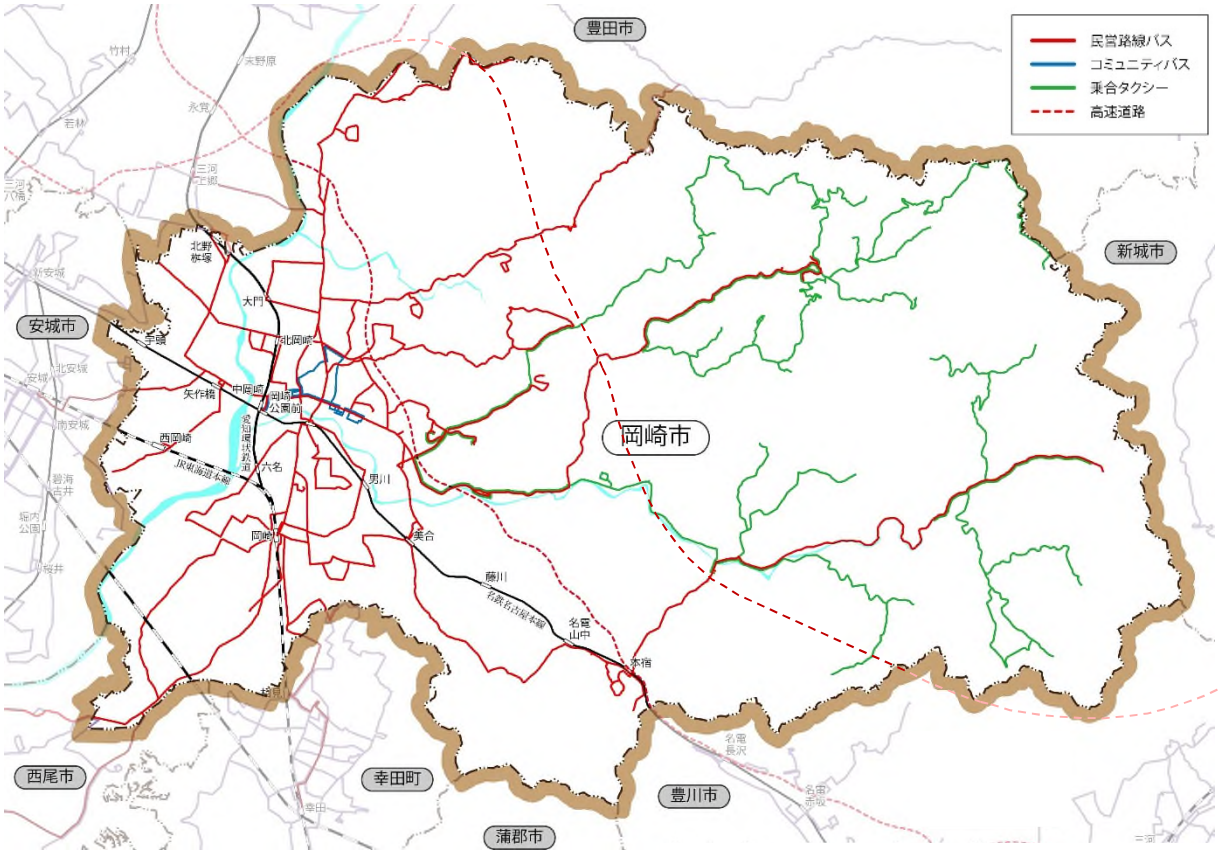


図1-3-11 鉄道･バス路線網図

岡崎の名の由来

岡崎には、丘の先という意味があるといわれている。15 世紀半ばに岡崎城が築かれた当時は、現在の菅生川(乙川)南岸の明大寺付近が岡崎と呼ばれていたが、享禄3年(1530)～4年(1531)に、松平清康が現在の場所に居城を移し、広い範囲が岡崎と呼ばれるようになった。

江戸時代末期の「三河国名所図会」によると、「岡崎は享禄(1528～1531)以来の名號にして、其以前は菅生郷なり」と記されており、この時期に岡崎という地名が定着していったと考えられている。

東海道とは

東海道は、律令時代(7世紀後半～10 世紀頃)、諸国の国府を結ぶものとして設けられた七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)のうちの1つである。しかし、その後の時代においては、気候、地勢、旅程目的等により道筋は変化し、定まっていなかったようである。

慶長6年(1601)、徳川家康公により、交通と運輸の便宜を図るため進められた五街道(東海道、中山道、奥州道中、日光道中、甲州道中)の整備によって、日本橋(江戸)から三条大橋(京都)までを 53 箇所の宿駅でつなぐ、総延長約 495.5 キロメートルの東海道が誕生する。

岡崎城下では、田中吉政(城主時代 1590～1600)の城下町整備を受け継ぎ、本多康重（藩主時代 1601～1611）の時代に進められた城下町整備において、これまで菅生川(乙川)の南を通っていた東海道を城下に引き入れるなど、度重なる変更により、現在確認できる旧東海道の道筋になった。「東海道二十七曲り」は、この頃に整備されたものである。

新東名高速道路とは

新東名高速道路は、法定路線名を「第二東海自動車道横浜名古屋線」と言い、神奈川県海老名市と愛知県豊田市を結ぶ高速自動車国道である。なお、豊田市から大阪までは、伊勢湾岸自動車道を経由して、新名神高速道路や東名阪自動車道に接続して至る。

新東名高速道路の区間は、東名高速道路の東側をほぼ並行して南東から北西に通っている。

(4)産業

平成 22 年(2010)の国勢調査によると、15 歳以上就業者総数 186,827 人のうち、第１次産業就業者は 1.6%の 2,972 人、第２次産業就業者は 40.1%の 71,978 人、第３次産業就業者は 58.3%の 104,696 人である。分類不能(7,181 人)を除くと、第２次産業と第３次産業の就業者数が 98%以上を占めている。

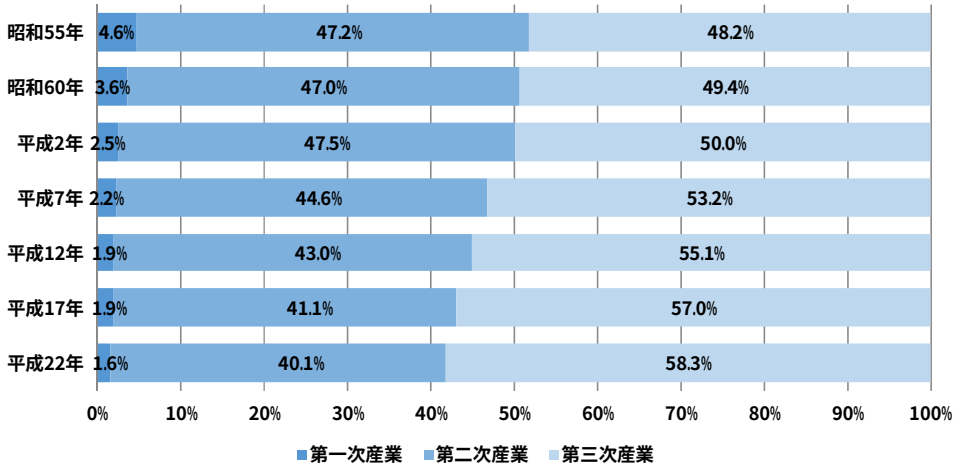


図1-3-12　産業別就業者数(15 歳以上)

①農業

温暖な気候、矢作川(やはぎがわ)や乙川水系の豊富な水、肥沃な大地等の恵まれた風土を活かし、平野部では水稲、麦、大豆を主体とした土地利用型農業を中心に、いちご、なす、花き等の施設園芸が行われている。丘陵地では、ぶどう、柿等の果樹栽培、酪農、養豚、養鶏等の畜産業が行われている。

図1-3-13　ぶどう(岡崎市のブランド化推進品目)

②工業

戦前から繊維工業を中心として発展し、戦後は重化学工業が目覚ましく発達した。近年は、自動車を始めとする輸送用機械、生産用機械、金属製品等の製造業のほか、エレクトロニクス、メカトロニクス産業等の最先端産業も進出し、バランスのとれた工業立地が進んでいる。

平成 25 年(2013)の製造品出荷額等は約１兆 6,191 億円で、県内６位である。

図1-3-14　岡崎東部工業団地

③商業

古くから西三河地域随一の商業力を誇っており、東海地方最大級のショッピングセンターを始め、大規模小売店舗の立地により、平成 24 年(2012)の年間商品販売額は約 8,689 億円であり、県内では、名古屋市、豊田市、豊橋市に次ぐ第４位の商業力を有している。

近年は大規模小売店舗の進出等により、中心市街地を始め地域の商店街では顧客離れの傾向にあり、様々な活性化対策やコミュニティ強化に取り組んでいる。

(5)観光

岡崎城を始め、家康公ゆかりの社寺、宿場町等の歴史・文化的な資源や、桜や紅葉等の名所である自然的な資源等の多数の観光資源を有している。また、絢爛豪華な時代絵巻を展開する春の風物詩「家康行列」を始め、夏の夜空を大輪の花火が彩る「岡崎城下家康公夏まつり」、三河路に春を告げる「滝山寺鬼祭り」など、四季を通して様々な催しが行われている。

観光入り込み客数を種類別に整理すると下図のとおりとなる。「行祭事・イベント」が最も高く、全体の約 32%を占め、約 185 万人が訪れている。次いで「スポーツ・レクリエーション」が約 27%を占め、約 160 万人が訪れている。

特に全入り込み客数のうち岡崎城跡観光地点として「岡崎城」、「三河武士のやかた家康館」、「岡崎公園」の合計数をみてみると、約 80 万人となり全体の約 14%である。

図1-3-15　家康行列

図1-3-16　滝山寺鬼祭り

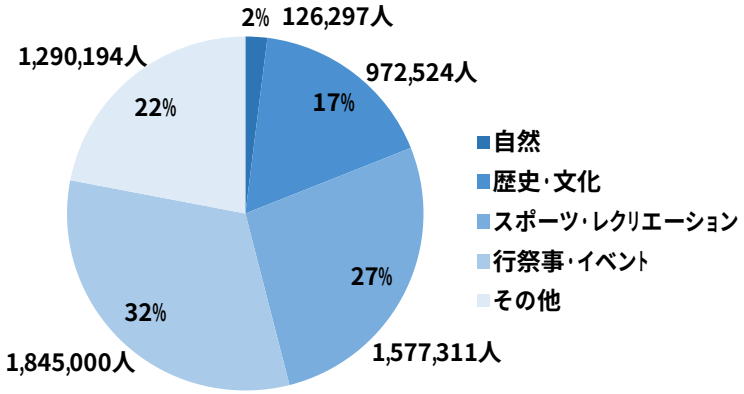


図1-3-17　主要観光施設入り込み客数（種類別）(平成 25 年(2013))

表1-3-1　主要観光施設入り込み客数(平成 25 年(2013))

種類	施設など名称	入込客数(人)	入込客数合計(人)
1	くらがり渓谷	114,160	126,297
	男川やな	12,137	
2	岡崎城※	207,042	972,524
	三河武士のやかた家康館※	133,457	
	大樹寺	22,129	
	六所神社	50,000	
	岩津天満宮	350,000	
	八丁味噌の郷	196,019	
	まるや八丁味噌	13,877	
3	岡崎公園※	459,300	1,577,311
	岡崎市東公園	342,252	
	岡崎市南公園	395,253	
	駒立ぶどう狩り組合	62,326	
	岡崎カントリー倶楽部	51,671	
	岡崎地域文化広場	147,800	
	額田ゴルフ倶楽部	70,103	
	サン・ベルグラビアカントリー倶楽部	48,606	
4	桜まつり	583,000	1,845,000
	家康行列	250,000	
	藤まつり	400,000	
	将棋まつり	7,000	
	岡崎城下家康公夏まつり	125,000	
	岡崎観光夏まつり（花火大会）	480,000	
5	道の駅藤川宿	1,290,194	1,290,194

※網掛けされているものは、岡崎城跡観光地点の入込客数

平成 26 年(2014)度の岡崎城の入場者数は 186,567 人で、16 年ぶりに 20 万人を超えた平成 24 年(2012)度と比べて減少したものの、近年はやや増加傾向にある。

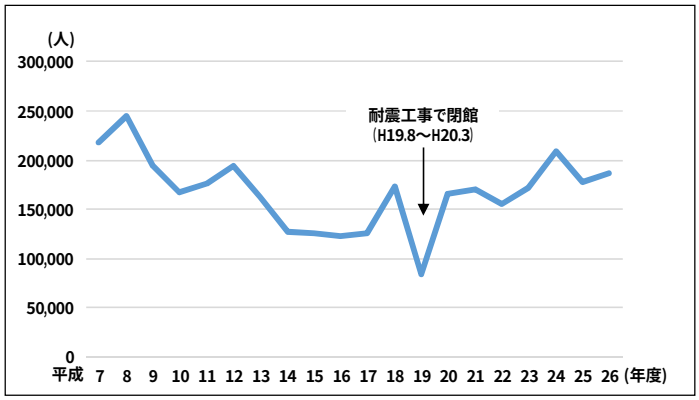


図1-3-18　岡崎城入館者数の推移

1-4.歴史的変遷

岡崎の歴史は後期旧石器時代(紀元前１万 4000 年)に始まり、縄文(紀元前１万～1000 年)、弥生(紀元前 400 年～紀元 200 年)及び古墳時代(紀元 300 年～600 年)に栄えたとされる矢作川流域の文化を素地としている。その後、岡崎城や東海道を取り込んだ城下町等が骨格となり、度重なる市町村合併等により拡大、発展してきた。

岡崎は、鎌倉幕府を開いた源氏や室町幕府を開いた足利氏の重要拠点、そして徳川家康公生誕の地として発展した武家文化を始め、商人、町人等が創り、守り続けてきた伝統行事や祭礼、産業、食、信仰等が、戦災の猛火を乗り越えて、現在のまちのそこかしこに息づき、継承され続けてきた歴史を垣間見ることができる。

(1)原始　[岡崎の起源]

①旧石器･縄文･弥生時代　～矢作川流域における文化の発祥～

後期旧石器時代(約３万年前)に生活の場として適していたと思われる中位段丘面が、現在の康生町、伝馬、大樹寺、岩津町等の集落や JR 岡崎駅周辺の市街地が分布する範囲に発達している。また、低位段丘面が乙川流域の両岸の明大寺、菅生町、栄町、大平町等の市街地が形成されている範囲に広がっている。

乙川左岸の標高約 40 メートルの中位段丘上にある五本松遺跡(美合町)では、後期旧石器時代のナイフ形石器や細石刃等の石器類、縄文時代の石鏃や弥生時代の土器が見つかり、地域一帯が旧石器時代から弥生時代にかけて人々の生活に適した場であったことを推察させる。

また、乙川と合流する男川の左岸緩斜面に広がる西牧野遺跡(樫山町、牧平町)では、旧石器時代の石器類が 4,400 点と多数出土しており、山間地の開けた場所で安定した暮らしが営まれていたことをうかがわせている。

国指定史跡の真宮遺跡(真宮町・六名１丁目)は、矢作川と乙川の合流点付近に縄文時代晩期の平地式住居と土器棺墓群等からなる集落遺跡で、人々の生活は鎌倉時代に至るまで連綿と続いている。

図1-4-1　真宮遺跡の平地式住居と土器棺墓（復元）

矢作川河床遺跡は、天神橋上流の井戸状遺構(細川町)から美矢井橋下流の井戸状遺構(合歓木町)までの約13キロメートルにも渡る広範囲な遺跡で、縄文時代草創期から近世にいたる多数の遺物が採集されている。近世の築堤によって矢作川の流路が定められ河床となってし

まったが、「郡府」と墨で書かれた役所で使われていたとみられる奈良時代の土器等も見つかり、当時の人々の重要な生活の舞台であったことがわかる。これら多数の遺跡から、岡崎の文化の発祥は、河川沿岸の台地や丘陵地であったことが推察される。

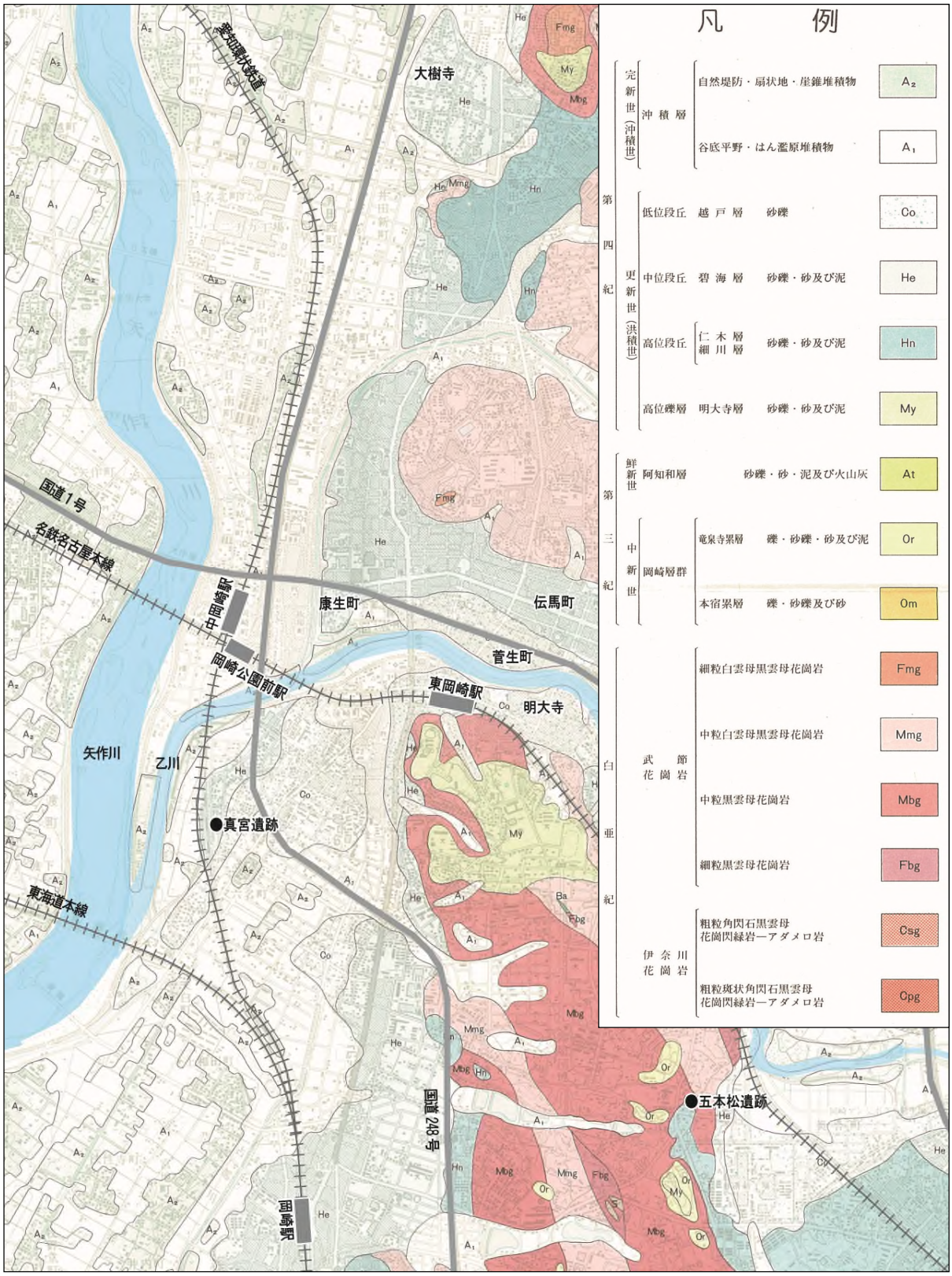


図1-4-2　矢作川･乙川流域の地形と現在の市街地等

図1-4-3　矢作川の様子(天神橋下流より)

②古墳時代　～首長層の出現と古墳群の形成～

古墳時代に造営された墳墓である古墳は、いずれも矢作川や支流の乙川、巴川、北斗川、真福寺川、青木川に沿った場所に所在している。

古墳時代前期の４世紀後半から中期の５世紀初頭に造営された大型古墳の和志山古墳(全長約 60 メートルの前方後円墳、西本郷町)や甲山第１号墳(直径約 60 メートルの円墳、前方後円墳説もあり。六供町)は、その規模や立地等から地域を支配した首長の墓であると推察されており、当時、統治社会が形成されていたことを示している。なお、和志山古墳は、景行天皇[1]の第 11 皇子五十狭城入彦の墓として陵墓に指定されており、宮内庁の管理地となっている。

古墳時代中期の５世紀中頃には、首長の墓はやや小型化し、人物埴輪等が出土した太夫塚古墳(直径 36 メートルの円墳、若松町)や馬具や囲形埴輪等が出土した経ヶ峰第１号墳(長さ約 35 メートルの帆立貝形古墳、丸山町)等は河川交通の要所に臨む場所に築かれた。

図1-4-4　太夫塚古墳

古墳時代後期の６世紀代以降に築造された古墳は群集墳を形成し、市内で約 200 基を数える。これらの古墳は、直径 10～20 メートル程度のものが多く、追葬が可能な横穴式石室を持つことが特徴である。首長墓の中には、神明宮第１

[1] 第 12 代に数えられる天皇。名は大足彦尊(おおたらしひこのみこと)。垂仁天皇の第３皇子。『記紀』では紀元後 51 年に天皇になり、以後 60 年間即位し、日本武尊(やまとたけるのみこと)の父とされている。

号墳(石室長 11.8 メートル、丸山町)、岩津第 1 号墳(石室長 10 メートル、岩津町)等の西三河最大規模の横穴式石室をもつ円墳も現れる。先に示した当時の支配者の墓だけでなく、その地域の有力農民やその家族のものもあると推察されている。主な古墳群として、北部地区では巴川左岸から北斗川流域に所在する細川・仁木古墳群(11 基)、岩津天満宮周辺の丘陵上に所在する岩津古墳群(６基)、東部地区では乙川中流域右岸に所在する亀山古墳群(５基)や経ケ峰古墳群(３基)を包括する丸山古墳群、西部地区では碧海台地上に所在する小針古墳群(６基)・宇頭古墳群(16 基)、中南部の明大寺丘陵部周辺に所在する外山古墳群(３基)・小豆坂古墳群(６基)等が挙げられる。

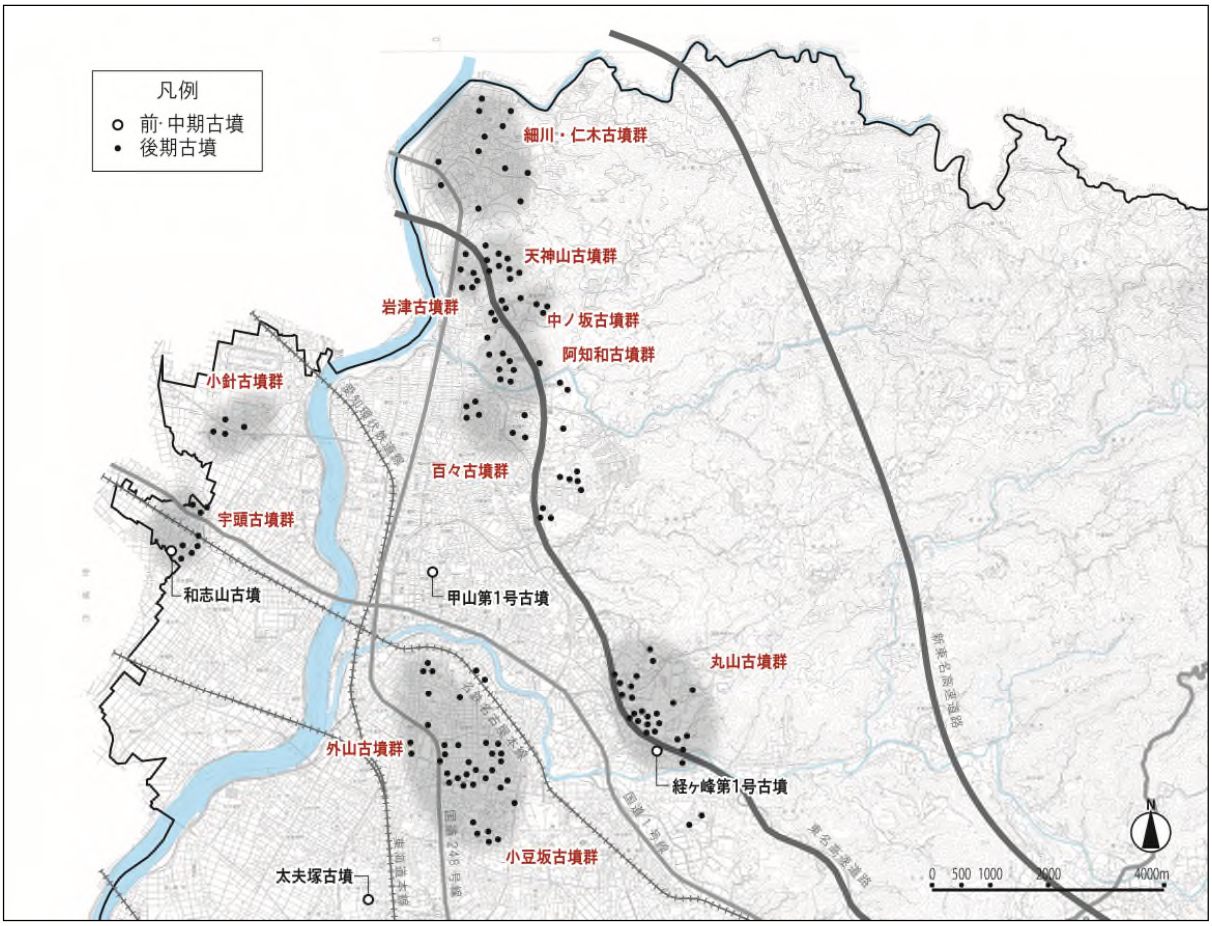


図1-4-5　古墳の分布

(2)古代［三河国の成立］

①飛鳥時代　～古代寺院の造営～

７世紀後期(飛鳥時代後期)になると律令制が実施され、律令国家は「国－郡－里(郷)」という行政区分によって全国を統一的に掌握するようになった。現在の岡崎市は古代三河国の額田郡と碧海郡の一部に含まれる地域にあたる。10 世紀に編さんされた『和名抄』によると、額田郡の鴨田郷や位賀郷(謂我郷)のように現在までその名が町名として残っているところもあり、その郷の位置から矢作川沿いに多くの人々が住んでいたことがわかる。

仏教文化の伝来や律令国家による古墳づくりの規制により、古墳造営は７世紀半ばを過ぎると減少し、８世紀初めにはほとんど築造されなくなった。その後、寺院をつくることが権力誇示の手段となり、７世紀後半に矢作川右岸の渡河点付近に北野廃寺(北野町)が建立された。北野廃寺は塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ四天王寺式の壮大な伽藍を持つ西三河最古の寺で、その跡は国史跡に指定されている。北野廃寺の瓦は、矢作川流域から遠く長野県飯田まで広がり、周辺の仏教文化に影響を与えた。北野廃寺と同じ型の瓦が使われた同時代の真福寺東谷遺跡(真福寺町)が対岸の山頂にある。

この時代、愛知県は尾張国造、三河国造、穂国造の勢力下で３つの地域に分かれていた。岡崎を含む西三河周辺は三河国造が支配し、最初の三河国造は『先代旧事本紀』に知波夜命と記されている。知波夜命は実在したか否かは判然としないが、祖先をたどると物部氏の祖先と結び付いていることから、この地域と物部氏との結び付きは古くからあったと考えられている。また、三河には有力な豪族の私有民であった部曲がいた。特に西三河には物部氏の部曲である物部が多数存在し、物部連により管理されていたと考えられている。このようなことからも当時この地域が物部氏の影響下にあったことがうかがい知れる。

なお、物部氏と三河の密接な結び付きは、古くから岡崎にある寺社にも見られる。東阿知和町にある謁播神社も知波夜命を祭神として祀っており、真福寺には物部真福により寺が創建されたという伝説も伝わっている。また『滝山寺縁起』には物部のことが記されているなど、特に現在の市北西部は関係が深かったと考えられる。

図1-4-6　北野廃寺跡

図1-4-7　北野廃寺跡から出土した瓦

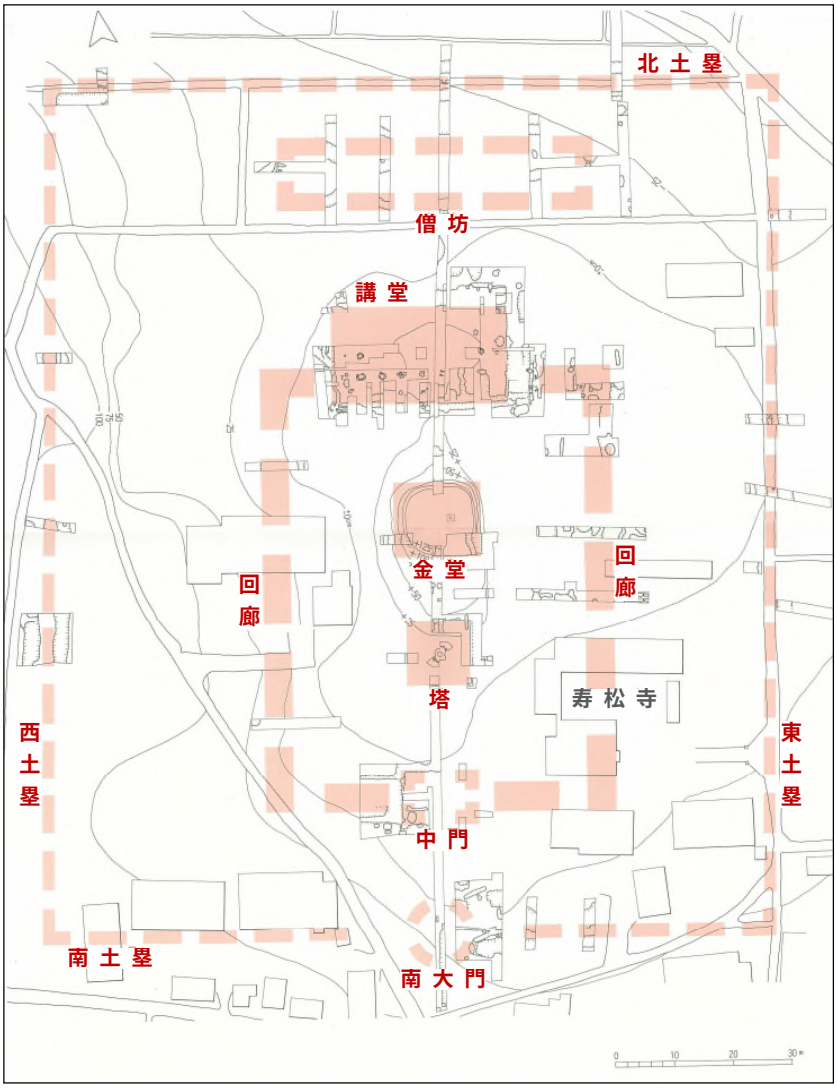


図1-4-8　北野廃寺跡の伽藍配置

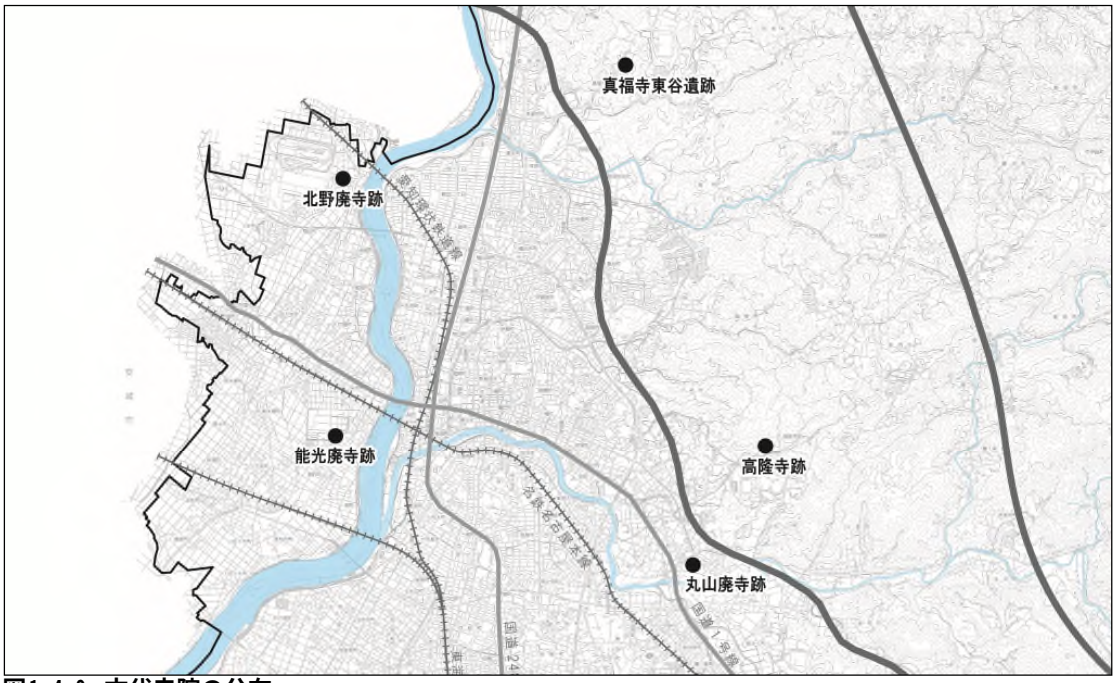


図1-4-9　古代寺院の分布

②奈良時代　～律令国家による東海道の整備～

三河国には律令国家が整備した七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)の一つである東海道が通っていた。要所には、駅制に基づく国の施設である駅家が設置され、中央に急を知らせる通信手段が確立されていた。駅家は、30里(約16キロメートル)に1駅の割合で設置され、いつでも使えるように駅馬を常備していた。

延長5年(927)に完成した『延喜式』によれば、市内には碧海郡の鳥取(捕)駅家、額田郡の山綱駅家の2つの駅家の存在が考えられる。鳥取駅家は小針町付近にあった鷲取郷に隣接する宇頭町から矢作町のどこかに存在していたとされ、一方、山綱駅家は、山綱町にその地名を残していることから、山綱町を含むその周辺地域に存在していたと考えられている。

なお、『正倉院文書』により、天平勝宝2年(750)に物部氏が駅家郷にいたと記され、山綱駅家に古代の軍事氏族であった物部氏が関係していたことから、古代の道は税を都に運ぶ道であるとともに、軍事的な役割を担っていたこともうかがえる。

③平安時代　～藤原氏による支配～

11世紀後半、三河国は藤原季兼が開発領主として市域の農地開発を行っていたと考えられている。藤原南家武智麻呂の子孫にあたり、中国の学問を教える職(文章博士)についた藤原実範の子である季兼は、自らの領地である三河国に居住し、「参川四郎大夫」とも号した。季兼は、農地開発した土地を国衙から認められた私領として郡規模に拡大したとされる。季兼は熱田大宮司尾張員職の娘、松御前と結婚し、晩年は尾張国の目代(国司の下級役人)も務めた。

季兼の子の季範は、幼少期は額田で成長したことから「額田冠者」と呼ばれた。季範は、12歳の時に季兼が亡くなり母方の祖父により養育され、後に季範は熱田神宮の大宮司職の地位を譲り受けることとなる。さらに、季範は尾張国の目代にもなったことから、三河と尾張の2つの国に拠点を得ることなり、藤原氏が大きく勢力を拡大し、これまでこれらの地を支配していた物部氏との勢力交替が起こった。

コラム　三河の名の由来

三河の名は、矢作川の尊称・美称として「御河(川)」や「美河(川)」と呼んだことから由来しているという説がある。『古事記』(和銅5年(712)編さん)において「三川」と記されているほか、奈良県明日香村石神遺跡から出土した7世紀後半と見られる木簡に、「三川穂評穂里穂部佐」(意味:「三河(国) 穂評(ほのこおり)穂里(ほのさと)の穂部佐(ほべのたすく)」という人名であると解釈されている。)とあり、「三川」が記されている。また、他に「参河」の表記もあり、全て現在の三河を指し、三河の地を流れる豊川、矢作川、菅生川(乙川)の3つの河川に由来していると考えられ、他にも豊川、矢作川、境川の3川とする説などもあるが、いずれも通説には至っていない。

(3)中世 [武家文化の重要拠点]

①鎌倉時代

ア.鎌倉街道矢作宿

東海道と矢作川の渡河点には、矢作の渡し場が東西にあり、平安時代に流行した催馬楽に「矢作の市に沓買ひにかむ」と歌われ、早くから市が形成されていた。鎌倉時代、東海道は京都御所と鎌倉幕府を結ぶ重要な道となった。中世には京都から数えて 26 番目の宿駅である矢作宿は、宿泊施設や日用品を生産・販売する職人や商人の店が建ち並ぶなど、東西交通の要衝として大いに賑わいを見せていた。政治、経済、文化の中心地であり、近世城下町とは異なる商業中心の町であったと考えられている。

当時の矢作宿は、矢作川をはさんで東西に位置していた。東側の矢作東宿は、現在の八帖町、明大寺町、六名付近と推定とされ、一方、西側の矢作西宿は現矢作町の辺りを中心に、あるいは渡町をも含んでいたと考えられている。

イ.源氏･足利氏の三河支配

藤原季範の娘、由良御前と源義朝との間に生まれた３男で鎌倉幕府を開いた源頼朝は全国支配の中で三河国を政治的・軍事的に重要視し、三河国の守護・地頭には有力な御家人を任命した。そのため、東国武士の三河進出がめざましく、源氏と三河国の武士の結びつきは古くから強いものとなっていった。承久の乱(1221)の恩賞地として額田郡が足利義氏の領地となり、義氏は三河守護職、額田・設楽郡地頭職等に任ぜられた。『吾妻鏡』嘉禎４年(1238)の記述に、義氏の屋敷に４代将軍源頼経が宿泊したとあり、その一族や家臣達の屋敷や額田郡公文所も矢作宿の辺りに並んでいたと考えられている。鎌倉時代を通じて、矢作川中下流域を中心に、この地域の土地の名を名字とした、一色氏、仁木氏、細川氏等の足利氏の一族や家臣が多く生まれ育っており、その一族が後の三河武士の源流となっていっ

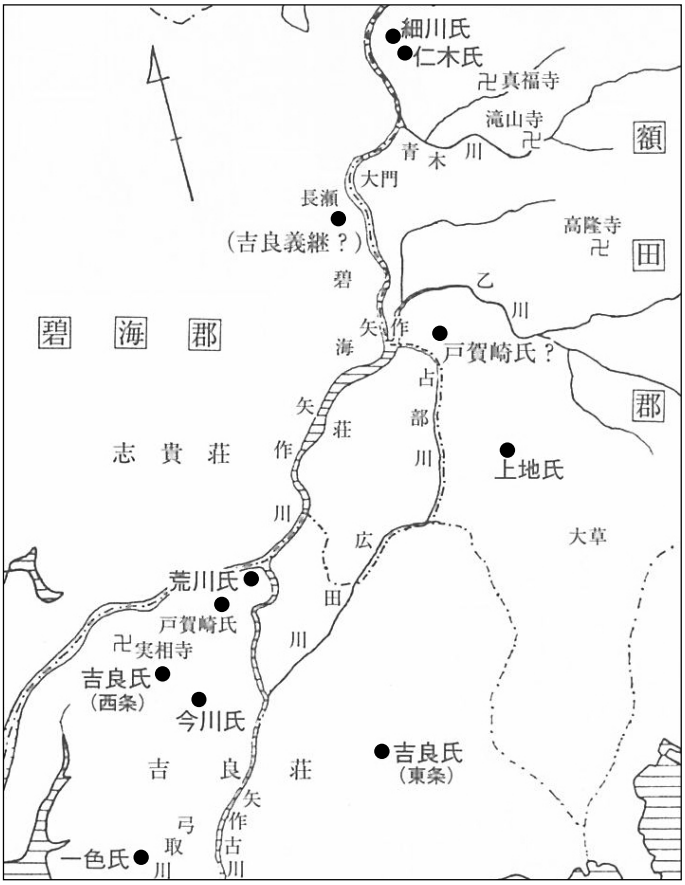


図1-4-10 矢作川中下流域に広がる足利一族

た。また、天恩寺を開創した永源寺２世弥天永釈により、足利氏が帰依した臨済宗が額田・作手(新城市)の三河山間部へ広まった。

足利義氏の子孫の尊氏が室町幕府を開くと、三河は幕府の直轄地として更に栄えた。源頼朝が大伽藍を建立し足利義氏が本堂を建立した滝山寺や、足利義満が建立した天恩寺等の寺院は、足利氏により寺領や堂舎・什物の寄進などを受け厚い庇護を受けた。中でも滝山寺は中世から時々の権力者の庇護を受け再建されてきた寺院で、特に源氏・足利氏との関係が深い。

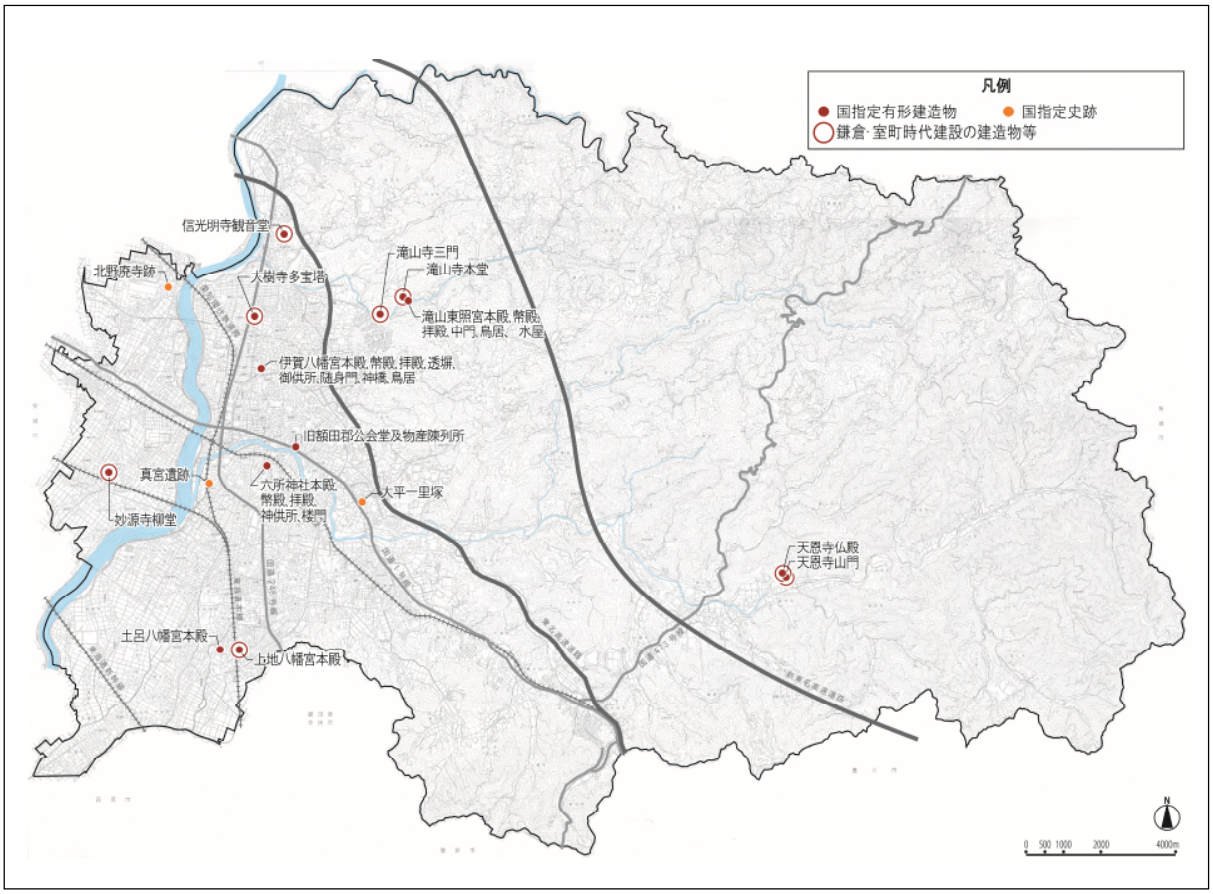


図1-4-11　国指定文化財のうち、中世(鎌倉･室町時代)に建立された建築物

コラム　源頼朝ゆかりの仏像

源頼朝の従兄であり僧侶の寛伝は、頼朝の死に際してその菩提をとむらうため、三周忌にあたる正治3年(1201)に、滝山寺に惣持禅院を完成させ、頼朝と等身大の像をつくり本尊とした。この像の胎内には、頼朝のあごひげと歯を形見として納めたと『瀧山寺縁起』に記されている。なお、滝山寺には、この像(聖観音)を含め、仏師運慶の作といわれている仏像(帝釈天、梵天)が合わせて3体(重要文化財)ある。

ウ.三河真宗のおこり

三河では、鎌倉時代後期までは真言宗、天台宗が正統仏教とされ、当時、現在の岡崎市域にあたる地域においても天台宗の勢力が強く、その代表的な寺院として真福寺、滝山寺、高隆寺等があげられる。

そうした中、建長８年(1256)、親鸞の弟子である顕智らが天台宗寺院の矢作薬師寺で浄土真宗を伝えている。浄土真宗の念仏(阿弥陀信仰)はもともと天台宗のものであり、天台宗の勢力が強い岡崎では浄土真宗の念仏を受け入れる土壌があった。

顕智は３年間三河に留まり、念仏に関心のある者たちに布教活動を行った。この時集まった 35 人が顕智の弟子となったことが、三河に真宗が広まるきっかけとなった。

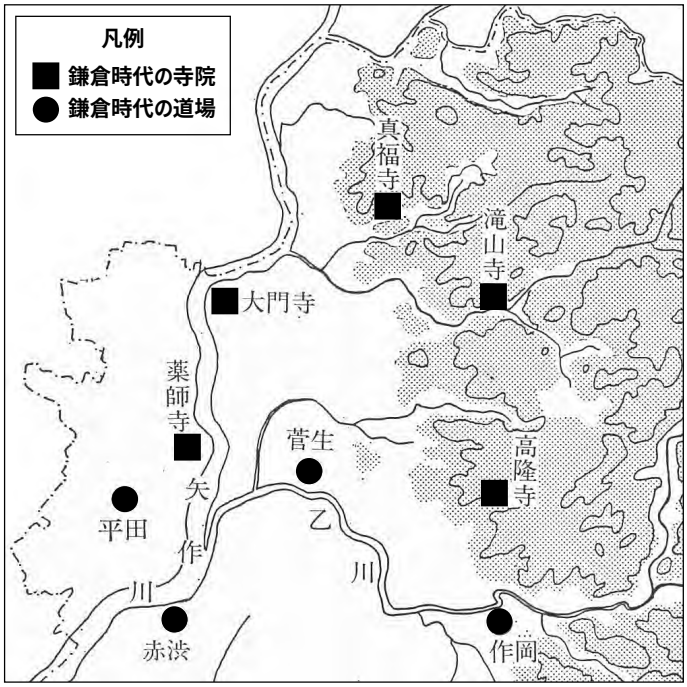


図1-4-12　鎌倉時代の寺院と道場

浄瑠璃御前物語

岡崎には平安時代末期の矢作宿を舞台にした物語である『浄瑠璃御前物語』がある。

現在残されている室町時代末期以降の書写にかかる諸本の中の、赤木文庫本の『しやうるり御せん物語』には、矢作宿の長者の娘浄瑠璃姫と源義経の悲恋物語がつづられ、寿永2年(1183)3月、叶わぬ恋のため、浄瑠璃姫は菅生川（乙川）に身を投げたと記されている。

『浄瑠璃御前物語』は、国文学研究においては創作物であるとするのが定説であるが、岡崎には、浄瑠璃姫の墓と称するものが矢作の誓願寺の境内にあり、明大寺の成就院には供養塔がある。『宗長手記』大永7年(1527)の条に「それよりやはぎのわたりして、妙大寺。むかしの浄瑠璃御前跡、松のみ残りて、東海道の名残、」とあり、当時より浄瑠璃姫の遺跡が世に知られていた。

②室町時代

ア.南北朝の動乱と三河

元弘３年(1333)の後醍醐天皇の呼びかけに応じ、鎌倉幕府への反幕府勢力に加わった足利尊氏は、鎌倉を攻め落とした。建武２年(1335)に尊氏は北条氏の乱を鎮圧したが、帰京命令を無視して鎌倉に留まった。これに対して後醍醐天皇は、尊氏追討のため官軍として新田義貞を出陣させた。両軍が対峙した矢作川の戦いでは、足利方は矢作東宿に陣を張り、一方、官軍は矢作西宿に陣を張った。官軍は足利方に中州から矢を射かけ、挑発された足利方は矢作川を渡り始めたが、攻撃され敗退した。その後、勢力を盛り返した尊氏は各地で官軍を撃破して室町幕府を開いた。一方、後醍醐天皇は吉野に脱出したため、「京都の北朝・吉野の南朝」と呼ばれる南北朝時代が始まった。

現在、足利方と後醍醐天皇の官軍が戦った場である矢作川の右岸には、矢作川合戦の伝説を伝える矢作神社のうなり石が祀られている。

この頃、三河守護には足利家執事であった高師直一族が任命されるも、足利氏内争により滅亡した。文和４年(1355)に高師泰の娘で高師冬の妻の明阿は尊氏に一族の菩提所を建てることを願い出て、後の籠田総門南に総持尼寺を建立し菅生郷を寺に寄進した。その後、三河守護は尊氏の信任が厚かった仁木氏が任命されたが、尊氏没後、仁木氏も没落した。代わって大島氏が就き、長い在任期間により三河守護の安定時代となった。

イ.守護と奉公衆

永和４年(1378)頃、三河守護は大島氏から足利一族の一色氏に交代し、範光以後４代 60 年にわたり、一色氏が三河を支配した。実際は、一色氏自身は京都で幕府要職に就き将軍に直接仕えており、守護代や守護又代と呼ばれる、その土地に住む家臣が統治していた。

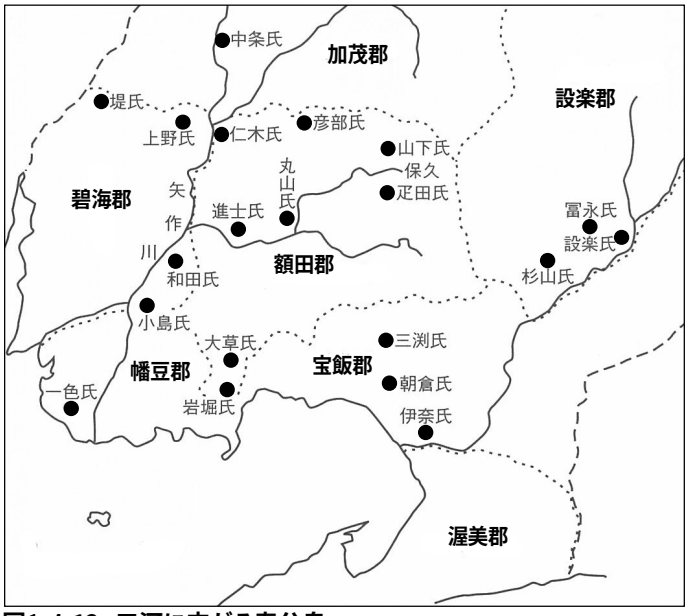


図1-4-13　三河に広がる奉公衆

こうした中、一色氏は南北朝の混乱の中で、守護の権限を強め、渥美郡や下和田郷を幕府の命令に従わず配下とし、三河国の支配を強化していった。将軍は、このような勢力を抑えるため奉公衆と呼ばれる直属の軍隊を持っていた。

約 340 家あったといわれる奉公衆のうち、三河地域には約 40 家が存在していた。三河に次いで美濃30 家、近江25 家、尾張 19 家であったことから、この４か国で約 110 家となり、全

体の３分の１を占めていたことになる。

奉公衆は、彦部氏のように鎌倉時代から足利氏の家臣だった者や、進士氏のように鎌倉幕府の御家人だった者など、足利氏の一族に連なる者たちが多かった。

コラム　菅生川(乙川)の開削事業

現在、岡崎城の南側を西流する菅生川(乙川)は、かつては明大寺丘陵と六名の微高地の間を南流していた。室町幕府の命により、「六名堤」が現在の久後崎町地内に築かれ、岡崎城南側を開削し西流させる工事が行われ、現在の流路となったと考えられている。応永6年(1399)に、六名堤築造による影響で下和田郷の用水が不通となった記録があることから、六名堤の築堤はそれ以前に行われていたと推測できる。

六名堤の築造により矢作川から直接菅生や明大寺へ船で入れるようになり、まちの発展等に大きな影響を与えたとともに、西流する菅生川(乙川)は岡崎城南側の巨大な堀というべきものとなり、要害の地としての意味をもつこととなった。

コラム　中世の岡崎の城（岩津城、山中城）

市内には、岡崎城のほかに、中世の城館として重要な岩津城と山中城の2つの山城がある。

岩津城は、南北150メートル、東西100メートルの大きさで、岩津町字東山の山頂にある。応永 28 年(1421)、松平より岩津に進出した松平信光が父泰親とともに岩津大膳を滅ぼして、その後に築城したといわれている。この城は、家康公が浜松に移った時、岡崎の北の守りとして戦略上重要な拠点に位置づけられていた。

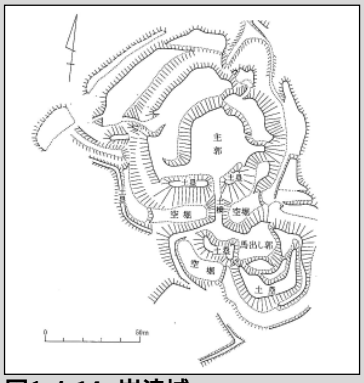


図1-4-14　岩津城

山中城は、南北 200 メートル、東西 400 メートルの愛知県下最大級の大きさで、舞木町字城山から羽栗町の通称岩尾山の頂上一帯にある。この城は、東海道や吉良道など交通の要衝にあるため、三河を支配する者にとって重要な城であった。

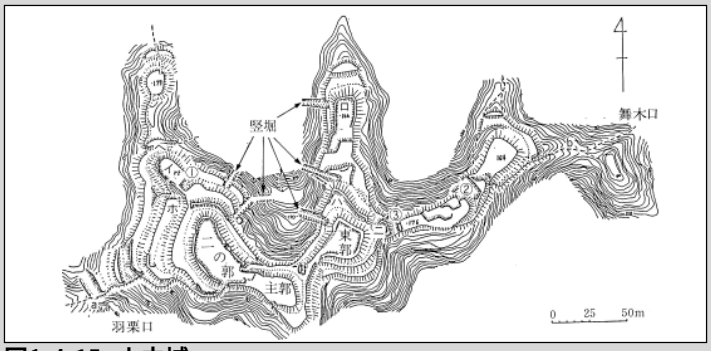


図1-4-15　山中城

③戦国時代

ア.応仁の乱と松平氏

応仁元年(1467)、将軍・管領家の後継ぎ問題に端を発し、天下を二分する応仁の乱が起こり、三河国内においても戦が行われた。

三河では、文明８年(1476)、三河守護代の東条氏が丹後・伊勢半国守護の一色氏と戦って敗北した。一色氏は三河の支配力を回復するため、三河守護の細川氏や三河国人領主の松平氏らと戦いを繰り広げたが敗北し、松平氏が三河の支配力を強めていった。

一方、西郷稠頼は永享年間(1429～1441)に明大寺に屋敷城を築き、享徳元年(1452)～康正元年(1455)に菅生川(乙川)北岸の菅生郷内龍頭山(現岡崎城)に砦を築いた。しかし、稠頼の子とされる頼嗣は松平信光に屈服した。信光は頼嗣と和を結び、子である光重を婿に送り込み、以後、光重が岡崎を支配するようになった。

享禄３年(1530)～４年(1531)に、家康公の祖父にあたる松平清康が明大寺の岡崎城から龍頭山の岡崎城に松平氏の本拠地を移した。

西三河において、松平庶家が、家督を相続した親長の他、岡崎の光重、安城の親忠、竹谷の守家、五井の忠景、形原の与副、長沢の親則等に分立し、その後、松平４代親忠、５代長親、６代信忠の時にも支配地に一族を配置し、松平の勢力を広げていった。

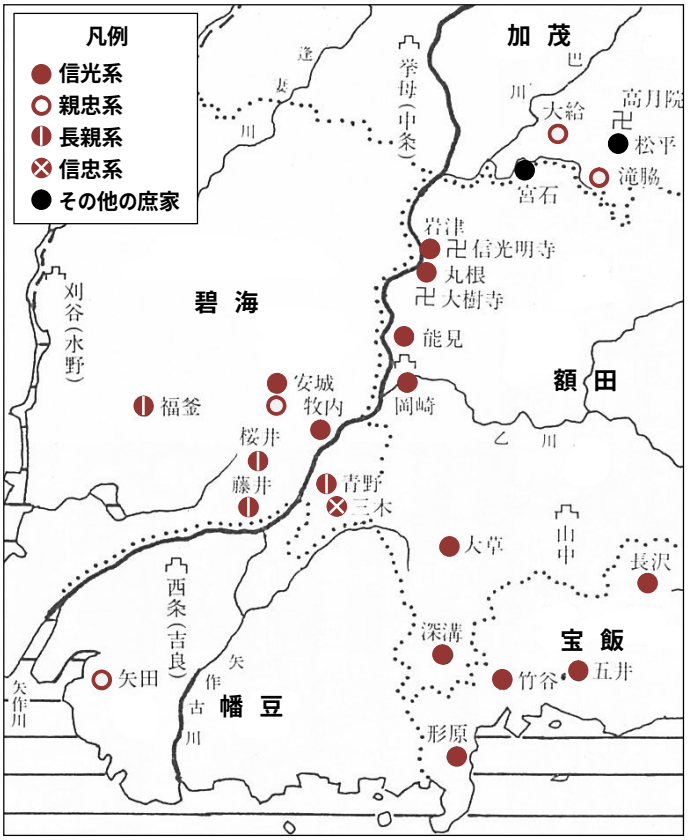


図1-4-16　松平諸家の分立図

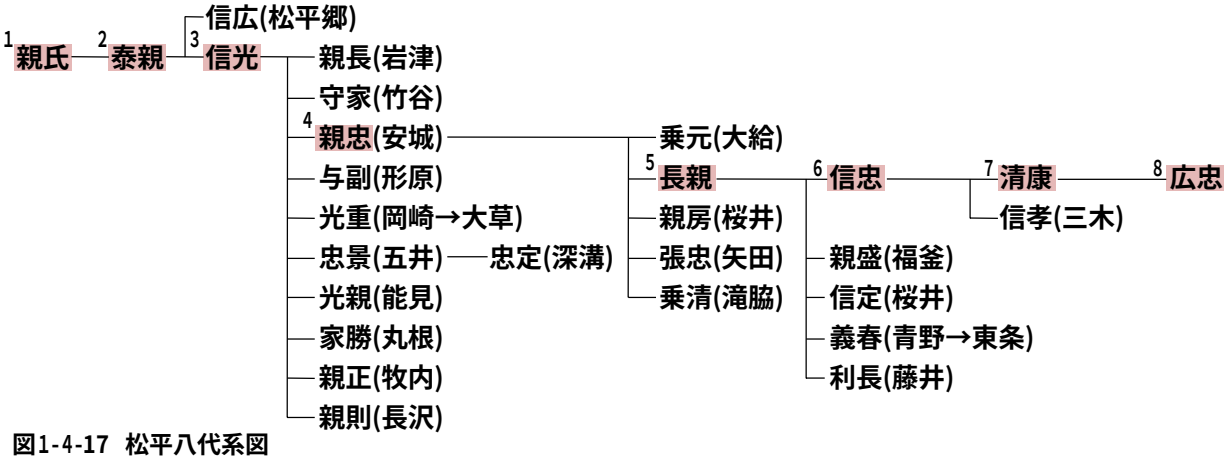


図1-4-17　松平八代系図

イ.三河本願寺派の成立

15 世紀後半、もともと三河には、関東の真宗寺院の影響が強かった５か寺(上宮寺、妙源寺、満性寺、勝鬘寺、本證寺)があり、それらの寺院が中心となって三河真宗を牽引していた。

こうした中、本願寺８世の蓮如は、三河を始め近江や北陸等の地方教団の中心寺院を本願寺派に引き入れることに力を注ぎ、三河真宗教団を分裂させて、三河三か寺と称される上宮寺、勝鬘寺、本證寺の中心寺院とその他の寺院を上宮寺５世・如光の協力により本願寺派に引き入れた。永正７年(1510)頃には土呂(福岡町)の本宗寺は本願寺９世実如の４男・実円が住持となり、一家衆寺院として信者を繋ぐ役割を果たした。次第に寺内町が形成され、『土呂山畠今昔実録』(明和５年(1768)頃)に東西 10 町余、南北８町余の範囲に末寺・民家が 1,200 軒あったと記されるほど広がった。

図1-4-18　蓮如･如光連座絵像

ウ.松平氏による三河統一と三河譜代の成立

応仁元年(1467)、応仁の乱に伴う三河国内での合戦の中で戦いに勝ち、三河における支配力を強めていったのが、家康公の先祖である松平氏である。三河での権力争いは 15 世紀前半に松平郷(豊田市)から岩津に進出した松平２代泰親、３代信光の時代に始まり、以後、６代信忠までの間に西三河を中心に繰り広げられて支配を進め、家康公の祖父７代清康が岡崎城に入城している。

こうした中、松平氏の歴代の家臣は「譜代」といわれ、近世においても重要な役割を果たした。中でも三河譜代といわれる家臣団は、広くは家康公の岡崎在城時代までに、狭くは清康の代までに服属した者を指し、後に四天王（酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政)、十六将と呼ばれる者もいた。これら三河譜代は幕府成立後も、譜代大名、旗本となり、幕府の政治の中核を担っていくこととなる。江戸幕府において三河出身の親藩・譜代大名は 279 藩のうち 123 藩、直参旗本では 840 家のうち 295 家を数えるなど、全国に渡った三河武士たちが日本の国造りの礎を築き、支えていたことになる。

図1-4-19　四天王(左から、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政)

図1-4-20　岡崎市出身の大名(幕末期)

コラム　岡崎三奉行

『藩翰譜』※1によれば、永禄8年(1565)、三河を統一した家康公は、三河の地を治めるために、「岡崎三奉行」あるいは「三河三奉行」といわれる民政･訴訟等を担当する職をつくり、高力清長、本多(作左衛門)重次、天野(三郎兵衛)康景の3名をこれにあたらせたと伝えられている。

家康公の、三人三様、異なる性格を持った者たちを抜擢し、適材適所に配置した人事面の評価に対して、当時、「仏高力、鬼作左、どちへんなし※2の天野三兵」という歌が流行したといわれている。

なお、「岡崎三奉行」については、成立年が永禄 10 年(1567)ではないか、また高力を始めとした3名以外にも奉行職にあたった者がいたのではないかとする異説もある。

※1：江戸時代の家伝･系譜書。元禄 13 年(1700)、甲府藩主徳川綱豊の命により、儒者の新井白石が編さんしたものであり、慶長5年(1600)から延宝8年(1680)までの内容が収録されている。
※2：「どちらにもかたよらない」、「公平な」という意味。

エ.松平氏･徳川家の勢力拡大と浄土宗の発展

松平氏はその勢力拡大とともに各地に寺院を建立したため、家康公生誕地である岡崎市には特に松平氏、徳川家が創建に関わった寺社が多く存在している。松平３代信光建立の萬松寺、信光明寺、妙心寺(現円福寺)、松平４代親忠建立の大樹寺(松平宗家の菩提寺)、伊賀八幡宮、松平７代清康建立の六所神社、龍海院、家康公建立の松應寺、随念寺等である。これらの寺社には松平氏、徳川家による寄進物も多く、彼らの勢力伸張とともにその寺格を高め、勅願寺となる寺院もあった。また松平氏建立寺院の多くは浄土宗であり、特に信光明寺と大樹寺の建立によって、三河の地に浄土宗が広く普及しその発展につながった。

オ.松平氏の衰退と徳川家康公の誕生

天文４年(1535)、「守山崩れ」により松平清康を失った松平一族では対立と分裂が起こる。天文９年(1540)、尾張の織田信秀は三河への進出を本格化させ、安城城を攻め落として矢作川以西の大部分を奪った。

このような状況の中、天文 11 年(1542)に岡崎城内で竹千代(家康公)が誕生した。この時期、松平家では、内外ともに争いが相次いだ。同年の第一次小豆坂の戦いで織田氏が勝利すると内部分裂が更に激しくなり、三木の松平信孝を退かせる動きがあった。また、天文 16 年(1547)、織田信秀が松平信孝とともに岡崎を攻撃するという動きが見られ、松平広忠は、今川氏に嫡男竹千代を人質に出して加勢を求めた。天文 17 年(1548) 第二次小豆坂の戦いでは、今川氏は西三河に大軍を派遣し織田信秀に勝利した。同年、松平信孝は岡崎城の松平広忠を攻めるも返り討ちに合って戦死し、翌天文 18 年(1549)には、広忠も刺客により殺害され、松平家には後継ぎが不在となった。

図1-4-21　小豆坂古戦場跡

図1-4-22　家康公産湯の井戸

カ.今川支配下の三河と家康公の自立

天文 15 年(1546)、今川義元の吉田城(豊橋市)攻撃により、三河の今川領国化が始まった。以前より三河の国人たちと緩やかな主従関係を持っていた今川氏は、三河に大きな影響力を及ぼすことになった。

松平広忠が殺害された天文 18 年(1549)、松平領国は今川氏の支配下に入り、以後、三河に

おける最高権力者は今川義元となった。岡崎城代には今川氏の有力な家臣が入り、永禄３年(1560)の桶狭間の戦いまでの約 10 年間は今川氏が西三河を支配した。

一方、天文 18 年(1549)、８歳の竹千代は義元の命により人質として駿府に送られた。その後、竹千代は 14 歳で元服して元信と名乗り、弘治３年(1557)、義元の姪にあたる瀬名姫(築山殿)をめとり、元康と改名した。

永禄３年(1560)、桶狭間の戦いで義元が織田信長の急襲を受けて戦死すると、元康は岡崎に逃げ帰り大樹寺に入ったのち、今川勢が岡崎城から撤退すると帰城した。元康は、その直後から旧領地を支配下におき、松平家臣団の再編成に努める。永禄４年(1561)、松平と織田との和睦が成立すると、元康は今川氏からの完全独立と三河国統一を目指し、西三河南部をほぼ自らの支配下とした。翌永禄５年(1562)、元康は清須城で信長と会見し、同盟を結んで東三河への進出を始めた。永禄６年(1563)、義元の「元」の字を与えられて名乗っていた元康は家康に改名し、今川氏からの完全自立を図った。

コラム　守山崩れ（松平清康の暗殺）

岡崎城主松平清康の家臣阿部定吉が織田信秀と内通し、謀反を企んでいるという噂がある中、天文4年(1535)12月5日の早朝、三河国岡崎城主松平清康の陣中(尾張国春日井郡森山(現在の名古屋市守山区))において、清康が定吉の嫡男正豊によって暗殺されたことをいう。

実は、この謀反の噂に対し定吉は正豊に、もし自分が濡れ衣で殺されることがあったら、これを殿に見せるよう誓書を手渡し自らの潔白を示していた。ところが 12 月5日早暁、清康の本陣で起こった放れ馬の騒ぎを、正豊は清康により父定吉が誅殺されたためと勘違いし、清康を背後から殺してしまったということが伝わっている。

これにより、三河をほぼ統一した名将である清康を失うこととなった松平家は、その嫡男広忠が家督を継ぐものの、広忠は若年であったことから、織田信秀の侵攻を抑えられなくなり、松平氏は衰退していった。

コラム　徳川改姓

永禄９年(1566)、家康公は、「松平」を改めて「徳川」姓とすることを正親町天皇から許され、三河守に任ぜられている。これには、家康公自身が三河一国の支配者であることを天皇による改姓の承認によって、改めて国内に明確化しようとする政治的意図があったと考えられている。

この時、家康公が改姓した徳川姓は藤原氏系統のものであった。しかし、この約 40 年後、関ヶ原の戦いに勝利し天下を掌握した家康公は征夷大将軍の職を望むものの、将軍職は源氏系統でなければつけない位であった。このため、家康公は松平姓であった時代の源氏系統とする「徳川」姓に戻すことを行っている。なお、「徳川」姓は、松平氏初代親氏の出身地と伝わる上野国新田郡徳河郷に由来するといわれている。

キ.三河一向一揆と家康公の三河平定

永禄６年(1563)、三方ヶ原の戦い、伊賀越えと並び、家康公の三大危機とされる出来事が起こった。家康公の家臣が一向宗(真宗本願寺派)寺院の外部権力の使者の立ち入りを拒否することができる「不入の権」を無視し、兵糧米を徴収しようとしたことに反発した一向宗門徒(土呂本宗寺、三河三か寺といわれた佐々木上宮寺、針崎勝鬘寺、野寺本證寺)が、三河一向一揆を起こした。これは、三河では古くから浄土真宗信仰が盛んで、15 世紀後半には蓮如上人の布教により本願寺派教団が既に成立し、一向宗の勢力地盤であったことが大きく影響している。家康公の家臣の中にも一向宗側の者がおり、攻め入られた家康公は、窮地に立ったものの、永禄７年(1564)、馬頭原の戦いにおける勝利により和議に持ち込み、一揆の解体を行った。これにより天正 11 年(1583)までの 19 年間は、三河は真宗禁制の地となった。

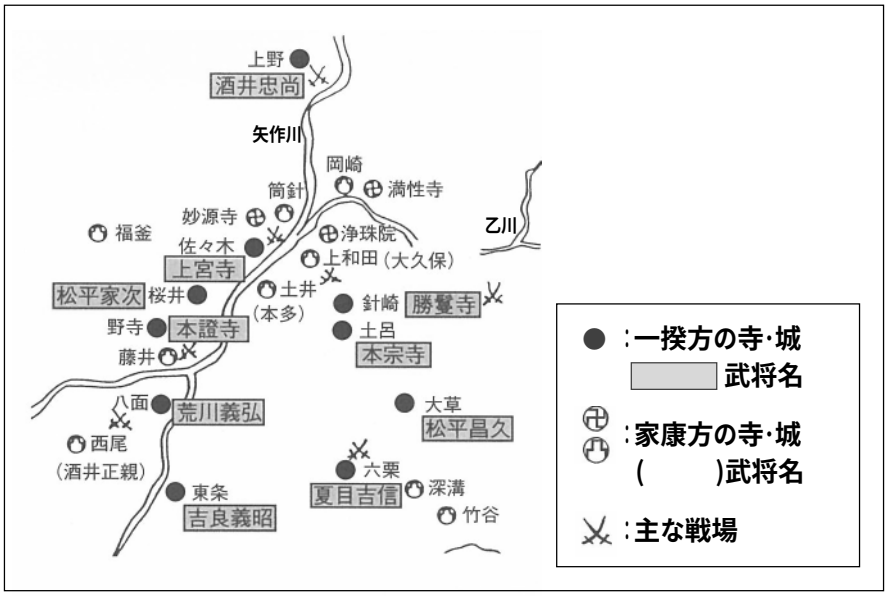


図1-4-23　一向一揆関係図

(4)近世　[岡崎藩の成立と幕府領による支配]

①安土桃山時代

ア.豊臣家臣田中吉政による城下町整備

天正 18 年(1590)の家康公関東移封後は豊臣重臣の田中吉政が岡崎城主となった。江戸時代初めに本多康重が任ぜられてからの城主は代々譜代大名が務め、本多家４代(前本多家)、水野家７代、松平家１代、さらに本多家６代(後本多家)の計 19 名が岡崎城主となり、279 年間、岡崎を治めた。特に、田中吉政は大土木事業を行い、岡崎城の城郭(総構え・総曲輪)の整備を進めた。城下町では、武士を城の近くに住まわせる侍町の整備や生活必需品と戦に必要な商品などを扱う商人や職人の住む町の整備を行い、それを堀と土塁で囲む総構えとし、近世の大城郭の基礎を築いた。

②江戸時代前期

ア.前本多家の城下町整備

関ヶ原の戦い後の慶長６年(1601)に藩主となった本多康重を始め、その後３代にわたる城主は田中吉政による城下町整備を引き継ぐとともに、矢作橋や東海道の整備、町人たちの大規模な移住等を行った。特に、慶長６年(1601)の伝馬制の制定と矢作橋の完成に伴い、菅生川の南側を通っていた東海道を正式に城下へ引き入れた。東海道は、その後さらに変更が重ねられ、慶長 14 年(1609)以降、まちの防衛と街道筋の伸長のために曲がりくねり、『東海道巡見記』(延享２年(1745))に「廿七曲りと云ふ」と記され、「東海道岡崎城下二十七曲り（にじゅうななまが）」と呼ばれる街道となった。現在もその道筋のほとんどをたどることができる。

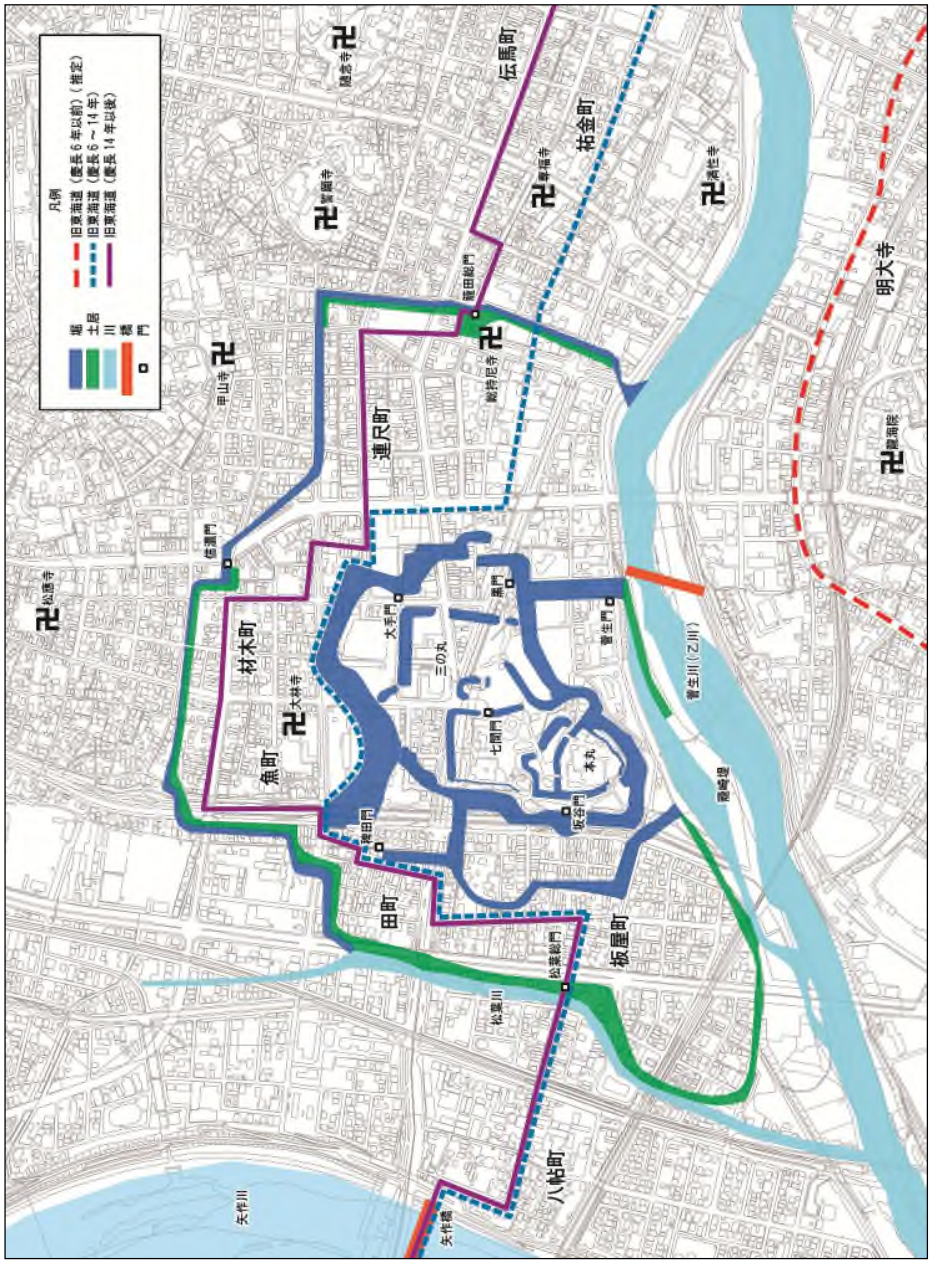


図1-4-24　東海道の位置の変遷

また、「お城下まで舟が着く」と歌われたように、矢作川と菅生川(乙川)では舟が行き交い、さらに、東海道により物資・文化が往来して城下町・宿場町として繁栄した。正保２年(1645)、本多忠利(ただとし)の頃までには、東海道が城下に入る出入口の東に籠田総門(かごたそうもん)、西に松葉総門(まつばそうもん)が、北方の塩の道へ通じる足助街道(あすけかいどう)の起終点となる出入口に信濃門(しなのもん)が設けられた。

こうした整備により岡崎城は家康公の生誕城として、５万石の石高(こくだか)に比しては大規模な城郭となった。近年の発掘調査により日本国内で五指に入る規模の城の遺構が明らかとなってきている。

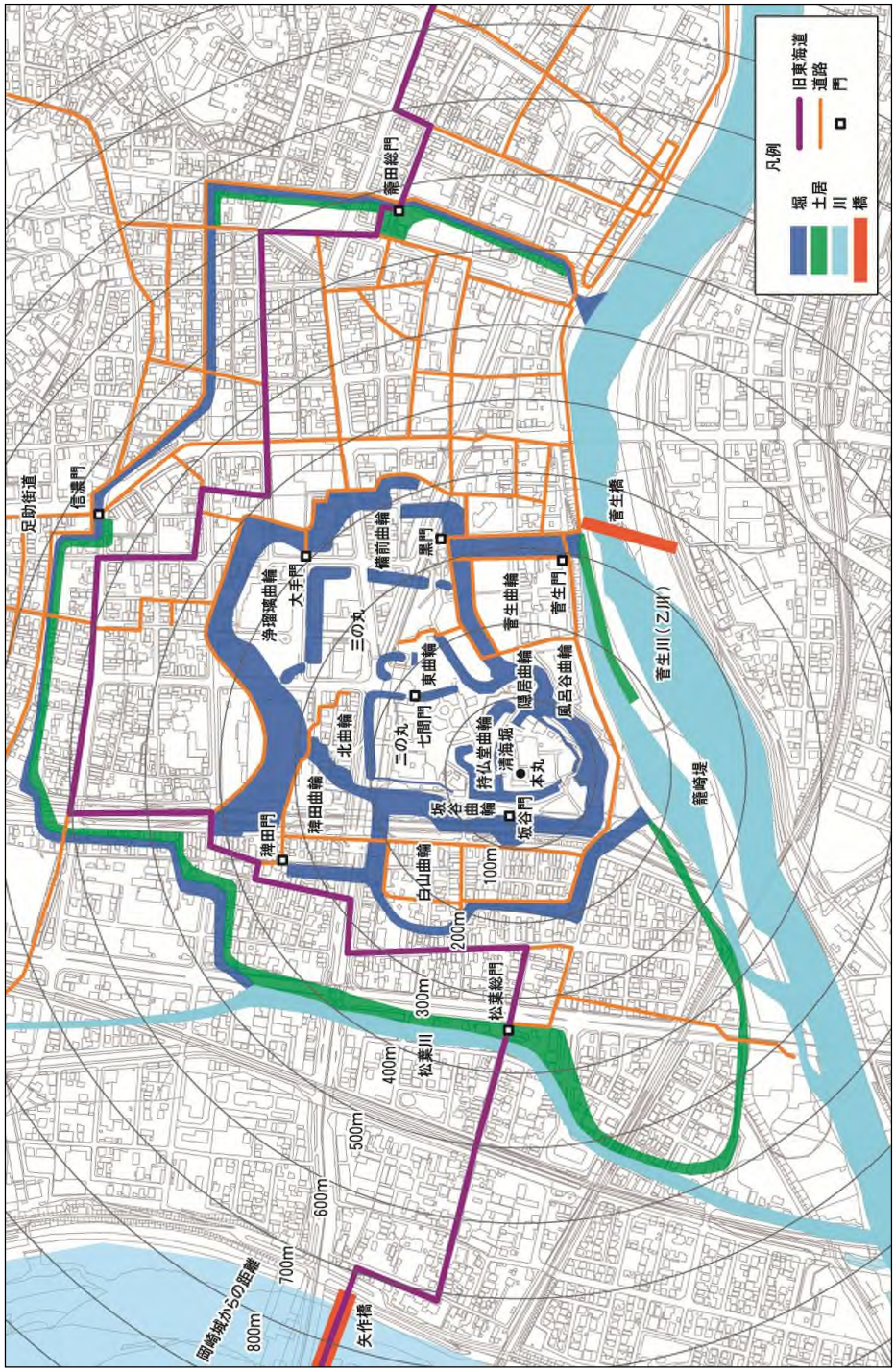


図1-4-25　岡崎城郭

イ.水野忠善の城下町整備

正保２年(1645)、岡崎藩主になった水野忠善(ただよし)は、田中吉政時代に始まり前本多家(まえほんだけ)に受け継がれた城下町整備をさらに進め、完成させた。

堀で守られた総構え内の町人が住んでいた町家を総堀近くに移し、空いた場所に家臣が住む侍屋敷を作り、その戸数を増やした。また、それまで根石原(ねいしがはら)、欠(かけ)村、六名村の総堀の外に分散していた足軽(あしがる)が住む組屋敷(くみやしき)を、材木(ざいもく)町、連尺(れんじゃく)町の総堀の北側や明大寺村に移して城郭の周囲を取り巻くように配置した。

こうした城下町の総堀や東海道沿いには、町家も多数作られ、特に東海道沿いには 19 の町があり、「岡崎城下町廻り」又は「岡崎宿廻り 19 か町」と呼ばれ、その様子は明治維新まで変わることがなかった。

表1-4-1　岡崎歴代藩主(城主)と在籍時期等

歴代岡崎城主	在任期間	できごとなど
西郷頼嗣(さいごうよりつぐ)	不明	文明年間の初め松平信光の攻撃を受けて敗北、信光の子光重を婿養子に迎え、額田郡大草(幸田町)へ隠棲したとされる。
松平光重(まつだいらみつしげ)	不明	松平信光の5男で、西郷頼嗣の跡を継ぎ岡崎松平氏の初代となった。紀伊守を名乗る。明応2年(1493)、妙大寺の彦左衛門尉に光林寺屋敷の替地を与えた。
松平信貞(まつだいらのぶさだ)	不明	額田郡山中に要害をかまえ、安城松平氏の清康と対立したので、大永4年(1524)清康によって山中城を攻め落とされ、ついで岡崎城も清康に譲り、額田郡大草に隠棲した。
松平清康(まつだいらきよやす)	1524～1535	当時の居城は菅生川南岸明大寺にあったが、狭隘で軍事的にも不十分であったために龍頭山の砦（現在の岡崎城）を拡張・整備して同所に移った。
松平広忠(まつひらひろただ)	1535～1549	松平家の内紛により桜井松平家の信定によって岡崎城から追われ、伊勢・遠江を流浪した。天文6年(1537)に今川義元の援助で岡崎城に復帰した。
徳川家康(とくがわいえやす)	1560～1570	今川義元が桶狭間の戦いで亡くなると岡崎城に復帰、三河平定に乗りだす。三河一向一揆を鎮圧 し、永禄8年(1565)には三河一国を支配下においた。
徳川信康(とくがわのぶやす)	1570～1579	元亀元年(1570)に家康公が浜松城に居城を移すと岡崎城主となった。織田信長から武田氏に内通したとの嫌疑を受け、天正7年(1579)に遠江二俣城で切腹した。
石川数正(いしかわかずまさ)(城代)	1579～1585	天正7年(1579)に信康が切腹すると岡崎城代となる。家康公の片腕として活躍したが、天正 12 年(1584)小牧・長久手の戦いの後に徳川家を出奔して豊臣秀吉に臣従した。
本多重次(ほんだしげつぐ)(城代)	1585～1590	家康公上洛の人質である大政所宿所の周りに薪を高く積み上げ、万に一つ、主君家康公が秀吉に捕らえられるようなことがあれば、薪に火をつけ大政所を焼き殺すと脅した。
田中吉政(たなかよしまさ)	1590～1600	天正 18 年(1590)、徳川家康公が関東に領地替えになった後に岡崎領主となる。城下町建設や矢作川築堤を行い、近世岡崎の基礎をつくる。
本多康重(ほんだやすしげ)（前本多）	1601～1611	岡崎藩本多家初代藩主。家康公の家臣として、小牧・長久手の戦いで活躍。関ヶ原の戦い後の岡崎藩主に任命された。
本多康紀(ほんだやすのり)（前本多）	1611～1623	大坂冬の陣・夏の陣で活躍し、その後も大坂に残って城門の警備を行った。岡崎城の大改築を行い、天守を再建した。
本多忠利(ほんだただとし)（前本多）	1623～1645	大坂夏の陣で父と共に活躍し、家康公に褒められた。城改修工事を進め、土塁を石垣にし、堀に菅生川の水を引き入れた。
本多利長(ほんだとしなが)（前本多）	1645～1645	10 歳で岡崎藩主になった。藩主になった1カ月後に、遠江国横須賀藩に領地をかえられた。久能山東照宮の修造工事を行った。

みずのただよし 水野忠善	1645～1676	三河国吉田藩(豊橋市)から領地替えで岡崎藩主となる。手永制で農村を支配した。家臣団の強化に力を入れた。
みずのただはる 水野忠春	1676～1692	無駄な出費を抑えて苦しい財政の立て直しを図った。年貢率を引き下げようとして検見引や木綿何割引を行った。
みずのただみつ 水野忠盈	1692～1699	矢作橋修造や大樹寺修営を行った。三河国絵図作成の責任者として絵図を元禄 12年(1699)に作り、将軍に献上した。
みずのただゆき 水野忠之	1699～1730	幕府の老中となり、享保の改革の中心人物として活躍した。しかし、藩の支出は増え続け、財政悪化が急速に進んだ。
みずのただてる 水野忠輝	1730～1737	享保の大飢饉の時に、領内から一人も餓死者を出さなかったので、8代将軍吉宗からお褒めの言葉を受けた。
みずのただとき 水野忠辰	1737～1752	若手の人材を採用して藩政の改革を図った。重臣の反抗で改革は失敗したが、一般家臣や領民からは名君と言われた。
みずのただとう 水野忠任	1752～1762	10年間岡崎藩主を務めた後、肥前国唐津藩主になった。村役人や町役人は領地替えの中止を願ったが、かなわなかった。
まつだいらやすよし 松平康福	1762～1769	下総国古河藩から岡崎藩主となった。幕府の老中も務めた。藩が財政難であったため、幕府に領地替えを願い出て、石見国浜田藩主となった。
ほんだただとし 本多忠粛(後本多)	1769～1777	石見国浜田藩から領地替えで岡崎藩主となった。財政の立て直しのために家臣の禄高を減らしたが、上手くいかなかった。
ほんだただつね 本多忠典(後本多)	1777～1790	藩財政が苦しいために、老中に領地替えを願い出たが認められなかった。その代わりに御番所火の番などが免除された。
ほんだただあき 本多忠顕(後本多)	1790～1821	財政を立て直すために、31か条の倹約令を出して改革を図った。当初は改革に熱心だったが、上手くいかず熱意を失った。
ほんだただなか 本多忠考(後本多)	1821～1835	前藩主の財政改革の失敗により、再び藩士の禄高を減らしたが上手くいかなかった。幕府から7,000両の借金を許される。
ほんだただもと 本多忠民(後本多)	1835～1869	安政の財政改革を行った。幕府の老中となり、幕末の難局を処理した。大政奉還後は、新政府に協力する立場をとった。
ほんだただなお 本多忠直(後本多)	1869～1871	明治2年(1869)2月、忠民隠居に伴い家督を継ぎ岡崎藩主となり、6月、版籍奉還により岡崎藩知事となる。

コラム　正調岡崎五万石

古く江戸時代から歌い継がれてきた歌に「正調岡崎五万石」がある。

江戸時代に岡崎のお城下を巡る矢作川のきれいな川面を、大きな白帆を張ってのんびりと上り下りした舟の船頭衆が、「五万石でも岡崎様はお城下まで舟がつく」と歌った舟唄から始まったと伝えられる「五万石」は、祭礼時の長持ち歌や木遣り歌、味噌仕込み歌等として取り入れられ、またお座敷唄、お座敷踊りとして芸能界に定着していった。

現在、「岡崎五万石」は、「正調」と「民謡」に分かれ、「正調」はお座敷唄、お座敷踊りとして歌われている。また「民謡」は、盆踊りなどで歌われている。

ウ.寺社領や旗本領の多い岡崎

本市には多数の寺社があるが、これらの多くは家康公等が与えた「朱印状（しゅいんじょう）」を持つ寺社であった。朱印状(領地朱印状)とは、将軍の代替わりに公家や武家等の所領を確定する際に発給したもので、岡崎では、特に松平氏や徳川家にゆかりのある寺社に朱印状が与えられ、幕府公認の領地を持った寺社が多数みられた。岡崎城下では、徳川家先祖の菩提寺である大樹寺を始め、滝山寺、真福寺、甲山寺（こうざんじ）等がある。また、城下町中心部近辺にも多数の寺社があり、周辺は門前町として栄えていた。

図1-4-26　朱印状(大樹寺)

これらの寺社は、家康公が将軍になったことにより一層寺格や社格が高められ、幕府によって修理、援助を受けるという特別扱いを受けた。特に大樹寺は別格の扱いとなっている。

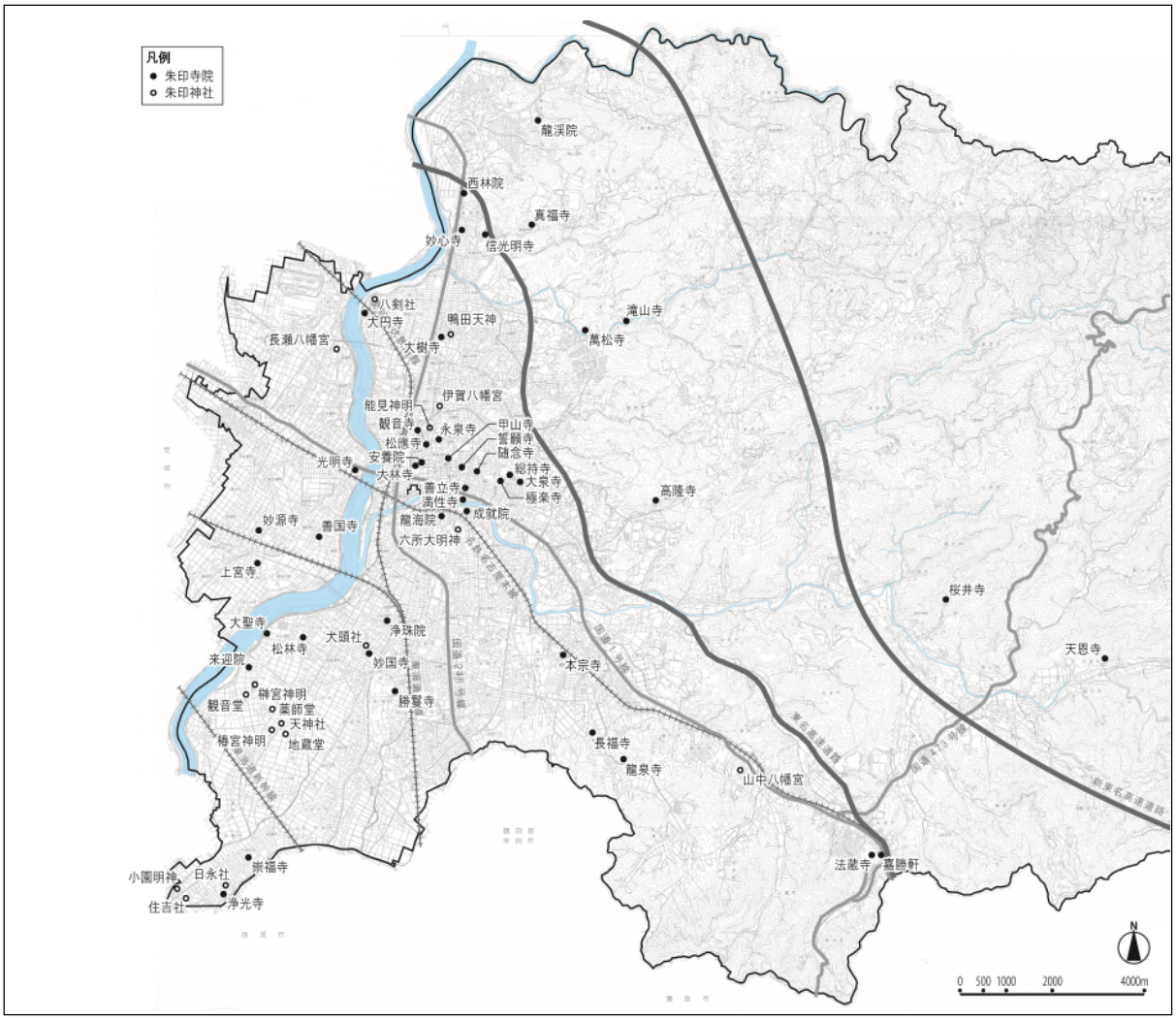


図1-4-27　朱印状が与えられた寺社

さらに、徳川３代将軍家光（いえみつ）は祖父家康公に対する畏敬（いけい）の念が厚く、自らも滝山東照宮（たきさんとうしょうぐう）を建立するとともに、松平氏・徳川家ゆかりの寺社を大造営している。現在まで近世前期の優れた建築物が多いのはそのためである。

表1-4-2　家康公朱印拝領の寺社

寺社	朱印状発行年月日	山号	寺名･社名	宗派	朱印高	寺社所在地
寺院	慶長７年　６月　２日	成道山	大樹寺	浄土	616 石余	鴨田
	６月14日	能見山	松應寺	浄土	100 石	能見
	６月16日	崇徳山	善国寺	浄土	24 石	渡
	〃	大沢山	龍渓院	曹洞	20 石	桑原
	〃	御所山	西林院	浄土	7 石	岩津
	〃	廬安山	崇福寺	浄土	30 石	中島
	〃	広沢山	天恩寺	臨済	79 石余	片寄
	６月22日	弥勒山	光明寺	浄土	120 石余	岩津
	慶長８年　８月18日	長輝山	甲山寺	天台	250 石	岡崎
	８月20日	仏現山	随念寺	浄土	50 石	岡崎
	〃	法性山	妙心寺	浄土	101 石余	岩津
	８月22日	万燈山	長円寺	曹洞	10 石	中島
	８月26日	本寿山	妙国寺	日蓮	15 石余	宮地
	〃	多宝山	高隆寺	天台	35 石	高隆寺
	〃	海運山	長福寺	日蓮	15 石余	尾尻
	〃	仁王山	萬松寺	曹洞	20 石	滝
	〃	清光山	浄珠院	浄土	20 石	上和田
	〃	霊鷲山	真福寺	天台	354 石	真福寺
	８月28日	瑞生山	総持寺	曹洞	100 石	菅生
	９月11日	満珠山	龍海院	曹洞	四至(35 石)	明大寺
	〃	拾王山	大林寺	浄土	100 石	八町
	〃	桑子山	妙源寺	高田	30 石	桑子
	〃	二村山	嘉勝軒	浄土	12 石	本宿
	９月15日	鏡立山	光明寺	時宗	8 石	矢作
		花園山	桜井寺	真言	27 石余	桜井寺
神社	慶長７年　６月22日	－	小園神明	－	10 石	中島
	６月26日	－	六所大明神	－	62 石	明大寺
	８月　４日	－	伊賀八幡	－	228 石	伊賀
	慶長８年　８月22日	－	日永社	－	10 石	中島
	８月26日	－	山中八幡	－	150 石	舞木
	８月28日	－	犬頭大明神	－	43 石	宮地

表1-4-3　家光朱印拝領の寺社

寺社	朱印状発行年月日	山号	寺名･社名	宗派	朱印高	寺社所在地
寺院	寛永 13 年 11 月　9 日	田生山	満性寺	高田	50 石	菅生
	〃	大雲山	極楽寺	曹洞	2 石余	岡崎
	寛永 18 年　9 月 27 日	吉祥山	滝山寺	天台	412 石	滝
	寛永 19 年　9 月 24 日	二村山	法蔵寺	浄土	82 石余	本宿
	慶安　元年　2 月 14 日	見松山	観音寺	曹洞	5 石	能見
	2 月 24 日	無道山	大聖寺	浄土	23 石余	中之郷
	〃	諏訪山	誓願寺	浄土	11 石余	岡崎
	〃	大光山	善立寺	日蓮	10 石	菅生
	2 月 27 日	向上山	大円寺	浄土	5 石余	大門
	7 月 11 日	照光山	安養院	浄土	10 石	岡崎
	8 月 17 日	聖衆山	来迎院	浄土	5 石	上青野
	〃	浄行山	松林寺	浄土	5 石	赤渋
	〃	仏日山	大日堂	曹洞	5 石	岡崎
	〃	東林山	大泉寺	曹洞	5 石	岡崎
	〃	瑠璃山	成就院	曹洞	5 石余	明大寺
	〃	七池山	本宗寺	一向	13 石	平地
	〃		龍泉寺	日蓮	3 石余	竜泉寺
	9 月 17 日	良永山	浄光寺	一向	3 石余	中島
神社	慶安　元年　－	－	神明	－	5 石	能見
	〃	－	八劔神明	－	29 石余	大門
	〃	－	天神	－	3 石	鴨田
	〃	－	住吉神明	－	3 石余	中島
	〃	－	椿宮神明領他	－	3 石他	下青野
	〃	－	神明領他	－	2 石他	上青野

コラム　奥殿藩、西大平藩及び旗本領

江戸時代、大名、旗本、寺社は幕府から領地を与えられていた。現在の岡崎市内は、岡崎藩(5万石)の1藩で支配されていたわけでなく、岡崎藩以外にも奥殿藩(1万6千石)、西大平藩(1万石)があり、それぞれの領地を支配していた。

また、岡崎市及びその周辺には、松平氏･徳川家ゆかりの寺社も多く、家康公等により与えられた「朱印状」(証明書)によって幕府公認の領地を持つ寺院もあった。

このように、現在の岡崎市内は、複数の藩及び「朱印状」を持った寺院による領地によって治められていた。

一方、家康公は、関ヶ原の戦いで味方についた大名の手がらと、家康公側につかなかった大名を調査し、大規模な領地替えを行った。その結果、岡崎藩領は額田、碧海、幡豆、加茂の４郡内に決められた。しかし、現在の市域の全てを岡崎藩は支配しておらず、岡崎藩以外の領地も多数あった。

こうした中、大坂夏の陣の活躍により、松平真次は幕府より祖先の土地である大給を領地として与えられ、真次の子、乗次が１万石加増されて大給藩初代藩主となり、大給藩として奥殿周辺を支配した。大給藩第４代乗真は、幕府に願い出て、正徳元年(1711)に陣屋を大給から三河国額田郡奥殿に移し、奥殿藩が成立した。この奥殿藩からは著名人が輩出している。７代乗友の５男栄五郎は、裏千家第 10 世認得斎宗室の養子となり、その後第 11 世玄々斎宗室となっている。玄々斎宗室は、第１回京都博覧会の際に立ったままお茶をたてる立礼式の茶室を発表し、近代茶道の基礎を築いた。奥殿藩８代藩主で龍岡藩初代の藩主となった松平乗謨は文久３年(1863)に奥殿から田野口村(長野県佐久市)へ藩庁を移し、星型稜堡をもつ擬洋式城郭の龍岡城を建造した。大給恒と改名し、明治 10 年(1877)勃発の西南戦争の際、後に日本赤十字社となる博愛社を創立した。

三河国内には旗本領も多くあった。水野忠善(藩主時代 1645～1676)から数えて３代後の水野忠之(藩主時代 1699～1730)の時代である享保 10 年(1725)には、三河国内に 86 家、現在の岡崎市域内に 14 家の知行地(幕府から旗本に与えられた領地)を持つ旗本がいた。

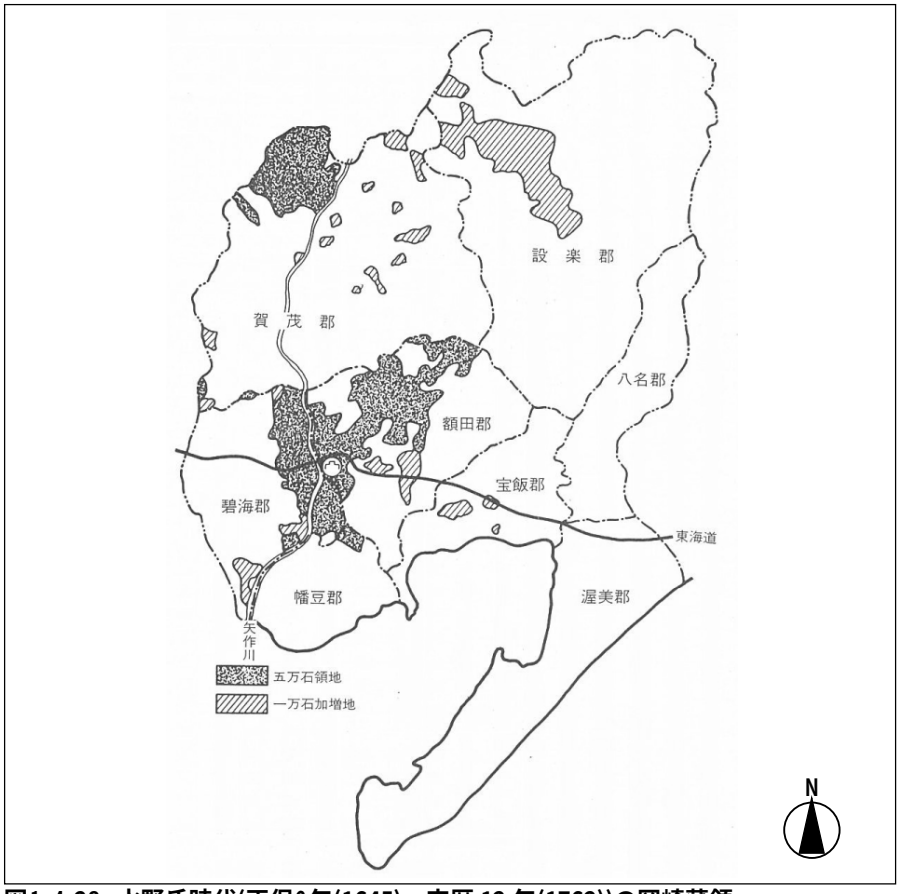


図1-4-28　水野氏時代(正保2年(1645)～宝暦 12 年(1762))の岡崎藩領

エ.水陸交通の発展と東海道有数の宿場町の形成

慶長６年(1601)、家康公は東海道に宿駅を置き、各駅に参勤交代等の公用旅行者に対する伝馬を用意することを義務づけた。これにより東海道の利用や宿駅を中心としたまちの賑わいが増した。

当初、岡崎には榎町に宿駅があったが、本多康重(藩主時代 1601～1611)により、伝馬町が新設され、それ以降、伝馬町が岡崎の宿駅として発展した。伝馬町では、享和元年(1801)に、本陣２軒、旅籠屋115 軒、木賃宿26 軒があったとされ、天保 14 年(1843)には、本陣が３軒、脇本陣が３軒に増えている。本陣、脇本陣合せて６軒というのは、東海道では小田原の８軒、箱根の７軒に次いで３番目の規模であった。また、旅籠屋の数も宮、桑名に次いで３番目であり、岡崎の宿場町は東海道屈指の規模を誇っていた。

東海道を中心にまちが賑わい発展するとともに、市内を流れる矢作川でも人々の暮らしに大きな発展と変化をもたらした。河川は大量の物資を運搬する最も有効な手段として利用され、岡崎は矢作新川の河口である鷲塚(碧南市)や平坂(西尾市)と上流の足助や信州飯田につながる信州中馬あるいは三州中馬の陸運と結びついて発展した。

岡崎城下では、信州への中継地の一つとして、物資の陸揚げや積み出しが行われた。こうした物資の陸揚げ等を行う場所を土場と言い、市域の矢作川沿いでは合歓木、佐々木、赤渋、福島新田、八町、上ノ里、岩津の７つの土場があり、賑わった。また、矢作川の支流である菅生川沿いには、御用土場、桜馬場土場、満性寺土場の３つがあり、岡崎の特産品である石、味噌、大豆、綿作の肥料等が運ばれた。

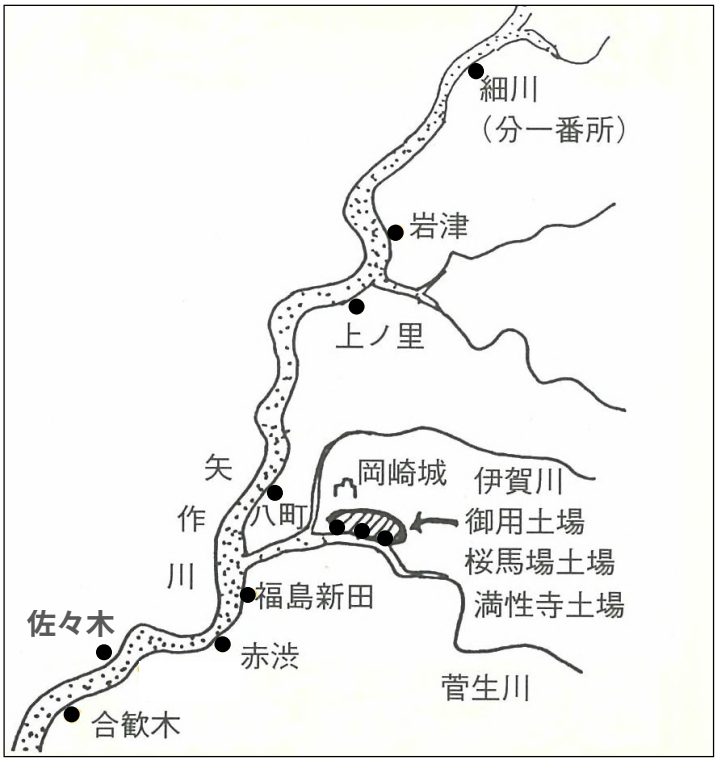


図1-4-29　岡崎市内の土場

③江戸時代中期･後期

ア.岡崎城下町の産業の発展

西三河を北から南へ流れる矢作川は、大量の物資を安い費用で運ぶ最も有力な経済の道であり、城下を通る東海道は参勤交代等のための政治の道であったため、その中継地となる岡崎の産業は大いに発展していった。城下町には、田中吉政により整備された町の地名が現在まで多数残っている。それらの多くは、材木町(鍛冶屋、大工等の職人町)、魚町(魚問屋)、田町(塩、海産物等を扱う商人町)のように、職業と密接に関係する名称がつけられている。こうした中、近世を通じて城下町の中心となった町に、城の大手門近くに開かれた市場をもとに形成された連尺町がある。行商人の「背負子」が名称のもとになったといわれる連尺町は、酒、油、穀物等の日常品を扱う大きな商家が軒を連ねていたとされている。

田中吉政は城郭や城下町整備の際に多くの石工を大坂の河内や和泉から呼び寄せた。城郭整備等が一段落すると、石工たちは岡崎の良質な花崗石を用いて鳥居や燈籠等の石材加工を行うようになり、これらを諸国大名等がこぞって求めたことで全国に岡崎の名が広まった。

図1-4-30　石屋町界隈(昭和 14 年(1939))

また、家康公が早くから銃火器に着目していたこともあり、稲富伊賀守直家が鉄砲隊の指導として持ち込んだ稲富流火術により煙火師が多く育った。開幕後、火薬の生産と貯蔵は家康公の生誕の地である三河に限定される中で、豊作を願う農民の間にも取り入れられて、祭礼の花火として打ち上げられたのが、三河花火の始まりとされている。２代将軍の秀忠が観賞用として許可してから盛んになり、祭礼の献上用として発展した。

図1-4-31　三河花火工場(大正期)

さらに、戦国時代、簡単に栄養を補給できて保存がきく携行食として重宝された味噌は、江戸時代初期に八町村(八帖町)で本格的に生産された。この辺りは矢作大豆という優良な大豆が産出され、矢作川の伏流水によって豊富な水が得られたため生産に非常に適しており、矢作川の舟運により原料や製品の運搬も便利であった。その地名を取り八丁味噌という名がついたとされ、三河の譜代大名や旗本等により全国的に広められた。

図1-4-32　八丁味噌 カクキュー合資会社(大正期)

その他、岡崎では綿作を行う者が多く、全ての畑に対する綿の作付け率が50%を占めるほどであった。これは、綿作が稲作のように田植えや稲刈りの時期に大量の労働力を必要としなかったこと、また、稲作よりも綿作の方が収益が良かったことだけでなく、矢作川周辺では、頻繁に起こる矢作川の洪水により田に大量に流れ込んで積もった土砂を取り除かずに畑とし、稲作から綿作に切り替えた農家が多かったことも一因にあげられる。岡崎の綿作は全国有数の地位を占めるようになり、江戸市場では三河木綿としての名が定着した。

コラム　何度も架け替えられた矢作橋

矢作橋の最初の架橋工事は、慶長3年(1598)、家康公の家臣牧野康成(まきのやすなり)から命じられた岡崎城主田中吉政により始められ、慶長6年(1601)には長さ約 135 メートルの表面に土をかぶせた土橋(どばし)が完成した。なお、江戸時代の矢作橋は、現在の矢作橋より約100メートル下流にあったといわれている。

しかし、矢作橋は矢作川の洪水により幾度となく流失し、その度に架け替えられた。

寛永11年(1634)に架けられた矢作橋は、これまでの土橋から板橋となり、欄干(らんかん)、擬宝珠(ぎぼし)を備えた長さ 208 間(約 378 メートル)の壮麗な反り橋(そりばし)であったといわれている。

表1-4-4　矢作橋の架橋

年号		架替	内容
慶長 6	1601		土橋架設
元和 9	1623		土橋架設
寛永11	1634	1回目	板橋架設
寛文10	1670		8月火災落失
延宝 元	1673	2回目	架設開始、完成延宝2年
正徳 元	1711		洪水流失
正徳 3	1713	3回目	架設開始、完成正徳5年
―			老朽化
延享 2	1745	4回目	架設開始、完成延享3年
―			洪水老朽化
宝暦11	1761	5回目	架設開始、完成宝暦 12 年
安永 9	1780		洪水流失
安永 9	1780	6回目	架設開始、完成天明元年
寛政 8	1796		洪水流失
寛政10	1798	7回目	架設開始、完成寛政 12 年
文化13	1816		洪水流失
文化14	1817	8回目	架設開始、完成同年
天保 8	1837		洪水流失
天保 9	1838	9回目	架設開始、完成天保 11 年
安政 2	1855		7月 29 日洪水流失
―			渡船通行
明治 元	1868		舟橋仮橋
明治 4	1871		仮橋完成
明治11	1878	10 回目	新橋完成
大正 2	1913		下流に鉄橋完成

コラム　伊勢信仰と秋葉信仰

市内には、神明宮や神明社、また百姓の神様である御鍬社(おくわしゃ)などの伊勢信仰に関係する神社と、火事を防ぐ神様である遠江(とおとうみ)(静岡県)の秋葉(あきば)信仰に関係する常夜燈が多く見られる。

伊勢信仰が広まったのは、江戸中期以降、内宮(ないくう)・外宮(げくう)の御師(おんし)によるものといわれる。御師は、割り当てられた担当地域の各家に御札や伊勢暦(いせごよみ)、また青のり、白粉(おしろい)、薬等を配って回り、米や麦を初穂料(はつほりょう)としてもらう檀那廻(だんなまわ)りや、檀那の伊勢参詣(いせさんけい)の際は屋敷を参詣宿として提供していた。

一方、秋葉信仰は、寛政年間(1789～1801)に広まったといわれている。秋葉信仰のシンボルとも言える常夜燈が、寛政2年(1790)の両町のものを筆頭に、東海道の辻や村の入口等に多数建立されている。

イ.岡崎城下町の文化の開花

江戸時代中期から後期になると、岡崎には石材加工、八丁味噌、綿作(三河木綿)等の代表的な産業が定着するとともに、旅籠屋、鍛冶屋、桶屋、荒物屋、指物屋、穀屋、煙草屋、大工、左官、道具屋、茶屋など様々な商売を営む者があふれ、まちが大きくなっていった。

こうした農業や商工業が飛躍的に発展することで、まちには賑わいが増し、様々な文化が花開いていった。

■菅江真澄(文人)

江戸時代後期、民俗学の先駆者として、また紀行家として知られる人物に菅江真澄がいる。菅江は、生涯の大半を現在の北海道と東北等で過ごし、庶民生活を学問の目で観察して多数の著書を残している。著書は、旅日記約 50 冊、随筆 50 冊、秋田藩領地誌 60 冊、その他図絵集、歌謡集、雑葉集類 60 冊等に及び、それらは民俗学、歴史学、考古学等の学問分野で高く評価されている。

図1-4-33　菅江真澄画像

こうした菅江であるが、出自がはっきりしていない(宝暦４年(1754)あるいは５年(1755)生まれであったともいわれている)。本名は白井知之であったといわれ、その後、画家や文筆家が用いる雅号や在郷時の通称を多数持ち、文化７年(1810)頃から「菅江真澄」の名を用いている。出生地は史料などから岡崎(伝馬町)であったことが濃厚であるが確定していない。

天明３年(1783)、29 歳の時に信州へ旅立ち、以後約 50 年間北海道や東北の各地を巡り、旅を続け、文政 12 年(1829)角館町(秋田県仙北市)で没した。

29 歳で旅に出るまでの間、名古屋の国学者田中道麻呂のもとを頻繁に訪れ、また岡崎城下を代表する文化人国分伯機の多くの文化人が訪れる学芸サロンとして利用されていた書斎市隠亭に出入りし、多数の蔵書を利用したり、様々な文人と交流したりして各方面の知識を高めていった。菅江の著作の源泉は、こうした様々な見聞等が要因であったと推察されている。

■鶴田卓池(俳人)

近世岡崎の俳人で全国的に名を馳せた者に、桜井梅室、成田蒼虬、田川鳳朗とともに天保四老人と称された鶴田卓池がいる。

図1-4-34　富士画賛(卓池筆)

卓池は、明和５年(1768)、菅生の満性寺門前の染物屋、鶴田光雅の子として生まれた。本名は光貞といい、俳号には卓池のほかに、柏声社、青々処、藍叟、青々卓池を用いていた。

天明４年(1784)、17 歳で名古屋の俳人暮雨巷暁台に入門し、寛政４年(1792)暁台没後は、それを継いだ井上士朗に師事した。享和元年(1801)、江戸から信州へと向かう一茶を始めとする著名な信濃の俳人らとの旅が、卓池が俳壇の檜舞台に躍り出るきっかけとなった。この時の旅の成果が『鶴芝』にまとめられている。天保８年(1837)、卓池の古希(70 歳)の祝宴が盛大に行われ、門人・知友、全国各地から多数寄せらた句により 475 句を収めた賀集『竹春集』がつくられた。弘化３年(1846)、79 歳で亡くなるまで多数の門人を抱え、この地方の俳諧を牽引した。

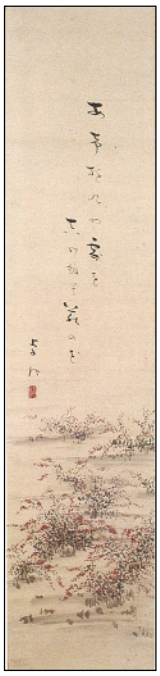


図1-4-35　左:萩原図(卓池自画賛)
図1-4-36　右:夏陰山山水図(卓池自画賛)

■月僊(画家)

月僊は、江戸時代中期の画家、丸山応挙と与謝蕪村、また室町時代の雪舟の影響を受け、画風を取り入れたといわれる。

元文６年(1741)尾張国名古屋の味噌商の家に生まれた。７歳で得度し、玄瑞の名で浄土宗の僧侶となり、安永３年(1774)、伊勢寂照寺の住職となった。

市内には門前町随念寺、伊賀町昌光律寺等に、月僊の絵画作品が多数残されている。

図1-4-37　瞽者図

■石川貫河堂(画家)

貫河堂は、京都で岸駒に学び、後に岡崎城下の祐金町に住み、寺社・旧跡を描いた挿絵作者として知られている。

天明元年(1781)、三河で生まれる。

市内に残る貫河堂の作には、中島町龍泉寺所蔵の仏涅槃図等が残されている。また門人に、俳人の鶴田卓池がおり、貫河堂が描いた挿絵に卓池らが俳句を入れた作品もある。

図1-4-38　仏涅槃図

■桜間青厓(画家)

青厓は、片桐桐隠に学び、三河国田原藩の藩士・画家であった渡辺崋山とも交流があった画家である。

天明６年(1786)、岡崎藩主本多忠顕の家臣桜間出右衛門能保の次男として江戸本郷の本多家下屋敷に生まれた。

図1-4-39　雨中山水図

図1-4-40　青緑山水図

岡崎城主本多氏に仕えた岡崎藩士であった青厓は、江戸時代の文人画家として活躍し、市内には文政８年(1825)の作である『青緑山水図』、文政６年(1823)の作である『林和靖閑居図』等が残されている。

ウ.幕末の政治の動き

こうした、文人、俳人、画家等の様々な文化が花開いた江戸時代末期であったが、その一方で、14 代将軍徳川家茂の死後、15 代将軍となった慶喜は慶応３年(1867)に大政奉還した。ところが、翌４年(1868)、旧幕府軍と倒幕軍による戊辰戦争が始まった。

岡崎藩は、表面的には幕府支持の態度をとりつつも、内部には旧幕府軍(旧幕府派)と倒幕軍(朝廷派)のそれぞれ支持する意見があった。しかし、藩主忠民により藩意は朝廷派で統一され、その結果、旧幕府派の藩士 30 数名は脱藩し、両派に分かれて戦うことになってしまった。

明治２年(1869)、１年５か月続いた戊辰戦争が終わり、新しい時代が始まることとなる。

コラム　龍海院の別名「是の字寺」

龍海院は、別名「是の字寺」と呼ばれる。

家康公の祖父の松平清康が、ある時、自らの手に「是」の字を握るという夢を見た。これに対し、龍渓院8世の模外惟俊が、「『是』は、『日の下の人』と読めることから、子孫が天下を取るという意味である。」と説いた。それを聞いた清康は喜んで、模外のために寺を建てた。その寺が龍海院といわれている。

(5)近代 [都市岡崎の成立]

①明治時代

ア.額田県の成立と廃止

明治４年(1871)７月、明治政府による廃藩置県により、これまでの岡崎藩は岡崎県となった。また、同年(1871)11 月には、三河各県と尾張知多郡が統合されて額田県となり、県庁が旧岡崎城内に置かれた。しかし、明治５年(1872)11 月には、愛知県に統合され、額田県はわずか１年ほどで廃止された。

この愛知県への統合には不服とする声が多く、三河を愛知県から分離して単独の県にしようとする「三河分県運動」が展開された。しかし、その願いや行動は実ることはなかった。

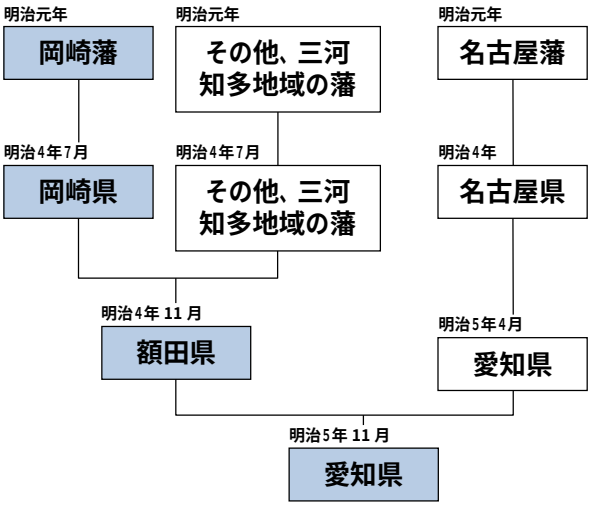


図1-4-41　額田県の成立と廃止

こうした中、明治維新が進むと新しい時代には不用とされた城郭が明治６年(1873)～７年(1874)にかけて取り壊された。明治８年(1875)、旧本丸城跡が城址公園として残されることになり、さらに、大正８年(1919)以降は、旧二の丸跡地を含めた一帯が公園として整備され、現在の岡崎公園となっている。

なお、堀と石垣のみが残され、往時の岡崎の象徴であった天守がないままではしのびないという市民の声により、昭和 34 年(1959)に天守が再建された。

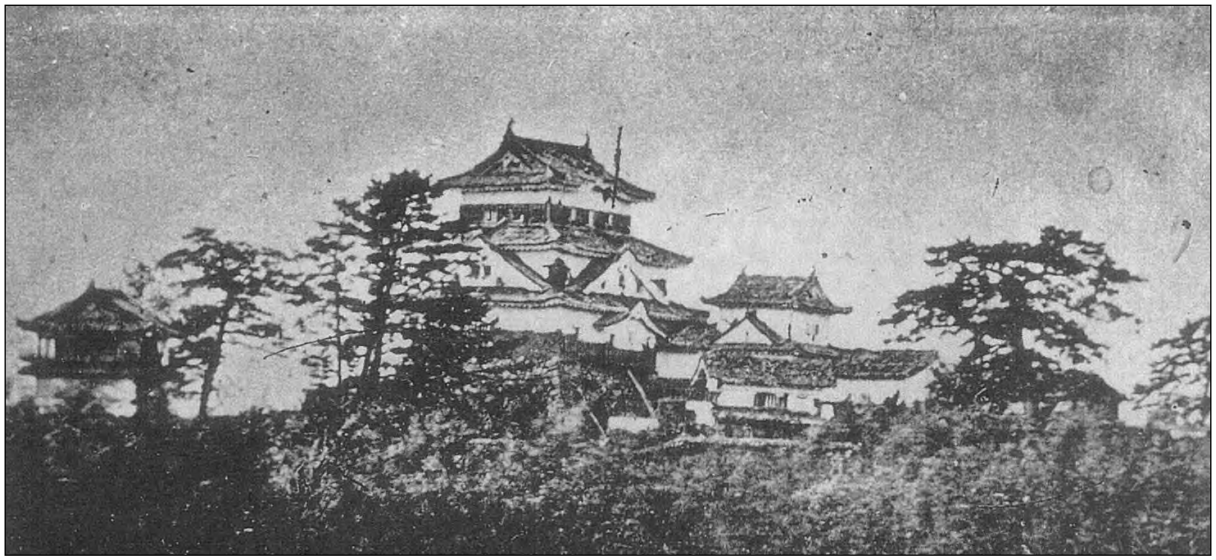


図1-4-42　旧岡崎城天守(明治５年(1872)、南東方向より)

イ.殖産興業と鉄道整備

明治初めの岡崎は、東海道沿いということもあり、西三河の物産が集まる地域であったが、周辺町村との合併によりさらに広い地域との連携強化を図り、産業及び商業の一層の拡大と安定を目指した。大正３年(1914)の広幡町との合併後、広幡町内を通り、岡崎と東加茂郡足助町の山間部とを結ぶ唯一の道路である足助街道を拡幅したことで、輸送量が東海道を上回るほどになり、岡崎町と広幡町の商業地域が拡大し、産業基盤が安定したといわれている。

こうした中、江戸時代から綿の生産地として有名であった岡崎では、明治時代になって発明された水車等を動力とする「ガラ紡」という紡績機が、この地域の流れの速い川で利用できたため普及した。それと並行して明治政府が殖産興業の政策として、「官営愛知紡績所」(現大平町)を設置したことから紡績業が発達し、繊維の町となった。

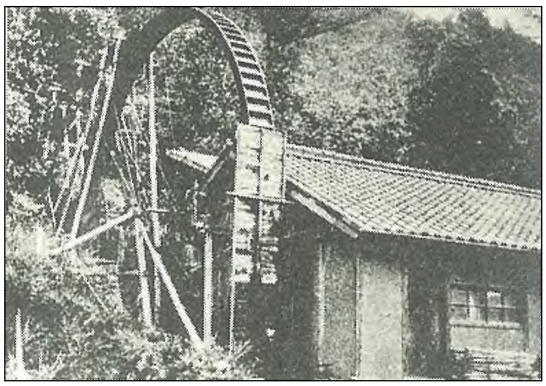


図1-4-43　ガラ紡水車

一方、こうした産業の発展には、鉄道輸送が大きく影響している。特に明治21年(1888)に東海道本線岡崎駅が開業してからは、岡崎の物資が鉄道を利用して運ばれるようになった。

しかし、郊外にある岡崎駅が不便であることから、明治31年(1898)、岡崎駅(岡崎停車場)と市街地(殿橋)を結ぶ岡崎馬車鉄道が開通する。また、明治44年(1911)には、西尾と岡崎を結ぶ西三軌道株式会社が開業し、岡崎・西尾方面への重要な交通機関となった。なお、岡崎馬車鉄道は、利用者の増加と馬の糞尿問題から大正元年(1912)に電車化され、岡崎電気軌道に変わった。

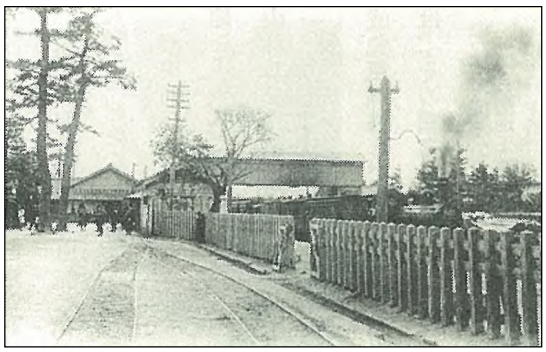


図1-4-44　岡崎停車場

コラム　官営愛知紡績所と日本製の紡績機（ガラ紡）

明治政府は、欧州の先進諸国にならって洋式機械を導入し、我が国の産業発展のための模範工場にしようと、官営紡績所が広島と岡崎の2か所に建設された。広島の方は開業前に民間に払い下げられたため、国内唯一の「官営愛知紡績所」となった、操業わずか5年8カ月で民間に払い下げられるが、その間に技術伝習生の受け入れや技術指導を通して、その後の日本の綿糸紡績業の発展に寄与したといわれている。しかし、導入された外国製の紡績機は非常に高価であった。

こうした中、臥雲辰致は、14 歳の時に、遊びからヒントを得てガラ紡績の仕組みを発明した。明治10 年(1877)、第1回内国勧業博覧会にこのガラ紡機が出品され、最高賞を得たことが評判となり、また外国製紡績機に比べて安価であったことから、全国に普及していった。

②大正・昭和時代（戦前）

ア.町村合併と産業基盤の拡大

明治22年(1889)の町村制施行により岡崎町が誕生したのちも、明治35年(1902)、同39年(1906)、大正３年(1914)、昭和３年(1928)と町村合併を繰り返し、行政域と人口を拡大してきた。

そうした中、大正末期、岡崎市は愛知電気鉄道(後の名古屋鉄道)の開通や岡崎電気軌道(路面電車)の軌道延長など公共交通が充実するとともに、これまで成長を見せていた紡績業(ガラ紡)から製糸業への転換、農村部から都市部への人口流入等により、康生町を中心とする町の様相が大きく変化した。

康生町付近には西洋風の建物が並び、これまでなかった電気器具、万年筆、自転車等の新しい商品を扱う店舗が登場した。また、岡崎城は市が公園として整備し、同時に市立図書館も建てられて近代的な公園となった。さらに、県立の岡崎病院と東病院、市立梅園病院が公的な病院として整備され医療面でも充実した。

市内では、大正末期から昭和初期にかけて自動車が普及し始めたことから、道路網の整備が進められた。市内を通る国道１号は、改修前は幅員(康生～大平区間)が4.5～7.2メートルと狭く、曲がり角が多い不便な道路であったが、昭和８年(1933)には幅員21.6メートルの幹線道路に変わり、社会基盤が整っていった。

図1-4-45　岡崎市内線

イ.都市岡崎の成立「市制施行」

明治末期、町村合併を繰り返してきた岡崎町では人口が20,000人を超え、当時愛知県内で人口が最も大きな町となっていた。

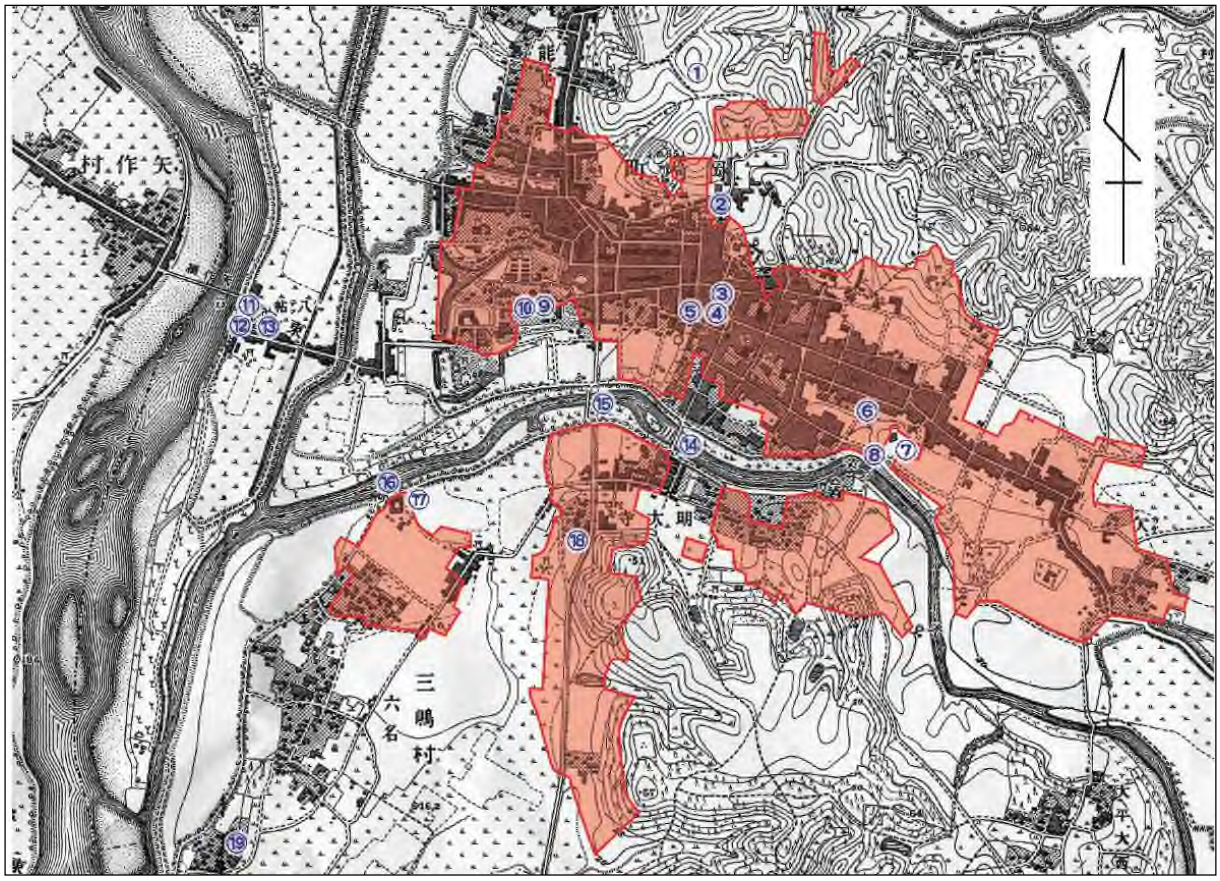
大正５年(1916)７月１日、岡崎町は岡崎市となり、愛知県では名古屋、豊橋に次いで３番目、全国では67番目の市制施行となった。当時の市域面積は19.68平方キロメートル、人口は37,639人であった。

ウ.空襲により焦土となった岡崎

昭和16年(1941)12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まった。昭和18年(1943)を境に戦況は悪化し、昭和19年(1944)には本土決戦の掛け声も聞かれるようになった。

こうした中、昭和20年(1945)7月19日から20日にかけて、アメリカ軍のB29爆撃機約80機により焼夷弾(しょういだん)を中心とする12,000発以上の爆撃が行われ、連尺町、康生町等の市中心部を焼き、近世以来続いた城下町を一瞬にして焦土とした。この時の被害は、全焼7,312戸、半焼230戸とされ、当時の市内全戸数20,000戸のうち3分の1以上の建物が焼失した。

図1-4-46　焦土と化した岡崎市街



図中番号
①六供浄水場ポンプ室･配水塔
②旧石原東十郎家住宅
③大黒屋漢方薬店
④永田屋精肉店
⑤岡崎信用金庫資料館
⑥三浦彦男家住宅
⑦旧額田郡公会堂･物産陳列所
⑧鈴木克明家住宅
⑨吉田正平家住宅
⑩吉田市五良家住宅
⑪板倉正家住宅
⑫木藤孝一家住宅
⑬八丁味噌本社事務所･蔵
⑭明代橋
⑮殿橋
⑯名鉄鉄橋
⑰田口公也家住宅
⑱林槇夫家住宅
⑲斎藤保家住宅

図1-4-47　戦災範囲と歴史的建造物の位置

(6)現代 [新都市岡崎の発展]

①昭和時代(戦後)

ア.戦災復興

昭和21年(1946)9月、本市は、名古屋市、豊橋市、一宮市とともに戦災都市として国の指定を受け、戦災復興事業を進めることとなった。

主に、狭く曲がりくねった城下町時代の町割りを近代的なものにするために、土地区画整理事業が進められた。当時の不安定な社会経済状況のあおりを受け、度重なる計画見直しを経て、碁盤目状の道路網整備や籠田公園を含む7つの公園の整備、拡張が昭和32年(1958)に完了した。現在の本市における中心市街地の原型が、この事業により形作られた。

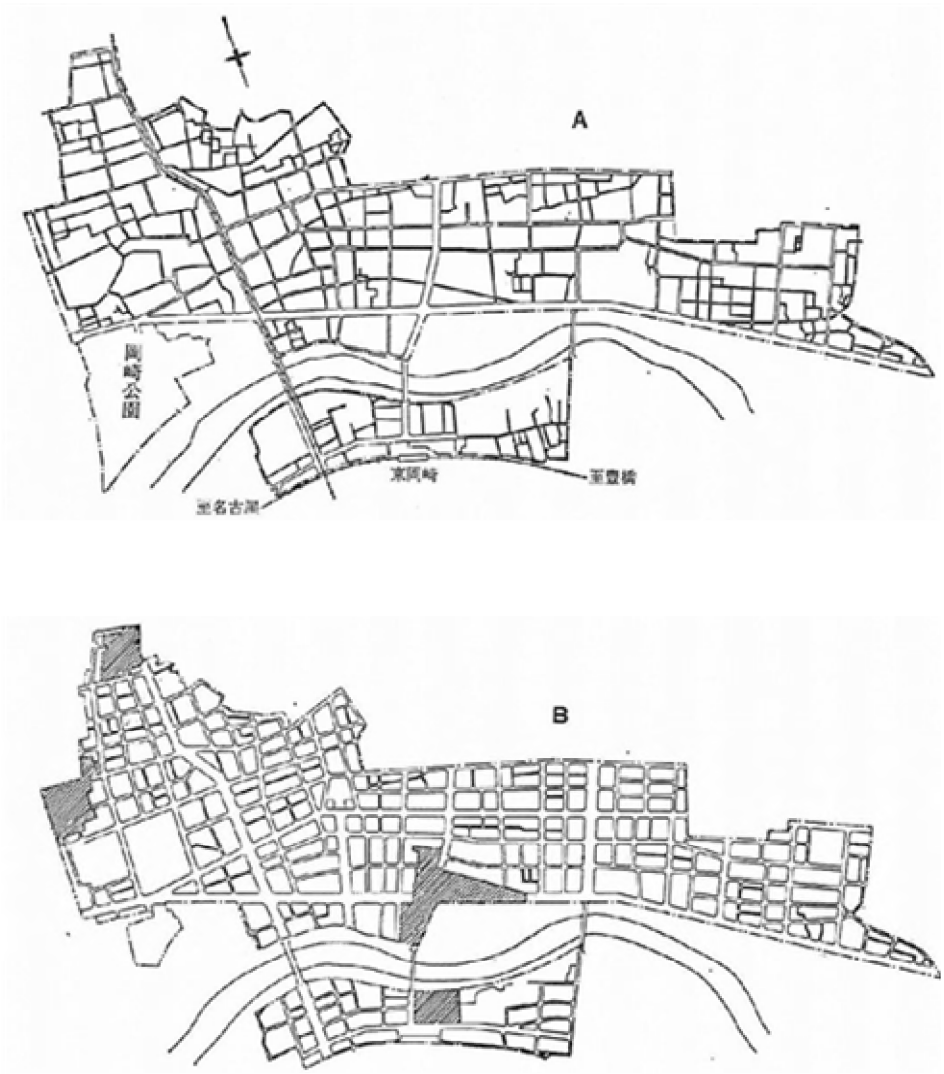


図1-4-48　岡崎市戦災復興土地区画整理事業の施行前後の比較(A：施行前、B：施行後(網掛部は対象外区域))

イ.町村合併による近代都市の成立

昭和 30 年(1955)、町村合併促進法を受けて、岡崎市は矢作町及び額田郡２町６村(岩津町、福岡町、本宿村、山中村、藤川村、龍谷村、河合村、常磐村)を編入し、昭和 37 年(1962)には六ツ美町を編入した。これらの合併により市域面積を合併前の約４倍の 226.97 平方キロメートル、人口を約 1.8 倍の 185,959 人に増大させた。

この時代の合併とその後の経済成長は、一度は戦火により失われた岡崎城下町の繁栄を蘇らせるとともに、戦後の西三河の中心地としての岡崎市の地位を確立させた。

②平成時代

ア.中核市への移行

昭和 29 年(1954)から昭和 48 年(1973)まで続いた高度経済成長期の中で、自然と産業と市民生活の調和のとれた都市づくりを目指し、各種都市基盤の整備を進めてきた本市は、平成 15 年(2003) 4 月 1 日に全国で 31 番目に中核市に移行した。人口は 348,049 人、市域面積が愛知県内で３番目となった。

イ.平成の大合併、そして市制施行 100 周年を迎えて

愛知県内では、平成 15 年(2003) 8 月から平成 23 年(2011) 4 月までの間に市町村合併が繰り返され、50 の市町村が 15 の市町に集約された。

そうした中、平成 18 年１月１日、岡崎市は額田町と合併し、面積 387.24 平方キロメートル(平成 27 年(2015)現在は、387.20 平方キロメートル)、人口 367,518 人、世帯数 138,137 世帯の新しい岡崎市が誕生した。

平成 28 年(2016)には市制施行 100 周年を迎えた。

コラム 額田地区

明治4年(1871)、廃藩置県により、既に岡崎県となっていた旧岡崎藩は、その他三河知多地域の藩と統合して額田県となり、県庁を岡崎城の中に置いた。しかし、翌年、額田県は名古屋県及び犬山県と合併して愛知県となり、現在の額田は愛知県に包含されることとなり、現在に至っている。

奈良･平安時代、合併以前の額田町に相当する地域は、三河国の額田郡に属し、額田八郷と呼ばれ、新城、鴨田、位賀、額田、麻津、六名、大野、駅家の八つの郷に分かれていたといわれている。そのいずれの郷も、乙川や男川、またその支流の近くに位置していたと推測され、古来よりその下流にあたる岡崎との関係は深かったと考えられている。

額田地区は、山深い地域であることなどから、河川を中心とした流域単位での文化が継承され、現在でも、万足平の猪垣、千万町の神楽、当(頭)屋祭祀等の、暮らし、信仰、祭礼儀式等に関する地域固有の特徴的な伝統や歴史文化資産が多数残されている。

表1-4-5　岡崎市年表（主なできごと）　（徳川家康公に関する箇所は下線表示）

時代	年号	できごと	
		岡崎市	全国
旧石器	紀元前 14000	・仁木八幡宮遺跡・五本松遺跡でナイフ形石器や細石器を使う	・ナイフ形石器や細石器が発達 ・磨製石器が発達
縄文	10000　(縄文早期) 3000　(縄文中期) 1000　(縄文晩期)	・村上遺跡で押型文土器をつくり屋外に炉を築いて生活する ・村上遺跡で炉を設けた竪穴住居をつくって定住生活をする ・真宮遺跡で大規模な集落が営まれ、土器棺墓がさかんにつくられる。また、土偶を祀る	
弥生	300　(弥生前期) 100　(弥生中期) 紀元後 200　(弥生後期)	・味噌粕岩遺跡に人が住み始める ・高木遺跡で方形周溝墓への埋葬が行われる ・東郷遺跡で集落の周囲に壕をめぐらす	・稲作農耕が西日本東日本まで広がる ・倭国大乱 ・卑弥呼が魏に使者派遣(239)
古墳	300　(古墳前期) 400　(古墳中期) 500　(古墳後期)	・和志山古墳・甲山第１号墳が築かれる ・生平遺跡など市内各地で大規模な集落が営まれる ・経ヶ峰第1号墳が築かれる ・岩津第1号墳・神明宮第1号墳が築かれる。横穴式石室をもつ小円墳ができる	・巨大前方後円墳築かれる ・前方後円墳衰退 ・群集墳がつくられる
飛鳥			・聖徳太子、摂政となる(593)
	645　(大化　1) 701　(大宝　1)	・このころ、北野廃寺が建立される ・真福寺創建の説がある	・大化の改新(645) ・大宝律令(701)
奈良			・平城京に遷都(710)
	792　(延暦　11)	・矢作川河床遺跡から、このころの墨書土器が出土する	
平安	807　(大同　2)	・北野廃寺が焼失という説がある	・平安京へ遷都(794) ・藤原道長、摂政となる(1016) ・平清盛、太政大臣となる(1167) ・頼朝、熱田で生まれる(1147)
鎌倉	1184　(応徳　1) 1238　(暦仁　1)	・源範頼が三河守となる ・このころ足利義氏が三河守護となり、矢作宿に三河国守護と額田郡公文所を置いた ・このころから矢作西・東宿にぎわう	・頼朝、鎌倉幕府を開く(1192)
室町	1336　(建武　2) 1380　(康暦　2) 1452　(享徳　1) 1471　(文明　3) 1475　(　〃　7) 1530　(享禄　3) 1542　(天文　11) 1547　(　〃　16)	・矢作川の戦いで足利尊氏方が敗退する ・このころ、菅生川(乙川)の西流化工事が行われる ・三河守護代西郷稠頼が龍頭山に砦(岡崎城)を築く ・松平信光が安城城を手に入れ、安城に移る ・松平親忠、大樹寺を創建する ・松平清康が龍頭山に岡崎城を移す (家康　1歳)　家康公生誕。幼名は父、祖父と同じ竹千代 (家康　6歳)　今川氏の人質として駿府へ護送中、戸田氏の裏切りで、織田氏の人質となる	・足利尊氏、幕府開く(1338) ・応仁の乱(1467) ・鉄砲伝来(1543)

	1549 (天文 18)	(家康 8歳) 今川氏が織田氏との人質交換により竹千代を取り戻す	・キリスト教伝来(1549)
戦国	1555 (弘治 1)	(家康 14歳) 元服し松平次郎三郎元信と名乗る	
	1557 (〃 3)	(家康 16歳) 関口親永の娘於瀬名(築山殿)と結婚	
	1558 (永禄 1)	(家康 17歳) 尾張大高城への兵糧入れを成功させる	
	1560 (〃 3)	織田信長が今川を桶狭間で破る 今川義元討死 大高城を逃れ大樹寺に入る。岡崎城に帰る	
	1561 (〃 4)	(家康 20歳) 西三河を平定。織田信長と和睦をする	
	1562 (〃 5)	(家康 21歳) 織田信長と清洲同盟を結ぶ 人質交換で今川より妻子を取り戻す	
安土	1563 (〃 6)	・西三河に一向一揆が起こる	
	1563 (〃 6)	(家康 22歳) 家康と改名。三河一向一揆勃発。翌年終結	
	1565 (〃 8)	(家康 24歳) 三河三奉行を制度化する	
	1566 (〃 9)	(家康 25歳) 徳川への復姓を勅許され、三河守に叙任	・織田信長入京(1568)
	1570 (元亀 1)	(家康 29歳) 姉川で織田・徳川軍が浅井・朝倉軍を破る 浜松に城を築き岡崎城より移る	
	1572 (〃 3)	(家康 31歳) 三方ヶ原の戦いで武田信玄に惨敗する	・幕府滅亡(1573)
	1575 (天正 3)	(家康 34歳) 織田信長と共に長篠の戦いで武田軍に大勝	
	1582 (〃 10)	(家康 41歳) 本能寺の変。伊賀越えで岡崎に帰還する	・本能寺の変
桃山	1590 (〃 18)	(家康49 歳) 豊臣秀吉と小田原北条氏を攻略。関東移封に	・豊臣秀吉、天下統一
	1590 (〃 18)	・岡崎城には田中吉政が入る	
	1591 (〃 19)	・田中吉政による城下町建設が進む	・豊臣秀吉、朝鮮出兵
	1594 (文禄 3)	・豊臣秀吉が田中吉政に矢作川の築堤を命じる	
	1598 (慶長 3)	・矢作橋の架橋工事が始まる	・豊臣秀吉没
江戸	1600 (〃 5)	(家康 59歳) 関ヶ原の合戦。多くの豊臣武将が味方する	・関ヶ原の戦い
	1601 (〃 6)	・本多康重、岡崎藩主となる (前本多)	・江戸幕府成立
	1603 (〃 8)	(家康 62歳) 征夷大将軍に叙任される	
	1605 (〃 10)	(家康 64歳) 将軍職を徳川秀忠に譲り、時代は安定へ	
	1607 (〃 12)	(家康 66歳) 駿府城に移り、大御所と呼ばれる	
	1611 (〃 16)	(家康 70歳) 伊賀八幡宮本殿などを修復する	
	1614 (〃 19)	(家康 73歳) 大坂冬の陣	
	1615 (元和 1)	(家康 74歳) 大坂夏の陣	・武家諸法度
	1616 (〃 2)	(家康 75歳) 駿府城で永眠	
	1617 (〃 3)	・岡崎藩主本多康紀、岡崎城天守を再建する	
	1634 (寛永 11)	・矢作橋第1回かけ替え(初めて板橋となる)	・参勤交代制度(1635)
	1636 (〃 13)	・徳川家光、伊賀八幡宮・六所神社・大樹寺の築造を命じる (奉行は藩主本多忠利)	・鎖国(1639)
	1645 (正保 2)	・滝山東照宮の造営を開始する	・享保の大飢饉(1732)
	1767 (明和 4)	・三河でお鍬祭りが流行する	
	1770 (〃 7)	・藩主水野忠粛、六手永制を採用する	・天明の大飢饉 (1783～1787)
	1786 (天明 6)	・この年、三河大飢饉となる	
	1789 (寛政 1)	・「岡崎藩萬書上」によると、藩領 200 か村、石高 60,383 余石、人口 39,531 人とある	
	1790 (〃 2)	・このころ、秋葉信仰が広まり、各地に常夜燈が建てられ、秋葉講がはやる	
	1801 (享和 1)	・「享和の書上」によると、岡崎城下町廻り 19 か町、総戸数 1,845 軒とある	
	1822 (文政 5)	・このころ、菅生天王社祭礼に鉾船が出て、花火を奉納する	

	1836 (天保 7)	・加茂一揆がおこる（岡崎藩出兵し鎮圧）	
	1850 (嘉永 3)	・矢作川大洪水で被害。翌年にかけて、岡崎藩総力をあげて堤防を直す	
			・ペリー来航(1853)
	1854 (安政 1)	・安政の大地震、大きな被害がでる	・日米和親条約
	1855 (〃 2)	・大樹寺の本堂、書院、庫裏などを全焼する	
	1857 (〃 4)	・大樹寺の本堂、大方丈の障壁画が完成する	
			・日米修好通商条約(1858)
	1867 (慶応 3)	・藤川宿でお札降り。ええじゃないか運動	・大政奉還
明治	1868 (明治 1)	・三河県が設置される	・五箇条の御誓文
	1871 (〃 4)	・岡崎藩など藩制改革始まる	・廃藩置県
		・廃藩置県、岡崎県・西大平県が設置される	
		・三河の諸県が統合されて、額田県となり県庁が置かれる	
	1872 (〃 5)	・額田県が廃止され、愛知県に合併される	
			・徴兵令、地租改正令(1873)
			・西南戦争(1877)
	1881 (〃 14)	・官営愛知紡績所が操業を開始する	
	1886 (〃 19)	・官営愛知紡績所が民間に払い下げられる	
	1888 (〃 21)	・東海道鉄道浜松―大府間が開通し、岡崎駅が開業する	
	1889 (〃 22)	・愛知県が町村合併を実施。岡崎は 27 町村	・大日本帝国憲法発布
	1890 (〃 23)	・岡崎銀行が設立される	
			・日清戦争(1894)
	1896 (〃 29)	・岡崎製糸株式会社ができる	
	1897 (〃 30)	・岡崎電燈合資会社が開業する	
	1898 (〃 31)	・岡崎馬車鉄道の岡崎停車場―殿橋間が開通	
		・男川製糸場ができる	
			・日英同盟(1902)
	1903 (〃 36)	・岡崎町役場庁舎が完成する	
			・日露戦争(1904)
	1906 (〃 39)	・大平紡績場が愛知紡績所跡地に創業する	
		・愛知県で大規模な町村合併が行われる	
	1909 (〃 42)	・岡崎繭糸株式会社設立	
	1910 (〃 43)	・菅生川(乙川)・伊賀川堤防に桜・楓 5,000 本植える	
	1911 (〃 44)	・西三軌道株式会社設立。岡崎新駅～西尾間の営業開始(西尾軽便鉄道)	
大正	1912 (大正 1)	・西三軌道から西尾鉄道に変更	
		・岡崎鉄道が電車に切り替わる	
	1915 (〃 4)	・家康公薨去 300 年祭	
	1916 (〃 5)	・岡崎市制施行（7月1日）	
	1923 (〃 12)	・岡崎市立図書館ができる	・関東大震災
		・愛知電気鉄道、新知立～東岡崎間が開通	
	1924 (〃 13)	・岡崎電気軌道、殿橋～細川門立間が開通	
			・普通選挙法(1925)
昭和	1926 (昭和 1)	・日清紡績は帝国紡績を買収し日清紡績戸崎工場となる	
	1927 (〃 2)	・愛知電気鉄道、神宮前～豊橋間全通する	・金融恐慌
	1928 (〃 3)	・岡崎村・男川村・美合村・常磐村箱柳と合併する	
			・世界恐慌(1929)
			・満州事変(1931)
	1933 (〃 8)	・国道1号の開通式	
	1934 (〃 9)	・愛電自動車、本宿～蒲郡間にバス開通	
			・日中戦争(1937)

			・第二次世界大戦(1939) ・太平洋戦争(1941)
	1945（〃　20）	・三河地震(M7.1)、大きな被害がでる ・岡崎空襲、多大な被害がでる ・岡崎戦災復興事務所が設置される	・広島、長崎原爆投下 ・無条件降伏
	1946（〃　21）	・八幡町にバラック店舗約 200 軒でき、闇市と呼ばれ、にぎわう	・日本国憲法公布 ・六三制実施(1947)
	1950（〃　25）	・東岡崎駅前整備工事が完了する	・朝鮮戦争
	1951（〃　26）	・名鉄市内線が福岡町まで延長する	・日米安全保障条約発効(1952)
	1954（〃　29）	・県立愛知病院(結核療養所)ができる	
	1955（〃　30）	・福岡町・龍谷村・藤川村・山中村・本宿村・河合村・常磐村・岩津町の8町村が岡崎市に合併する ・矢作町が岡崎市に合併する	
	1956（〃　31）	・形埜村・宮崎村・豊富村・下山村の一部が合併し額田町に	
	1959（〃　34）	・岡崎城天守復元工事完了し、一般公開される ・伊勢湾台風で大きな被害が出る	
	1962（〃　37）	・六ツ美町が岡崎市へ合併する ・名鉄市内線が廃止され、バス輸送となる	
	1964（〃　39）	・石田茂作氏による北野廃寺跡の発掘調査	・東京オリンピック
	1965（〃　40）	・家康公薨去 350 年祭	・ベトナム戦争
	1966（〃　41）	・市立図書館が康生町の元警察署跡へ移転する	・総人口1億人突破
	1967（〃　42）	・岡崎石工団地が上佐々木町に完成する	
	1968（〃　43）	・東名高速道路の岡崎インターが開通する	
	1969（〃　44）	・岡崎市郷土館が開館する	
	1970（〃　45）	・国道1号、騒音の実態調査が行われる ・岡多線、岡崎～北野枡塚間が開通する ・岡崎市が市街化区域・市街化調整区域を決定する	・大阪万博
	1971（〃　46）	・市立図書館が明大寺町に移転する	・沖縄復帰
	1973（〃　48）	・名鉄挙母線が廃止され、バス輸送となる ・六名町の区画整理工事中に真宮遺跡発見される	・第一次石油ショック
	1976（〃　51）	・岡多線、岡崎～新豊田間が営業を始める ・岡崎石製品工場団地が小呂町にできる	・第二次石油ショック(1979)
	1982（〃　57）	・三河武士のやかた家康館ができる	
	1985（〃　60）	・奥殿陣屋復元工事が完成する	
	1987（〃　62）	・市制 70 周年記念博「葵博」が開かれる	・国鉄分割、民営化
	1988（〃　63）	・ＪＲ岡多線が愛知環状鉄道となる ・ＪＲ東海道線西岡崎駅ができる	
平成	1989（平成　1）	・東岡崎駅地下駅化工事が完成する ・ＪＲ岡崎駅橋上駅化工事が完成する	・消費税3％導入
	1996（〃　8）	・岡崎市美術博物館が開館する	・阪神淡路大震災(1995)
	2000（〃　12）	・東海豪雨により床上・床下浸水住家などが多数発生する	・愛知万博(2005)
	2006（〃　18）	・額田郡額田町が岡崎市に編入合併する	
	2008（〃　20）	・平成 20 年8月末豪雨が発生	・東日本大震災(2011)
	2015（〃　27）	・家康公薨去 400 年祭	
	2016（〃　28）	・新東名高速道路が開通する ・市制施行 100 周年	

※参考：『ふるさとの歴史 岡崎(平成 12 年発行)』を基に作成。

1-5.岡崎城下町の成り立ちと都市の構造

(1)中世末期～近世初期の岡崎城下 -天正 18 年(1590)～慶長6年(1601)頃-

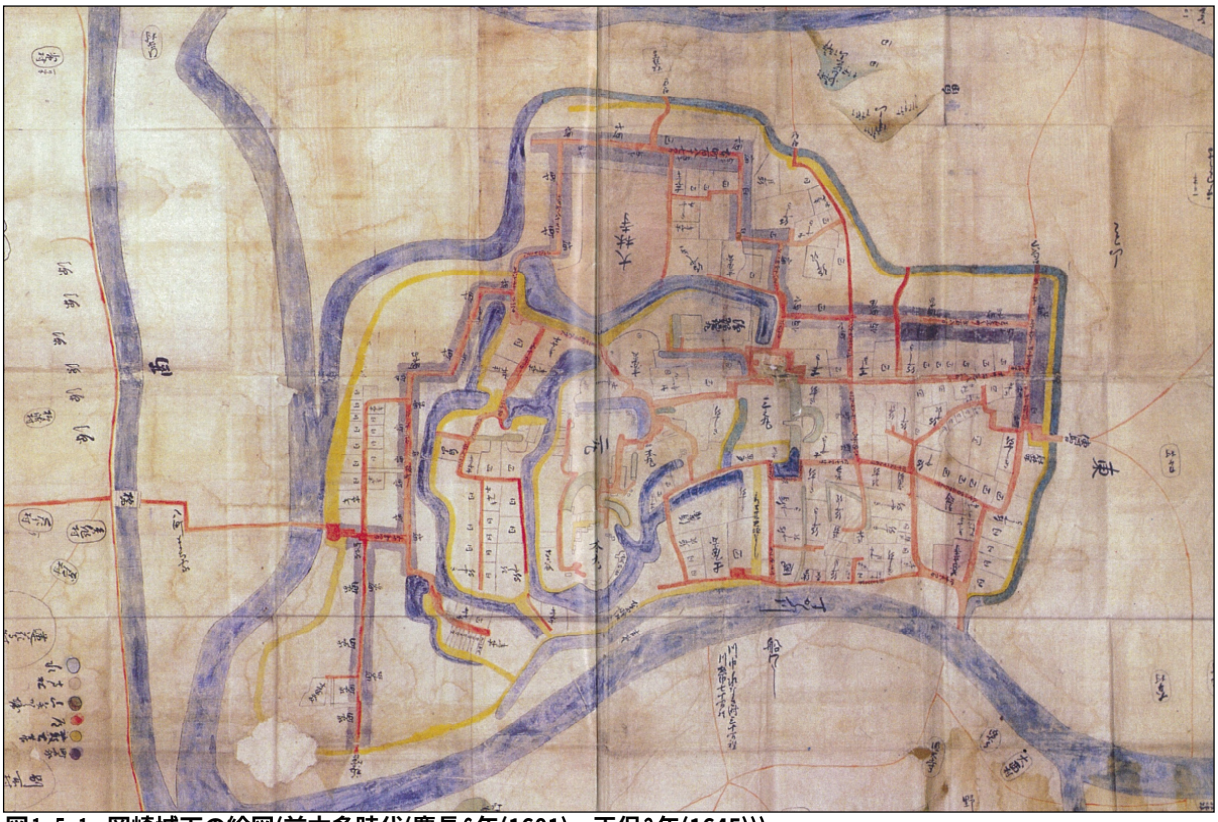


図1-5-1　岡崎城下の絵図(前本多時代(慶長6年(1601)～正保2年(1645)))

豊臣政権下において豊臣方の田中吉政は、関東の徳川家康公に備えて城の東側を守ることができる城郭の整備、約 2,500 人の家臣が暮らす城下町の整備、矢作川の築堤等を行った。

特に城下町全体を取り囲む堀と土塁を築き、総構え(総曲輪)とした。板屋、松葉、田、材木、肴町等の商人や職人が住む町を造った。また、東海道沿いの連尺、材木、肴、田、板屋と六地蔵、福島各町を除く総構え内は武士の屋敷地とした。

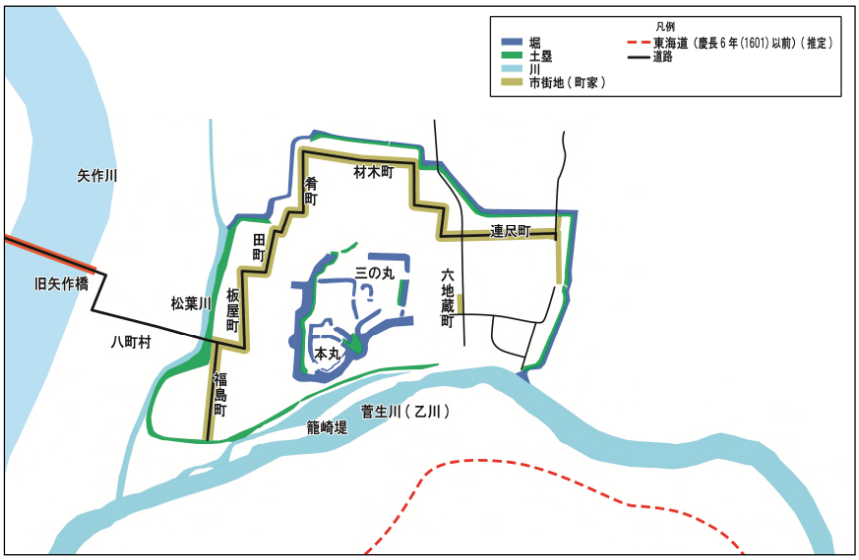


図1-5-2　近世初期の城下町(慶長 6 年(1601)前後)

(2)近世の岡崎城下 -慶長6年(1601)～正保2年(1645)頃-

図1-5-3　岡崎城下の絵図(後本多時代(明和6年(1769)～明治4年(1871)))

田中吉政により始められた岡崎城下の整備は、その後の岡崎藩主により引継がれ、徐々に城下町が形成されていった。菅生川(乙川)の南を通っていた東海道は吉政により城下内に引き入れられ、防衛のための屈曲した形状は、現在も「東海道二十七曲り」と呼ばれている。

市街地は連尺町の東に徐々に広がり、籠田町、伝馬町が新たに設けられた。また、東海道から城下への出入口には、東に籠田総門、西に松葉総門を始めとする門が整備され、侍屋敷と町家の境となる郭木戸が設けられた。菅生橋の整備もこの頃である。

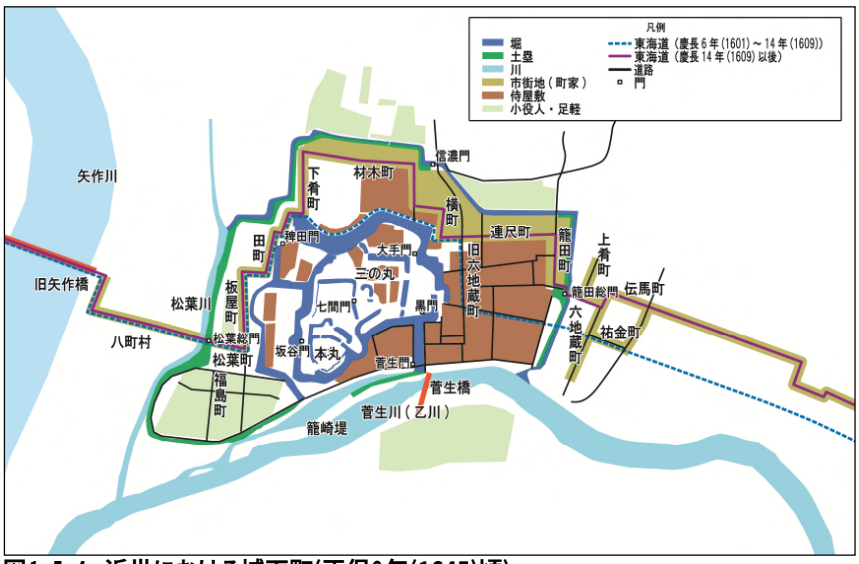


図1-5-4　近世における城下町(正保2年(1645)頃)

(3)近代における市街地

①明治期の市街地

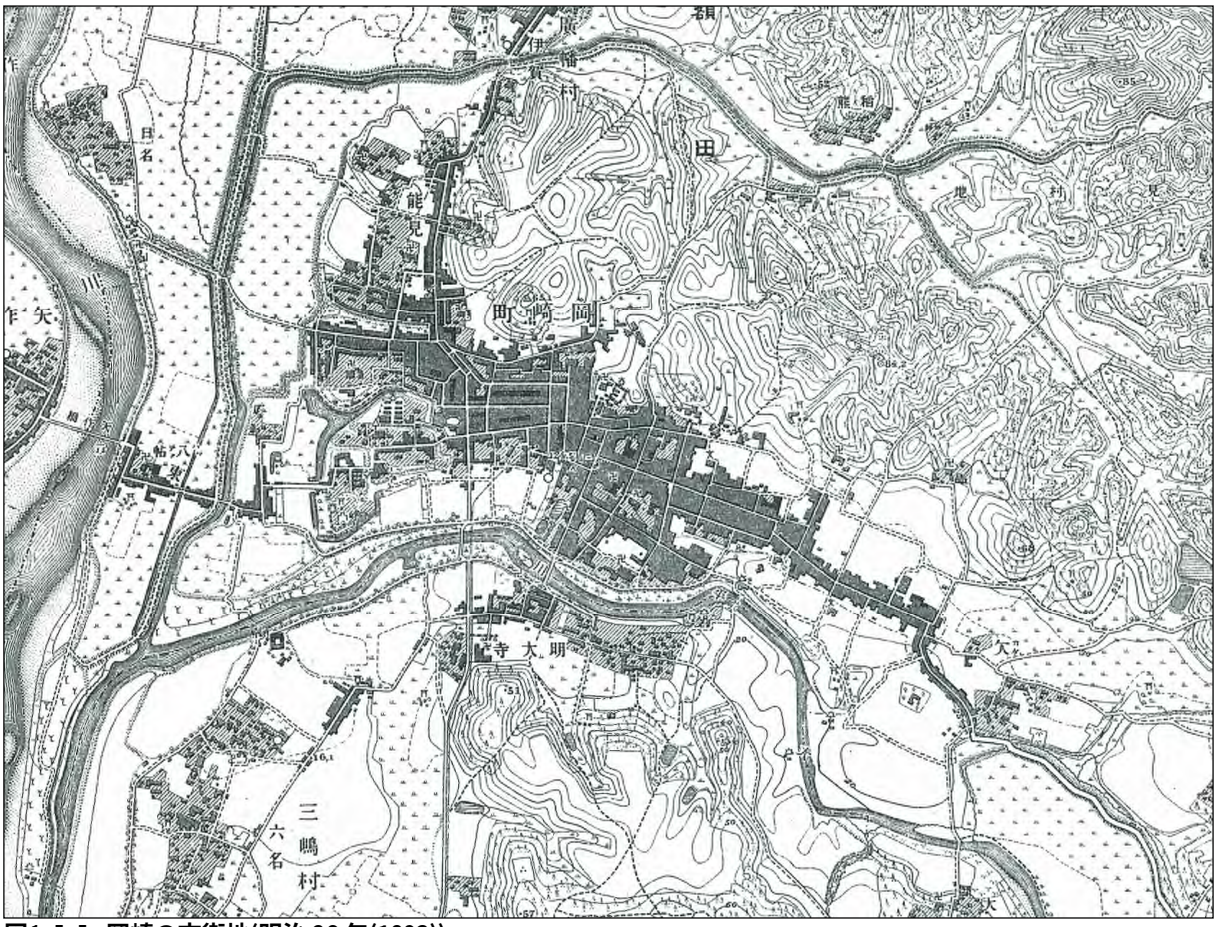


図1-5-5　岡崎の市街地(明治 26 年(1893))

明治初期、愛知県は全国一の綿の産地であったため、岡崎では紡績業が発達し繊維の町として発展した。また、明治 20 年(1887)頃からは製糸業が急速に発達しつつ、産業革命の時代を迎えたこともあり、岡崎は大きく発展した。

岡崎城下町を形成していた堀や土塁等は除かれて道路や住宅地となり、市街地が広がった。特に、北へ延びていた旧足助街道沿いや、伝馬町の東に延びる旧東海道沿いに市街地が広がっていった。

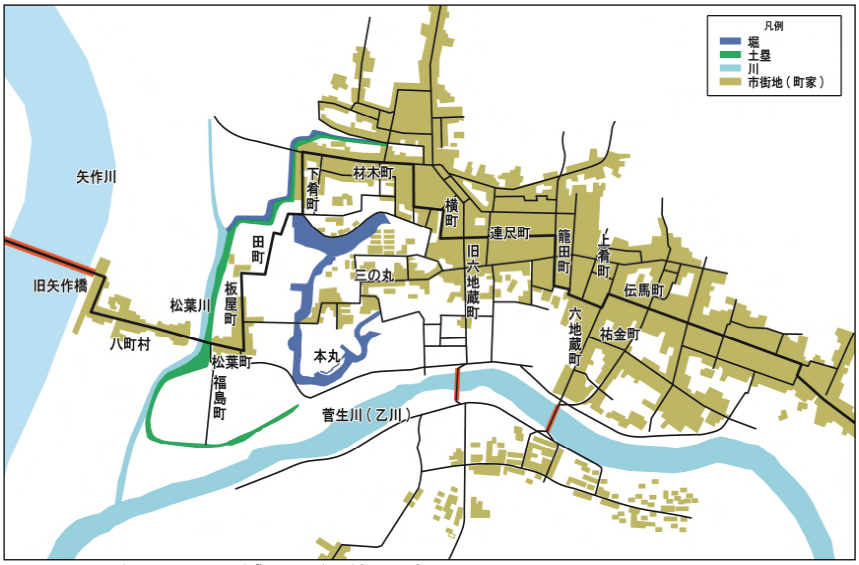


図1-5-6　近代における城下町 (明治 26 年(1893)頃)

②大正期の市街地

図1-5-7　岡崎の市街地(大正9年(1920))

③昭和期(戦前)の市街地

図1-5-8　岡崎の市街地(昭和7年(1932))

④昭和期(戦後)の市街地

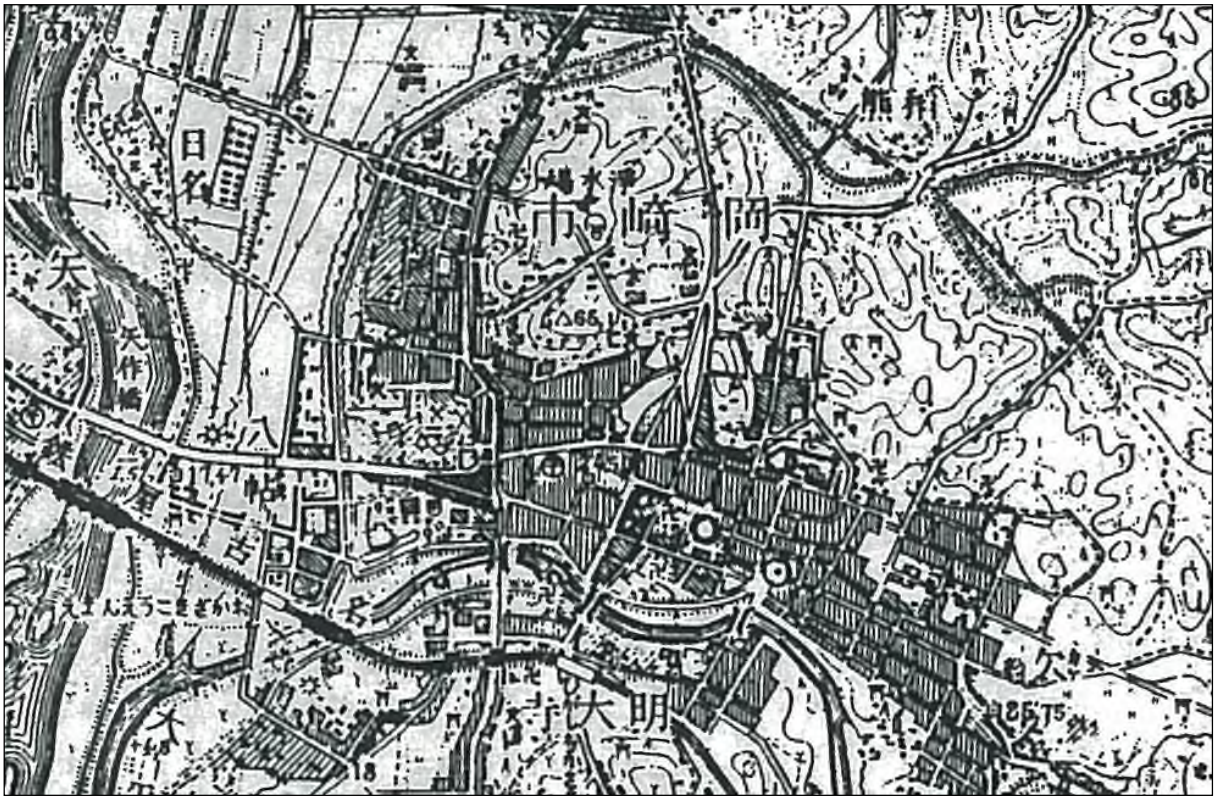


図1-5-9　岡崎の市街地(昭和 26 年(1951))

⑤昭和期(戦災復興土地区画整理事業完工後)の市街地

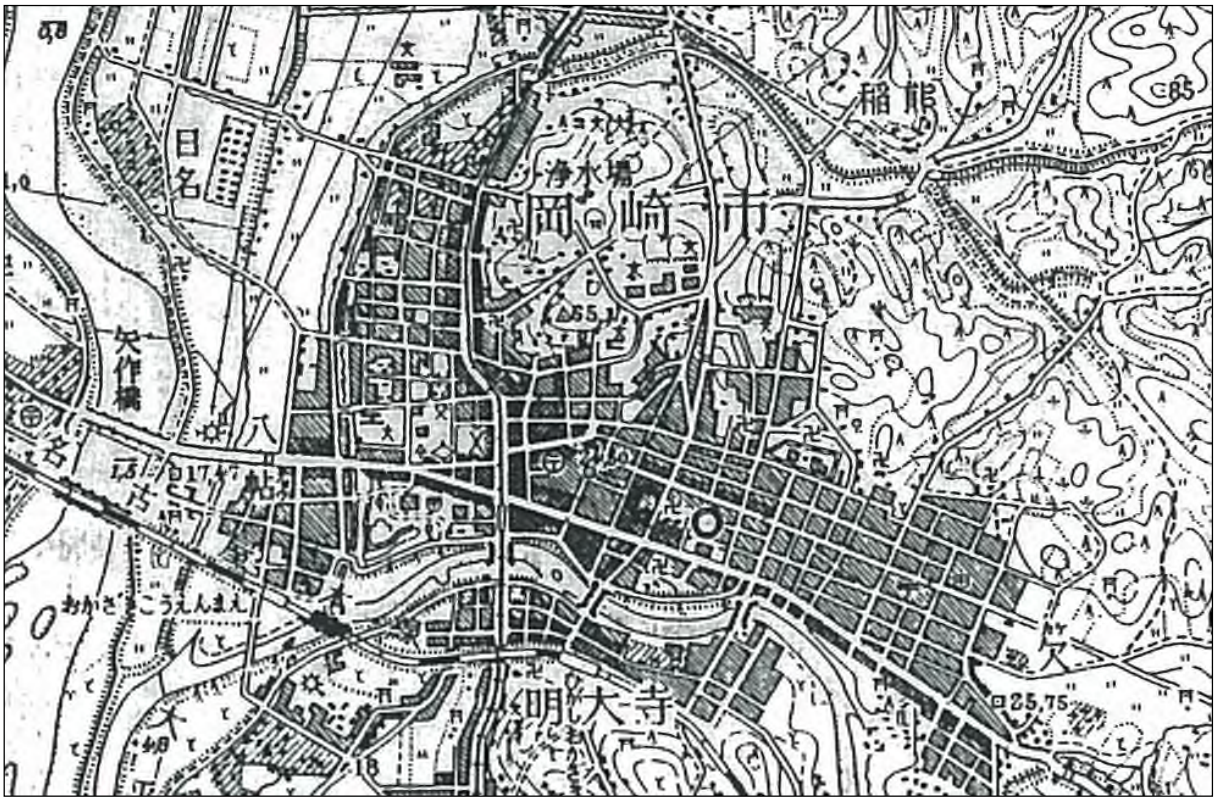


図1-5-10　岡崎の市街地(昭和 33 年(1958))

(4)現在の岡崎市街地

図1-5-11　岡崎の市街地(平成2年(1990))

明治・大正時代に大きく発展した岡崎城下町であったが、昭和 20 年(1945) 7 月、太平洋戦争下において、焼夷弾(しょういだん)を中心とした爆撃が町のほとんどを焼き尽くしてしまった。

岡崎市では、昭和 21 年(1946)～昭和 33 年(1958)に戦災復興土地区画整理事業により南北の県道 39 号線と東西の国道 1 号を主要道路とする碁盤目状の道路網整備が行われた。現在の中心市街地の原型はこの事業によりできあがった。なお、名鉄名古屋本線は、その前身である愛知電気鉄道が昭和 2 年(1927)に神宮前-豊橋間を開通している。

図1-5-12　現在の岡崎市街地 (平成 27 年(2015))

1-6.岡崎の歴史と関わりのある主な人物

岡崎の歴史及び歴史的風致と関わりのある主な人物を以下に整理する。

藤原季兼（ふじわらの　すえかね･としかね）
天喜3年(1055)～康和4年(1102)

藤原南家武智麻呂の子孫にあたり、中国の学問を教える職(文章博士)についた藤原実範の子として生まれる。文章博士等を多数輩出している家系であるが、中下級貴族の出身で父や兄弟を超える栄達の道がほとんど閉ざされていた。季兼は、都市貴族として都に住まわず、祖父の弟保相と異母兄弟の季綱の２人が三河守を歴任した際に築いた富や領地の一部を譲り受けて、三河国の私領主として自立する方向に活路を見出したと考えられている。こうした中、尾張国愛知郡に鎮座する熱田社(熱田神宮)の祀祭者の最高位大宮司職を世襲していた国造の末裔尾張氏は、この頃急速に衰退していて、藤原氏を通じて神社の神格を高めようと熱田神宮は、季兼を大宮司尾張員職は娘、松御前と結婚させた。２人の間には、後に熱田大宮司となる藤原季範が生まれる。晩年、季兼は尾張国目代となった。

藤原季範（ふじわらの　すえのり･としのり）
寛治4年(1090)～久寿2年(1155)

藤原南家・藤原季兼と熱田大宮司尾張員職の娘、松御前との間に生まれる。「額田冠者」と呼ばれる。季範 12 歳の時、父季兼が亡くなったため、母方の祖父の下で養育された。母松御前の実家である尾張氏は、代々熱田大宮司を務めていたが、これを季範に譲ったことから、季範は尾張国の目代にもなり、三河と尾張の２つの拠点を得て勢力を拡大していった。

なお、季範の長男範忠は、大宮司職を継ぎ、その他にも額田郡の私領等を継いでいる。また、範忠の代に滝山寺の寺域の確定や本堂の移築造営が行われており、滝山寺に対する強力な援助や保護が行われていたことがうかがわれる。

源頼朝（みなもとの　よりとも）
久安3年(1147)～建久 10 年(1199)

源義朝の３男として熱田で生まれる。母は熱田大宮司藤原季範の娘、由良御前である。鎌倉幕府初代将軍。平治の乱で伊豆に流された後、平家を滅ぼして征夷大将軍に補任される。全国支配を進める中で早くから三河国を重視し、元暦元年(1184)に弟の範頼を三河守に推挙して知行国の一つに加えた。また三河最初の守護に側近として信任する安達盛長を補任した。滝山寺の住職であった従兄寛伝は、頼朝が没するとその菩提を弔うため滝山寺山内に惣持禅院の建立を開始し、頼朝三周忌に追善供養を行った。

源範頼（みなもとの　のりより）
久安6年(1150)～建久4年(1193)

源義朝の６男として生まれる。源頼朝の異母弟、源義経の異母兄である。治承・寿永の乱において、頼朝の代官として源義仲・平氏追討に赴き、義経と共にこれらを討ち滅ぼした。その後も源氏一門として、鎌倉幕府において重きをなすが、頼朝に謀反の疑いをかけられ誅殺された。

元暦元年(1184)に兄の頼朝に三河守に推挙され知行国を与えられている。

図1-6-1　源範頼像

足利義氏（あしかが　よしうじ）
文治5年(1189)～建長6年(1254)

鎌倉中期の武士。三河国守護職を務めた。貞応元年(1222)滝山寺の３度目の本堂を造立し大いに庇護した。また、守護所を矢作宿において国内統治の要所とし、一族や被官を地頭代・郷司に取り立てて所領を支配させた。亡くなった翌年滝山寺に法華堂が菩提所として建てられた。

図1-6-2　足利義氏像

足利尊氏（あしかが　たかうじ）
嘉元3年(1305)～延文3年(1358)

室町幕府初代将軍。建武新政下では参議・武蔵守となり後醍醐天皇の諱の一字を賜り尊氏と改名した。三河守護に執事の近親者である高師兼ら高一族を補任するなど三河の政治的・軍事的位置を重視した。三河で育った一門・被官の支持を基盤に、彼らの軍事力で内乱を戦い抜いた。

図1-6-3　足利尊氏像

足利義満（あしかが　よしみつ）
延文3年(1358)～応永 15 年(1408)

室町幕府３代将軍。南北朝の合一を果たし、有力守護大名の勢力を抑えて幕府権力を確立させた。また勘合を用いた日明貿易を始め、鹿苑寺(金閣)を建立し、北山文化を開花させた。足利尊氏の遺言により天恩寺を建立し、足利一族の祈願所とした。

図1-6-4　足利義満像

松平親氏（まつだいら　ちかうじ）
生没年不詳

家康公の父祖松平八代の初代。近世史書では源氏新田氏の末裔で、酒井氏の女婿になった後、加茂郡松平郷の松平太郎左衛門信重の女婿となって家を継ぎ、所領を拡大した。江戸時代前期には書かれていた『松平氏由緒書』によれば、遍歴の知識人が連歌の会の執筆で教養を認められ、松平信重の婿になったといわれている。

図1-6-5　松平親氏像

松平泰親（まつだいら　やすちか）
生没年不詳

松平八代の２代目。初代親氏の子説と弟説があり、没年は永和２年(1376)から文明４年(1472)までの９説がある。岩津町若一王子神社蔵の棟札銘等写によれば、応永 33 年(1426)に若一王子社を建立したとあり、泰親の実在と応永 33 年以前の岩津移転が確認された。

松平信光（まつだいら　のぶみつ）
応永 11 年(1404)～長享2年(1488)

松平八代の３代目。親氏子説と泰親子説がある。泰親と共に岩津城を奪取し、三河版応仁・文明の乱に乗じて岡崎・安城の２城を入手し、西三河の有力な国人領主としての地位を確立した。御料所(足利将軍領)額田郡の政所職と深い関係があったとも推定されている。永享11年(1439)に万松寺を創建し、宝徳３年(1451)に信光明寺を建立、さらに、寛正２年(1461)に岩津に妙心寺を開創した。

図1-6-6　松平信光像

蓮如（れんにょ）
応永 22 年(1415)～明応8年(1499)

本願寺中興の祖と呼ばれる。本願寺７世存如の長男で、長禄元年(1457)に本願寺８世を継職して以降、精力的な教線拡大を行う中、三河布教により三河真宗の中心だった五か寺のうち、上宮寺、勝鬘寺、本證寺を本願寺派に組み入れ、他の三河教団も分裂させて大部分を本願寺派にしていった。近江、北陸、近畿・中国も組織化し、今日の東西本願寺派の基礎を築いた。地方教団の中心寺院を本願寺派に引き入れた初の成功例が三河であった。

図1-6-7　蓮如像

松平親忠（まつだいら　ちかただ）
永享3年(1431)～文亀元年(1501)

松平八代の４代目。文明初年までに鴨田郷に分立していたらしいが、安城城を譲られ移転し安城松平家初代となった。文明２年(1470)松平の氏神として社を三重県の伊賀より移し伊賀八幡宮を建立し、文明７年(1475)に鴨田の旧館址に勢誉愚底を開山として菩提寺大樹寺を創建した。

松平長親（まつだいら　ながちか）
文明5年(1473)～天文 13 年(1544)

松平八代の５代目(安城松平家の２代目)。永正３年(1506)今川氏の三河侵入の時、安城城より出撃し矢作川を越えて井田野で今川軍と対戦し、激戦の末これを退去させた。このあと同６年(1509)まで続いた永正大乱の過程で、松平氏惣領の岩津家が滅び、安城家が惣領となったと思われる。

松平信忠（まつだいら　のぶただ）
文明 18 年(1486)～享禄4年(1531)

松平八代の６代目(安城松平家の３代目)。従来安城家の支配圏外であった大浜(碧南市)・坂崎(幸田町)・滝・岩津の寺院に禁制や寄進状を出していることから、信忠は安城家の勢力を大きく伸ばしたと推定される。これは永正３年(1506)三河に侵攻した駿河の今川氏との戦いによって惣領の岩津松平家や長沢松平家が衰退し、代わって安城家が惣領となったためと推察される。

図1-6-8　松平信忠像

松平清康（まつだいら　きよやす）
永正8年(1511)～天文4年(1535)

松平八代の７代目(安城松平家の４代目)。大永４年(1524)岡崎松平家の山中城を攻め落とし、岡崎家３代信貞の婿となり岡崎城に移転した。松平一門の結束を成し遂げた清康は、以後三河統一の戦いを始めた。龍頭山への城移転と城下町形成、大樹寺修造と勅願寺化、岡崎五人衆－代官－小代官体制の形成、源姓世良田氏呼称等も一連の政策であった。また岡崎入城後、六所神社を加茂郡六所山から岡崎に勧請し、享禄３年(1530)龍海院を創建した。

図1-6-9　松平清康像

松平広忠（まつだいら　ひろただ）
大永6年(1526)～天文 18 年(1549)

松平八代の８代目。徳川家康公の父。父の清康が亡くなった際わずか 10 歳という若さのため、今川氏に従属せざるを得ず、織田氏らが岡崎に攻め入る際、自力で対抗できなかったため家康公(竹千代)を人質に出して今川氏の加勢を求めた。

徳川家康（とくがわ　いえやす）
天文 11 年(1542)～元和2年(1616)

江戸幕府初代将軍。岡崎城内で誕生。幼名竹千代。初名元信・元康、永禄６年(1563)７月頃家康と改名。幼少期を人質として尾張・駿府にて過ごし、桶狭間の戦いで今川義元が敗れると岡崎城に入る。その後三河統一、天下統一を果たし、慶長８年(1603)に江戸幕府を開設した。以後 265 年間平和が続く世界でも稀な泰平の世を築き、独自の日本文化が花開いた。江戸を居城とする際に多数の三河武士とその家族が関東に移り住み、譜代大名やその上級家臣、旗本等の中核を形成した。遺言に従って遺骸は駿河久能山に一旦埋葬され、江戸増上寺で葬儀が行われ、大樹寺に位牌が納められた。

図1-6-10　徳川家康像

酒井忠次（さかい　ただつぐ）
大永7年(1527)～慶長元年(1596)

家康公の家臣。徳川四天王の一人。天文 18 年(1549)に家康公(竹千代)が駿府に人質として送られる際付き従う。弘治２年(1556)加茂郡宇機賀井(福谷)城で織田氏と戦ったのを始めとし家康公の武将として歴戦した。永禄８年(1565)吉田の城主となり、三備(東三河衆、西三河衆、直轄の旗本)の軍制では東三河諸士の旗頭になった。

図1-6-11　酒井忠次像

本多忠勝（ほんだ　ただかつ）
天文 17 年(1548)～慶長 15 年(1610)

家康公の家臣。徳川四天王の一人。永禄６年(1563)の三河一向一揆の際は改宗して家康公に従い、同９年(1566)家康公より騎馬の士 50 余人を附属され先手役の武将とされた。その後武田勢と戦い、小牧・長久手の戦いにも参加した。徳川四天王随一の勇将として知られ、57 回出陣して一度も負傷したことがなかったと伝わる。

図1-6-12　本多忠勝像

榊原康政（さかきばら　やすまさ）
天文 17 年(1548)～慶長 11 年(1606)

家康公の家臣。徳川四天王の一人。永禄６年(1563)に元服し、家康公の一字を賜り康政と称した。翌年吉田城攻めの先手となり、それ以後、旗本先手役の武将として戦功をあげ、武略と剛勇をもって家康公の四天王の一人に数えられた。とりわけ長久手の戦いでは、秀吉方の先陣三好秀次の軍を破り名を挙げた。２代将軍秀忠の後見人となった。

図1-6-13　榊原康政像

井伊直政（いい　なおまさ）
永禄4年(1561)～慶長7年(1602)

家康公の家臣。徳川四天王の一人。直政の部隊の軍装は赤で統一していたため、「井伊の赤備え」と呼ばれ、戦国屈指の精鋭部隊として恐れられた。関ヶ原の戦い後は江戸幕府の組織づくりなど政治と外交に手腕を発揮し、家康公は文武両面で厚く信頼していたといわれる。

図1-6-14　井伊直政像

徳川信康（とくがわ　のぶやす）
永禄2年(1559)～天正7年(1579)

家康公の長男として生まれる。母は関口親永の娘で今川義元の姪の築山殿である。家康公が元亀元年(1570)、浜松城に居城を移すと岡崎城主となった。天正３年(1575)の長篠の戦いでは徳川軍の先手の大将として参加した。天正７年(1579)、織田信長から武田氏に内通したとの嫌疑をかけられ、家康公の命により遠江二俣城で切腹をした。

図1-6-15　徳川信康像

徳川家光（とくがわ　いえみつ）
慶長9年(1604)～慶安4年(1651)

江戸幕府３代将軍。２代将軍秀忠の次男として生まれる。母は浅井長政の娘で織田信長の姪の江である。乳母は春日局。東照大権現として祀られた祖父の家康公を尊崇し、家光は日光社参を生涯のうちに 10 回行っている。寛永 13(1636)年、家康公鎮座 20 年である 21 年神忌に向けた日光東照宮の社殿の大造営に着手する。現在、見ることができる社殿群のほとんが、この時の造営によるものである。また、家光は岡崎市内の大樹寺を寛永 13 年(1636)から大造営し、また同年に六所神社、伊賀八幡宮を改築している。

図1-6-16　徳川家光像

稲富直家（いなとみ　なおいえ）
生没年不詳

戦国時代から江戸時代初期にかけての武将、砲術家。江戸初期に、稲富流砲術から稲留流という三河花火の一流派を開き、主として西三河に広がった。これは、兵法の稲富流砲術が、島原の乱以後、人々の娯楽に転用され、花火が五穀豊穣の祈願と豊作の喜びをこめて神社の祭礼に献上されたためである。幕末から明治にかけて三河地方に生まれた花火の各流派は、稲留流から派生したものが多い。砲術にある「流星」と稲留流打上げ花火「流星」と構造がよく似ている。

田中吉政（たなか　よしまさ）
天文 17 年(1548)～慶長 14 年(1609)

安土桃山時代の武将、岡崎城主。徳川家康公の関東移封後、豊臣家臣田中吉政が岡崎城主となり、近世の大城郭の基礎を築いた。岡崎城の造営、城下町建設、兵農・商農分離、矢作川築堤、太閤検地の実施、寺社領改め等の政策を実施した。関ヶ原の戦いでは東軍徳川方につき、石田三成を捕縛した。

図1-6-17　田中吉政像

本多康重（ほんだ　やすしげ）
天文 23 年(1554) ～ 慶長 16 年(1611)

本多豊後守広孝の長男として碧海郡土井郷で生まれる。永禄５年(1562)に家康公により諱字を与えられ、康重と称した。天正５年(1577)家督を相続。遠江高天神の戦い、小牧・長久手の戦い等で戦功を立て、天正 18 年(1590)に家康公が関東移封された際には上野国白井２万石を拝領。文禄元年(1592)家康公名護屋出陣の際は関東の留守役を務めた。同４年(1595)に従五位下、豊後守叙任。慶長５年(1600)関ヶ原の戦いに参陣、翌年(1601)２月に３万石の加増を受けて岡崎に転封。

図1-6-18　本多康重像

本多康紀（ほんだ　やすのり）
天正7年(1579) ～ 元和9年(1623)

本多康重の長男として田原で生まれる。天正19年(1591)家康公より諱字を与えられ、康紀と称した。慶長６年(1601)に従五位下、伊勢守叙任。同 16 年(1611)家督を相続し、のち豊後守に改める。同 19 年(1614)、大坂冬の陣では備前島に出陣し功をあげ、講和後も大坂城に留まって城門を警備するとともに惣堀を埋めた。元和元年(1615)、大坂夏の陣では大手千貫櫓で大野主馬助治房の軍と戦い武功をおさめた。同３年(1617)岡崎城天守を再建。

図1-6-19　本多康紀像

本多忠利（ほんだ　ただとし）
慶長5年(1600) ～ 正保2年(1645)

本多康紀の長男として生まれる。慶長 18 年(1613)に将軍秀忠の諱字を与えられ忠利と改め、伊勢守と称した。元和元年(1615)、大坂夏の陣に初陣して功名をあげる。同９年(1623)11 月に家督を相続する。寛永元年(1624)、家中向けに 32 か条の条目を出す。同 11 年(1634)、３代将軍家光上洛の途次岡崎城にて饗応し、帰途に５千石の加増を受ける。

図1-6-20　本多忠利像

水野忠善（みずの　ただよし）
慶長17年(1612)～ 延宝4年(1676)

水野忠元の長男として江戸藩邸で生まれる。元和６年(1620)、家督を継ぎ下総国山川藩３万５千石を領有したが、幼少のために井上正就が後見人となった。寛永７年(1630)に従五位下監物に叙任。同 12 年(1635)駿河国田中藩４万５千石に加増転封、同 19 年(1642)三河国吉田藩に転封となった。正保２年(1645)、岡崎藩５万石に入封となり、滝山東照宮に石鳥居・石灯籠を献じた。寛文４年(1664)、弟忠久に碧海郡の新墾田５千石を分け与える。同５年(1665)、家中・領内に宗門改めの条目を出す。同９年(1669)、歩当番所普請。同 10 年(1670)、武断派の忠善と文治派の長男忠春の対立から忠春を１万石の捨扶持を与えて廃嫡とする。

図1-6-21　水野忠善像

松尾芭蕉（まつお　ばしょう）
寛永 21 年(1644)～元禄7年(1694)

江戸時代前期の俳諧師。旅を繰り返し、『おくのほそ道』など、多くの俳句・紀行文を残した。当時、藤川宿一帯では紫色に染まる麦が作られていたことから、「爰も三河　むらさき麦の　かきつはた」句が詠まれ、藤川宿の西端にある十王堂の境内には松尾芭蕉の句碑がある。

水野忠之（みずの　ただゆき）
寛文9年(1669)～享保 16 年(1731)

水野忠春の４男として生まれる。元禄12年(1699)、実兄の岡崎藩主水野忠盈の養子となり、忠盈の没後に家督相続して岡崎藩主水野家４代となる。享保２年(1717)に老中となり将軍徳川吉宗の「享保の改革」を支え、同７年(1722)、財政責任者としての功により１万石を加増されたが、米価急落や負担増による世の不評をかった。同 15 年(1730)、老中職を辞して次男の忠輝に家督を譲って隠居した。

大岡忠相（おおおか　ただすけ）
延宝5年(1677)～宝暦元年(1751)

西大平藩初代藩主。享保２年(1717)に江戸町奉行に昇任し越前守に改めた。優れた実務官僚として江戸町奉行を 19 年間務め、８代将軍吉宗の信任が特に厚かった。寛延元年（1748）寺社奉行兼奏者番となった際に官俸にかえて三河国額田郡２か村等を拝領し正式に１万石となり、額田郡西大平村に陣屋を設置して西大平藩が成立した。初代藩主となった時の忠相は 72 歳で定府大名であった。

松平康福（まつだいら　やすよし）
享保4年(1719)～寛政元年(1789)

石見国浜田藩主松平康豊の長男として生まれる。元文元年(1736)家督を継ぎ、従五位下周防守に叙任。寛延２年(1749)奏者番就任、宝暦９年(1759)には寺社奉行を兼務。 同９年(1759)下総国古河藩に転封した。同 10 年(1760)大坂城代となり、従四位下に昇位。同 12 年(1762)岡崎に転封。同年(1762)西の丸老中に昇進して、侍従に任ぜられる。同 13 年(1763)本丸の老中職も兼務。明和元年(1764)正式に本丸老中に就任。同６年(1769)旧領浜田へ転封。天明８年(1788)老中職を辞す。

玄々斎精中（げんげんさいせいちゅう）
文化7年(1810)～明治 10 年(1877)

三河国奥殿藩４代藩主松平乗友の５男として生まれる。文政２年(1819)10 歳の時、裏千家 10 代認得斎宗室家の養子縁組が組まれてその長女と結婚し、文政９年(1826)17 歳の時、認得斎が亡くなり、裏千家 11 代家元を継承した。幕末から明治にかけての日本文化疲弊の時期に、茶道を通じて日本文化の復興に尽力し数多くの功績を残した。明治５年(1872)、京都博覧会に際し、明治維新後の外国文化の流入に合わせて、椅子を用いた立礼式の点前を考案することで、伝統を重んじる日本文化の開放性と適応性を内外にアピールし、茶の湯の近代化を図った。

図1-6-22　玄々斎精中像

松平乗謨（まつだいら　のりかた）・大給恒（おぎゅう　ゆずる）
天保 10 年(1839)～明治 43 年(1910)

奥殿藩８代・田野口藩初代・龍岡藩初代の藩主。明治２年(1869)に大給恒と改名。幼い頃より才覚を現し、外国にも関心が高く、特にフランス語が堪能。最後の奥殿藩主として領民からも慕われた。文久３年(1863)に奥殿から田野口(長野県佐久市)へ藩の役所を移す。その後の慶長３年(1867)に、フランスの建築様式を取り入れた龍岡城五稜郭を建設した。函館五稜郭と共に星形の稜堡式城郭として貴重である。明治 10 年(1877)西郷隆盛が九州で政府軍との戦いを始めると、敵味方区別なく傷ついた人を助けたいと博愛社を創立。その後、博愛社は日本赤十字社と名前を変え、今も世界の人々の平和と幸福のために活動を続けている。

図1-6-23　松平乗謨

臥雲辰致（がうん　ときむね･たっち）
天保 13 年(1842)～明治 33 年(1900)

綿糸紡績機として有名なガラ紡の発明者。幼少から足袋底織を手伝ううちに労を省くための機械のことを考え出し、明治６年(1873)足袋底に用いる太糸用のガラ紡機械を完成し、さらに同９年(1876)細糸用に改良し松本開産社内に連綿社を設立して製造を開始した。同 10 年(1877)の第１回内国勧業博覧会に出品して最高の鳳紋賞牌を受賞したことによりガラ紡はその後各地に広まった。額田紡績組合は、明治21年(1888)に臥致を招き技術指導を受け、滝村や矢作古川を中心に発展した。大正 10 年(1921)三河紡績組合は、臥雲の功績に感謝し、市公会堂北庭に記念碑を建立した。

図1-6-24　臥雲辰致

本多忠直（ほんだ　ただなお）
天保 15 年(1844)～明治 13 年(1880)

信濃国小諸藩の牧野遠江守康哉の次男として生まれる。慶応３年(1867)10 月、本多忠民の娘、久を妻として婿養子に入り、翌月、平八郎忠直と改名。慶応４年(1868)、藩主忠民の代行として上京参内し、朝廷側恭順の誓約書に名を連ねる。明治２年(1869) ２月、忠民隠居に伴い家督を継ぎ岡崎藩主となり、６月、版籍奉還により岡崎藩知事となる。同年(1869)藩校允文館、允武館建設。明治４年(1871)廃藩置県により藩知事を罷免され、東京本郷の森川邸に移る。明治５年(1872)～11 年(1878)、ヨーロッパに留学。

図1-6-25　本多忠直像

志賀重昂（しが　しげたか）
文久3年(1863)～昭和2年(1927)

地理学者。明治時代中期にベストセラーとなった『日本風景論』(明治 27 年(1894))は、我が国で初めてといわれる科学的解説を試みたもので、当時の日本人に新しい風景観をもたらした。日本人が「風景」という言葉を得たのは、この『日本風景論』によるともいわれている。岡崎市民にとっては「三河男児の歌」が最も親しみ深い。木曽川の「日本ライン」の名付け親でもある。

図1-6-26　志賀重昂

1-7.文化財

(1)文化財の指定等の状況　(令和5年(2023)2月末現在)

本市は、地方の一都市としては稀な歴史的建造物に恵まれた土地で、歴史や文化の層の厚さを感じさせる。政権の置かれなかった地方の一都市において中世の建築遺構が残ることの少ない中で、本市には中世の建造物で国の文化財に指定されているものが８件８棟もあり、近世初期の建造物で国指定文化財になっているものは４件 15 棟に及んでいる。

また、市内には国指定文化財が、有形文化財 26 件、史跡３件、天然記念物１件の計 30 件所在している。

県指定文化財は、有形文化財 34 件、有形民俗文化財２件、無形民俗文化財２件、史跡３件、天然記念物６件の計 47 件所在している。

市指定文化財は、有形文化財 187 件、有形民俗文化財７件、無形民俗文化財６件、史跡 24 件、天然記念物 27 件の計 251 件所在している。

その他、国登録有形文化財(建造物)20 件が所在している。

表1-7-1　岡崎市の指定文化財等の件数　(件)

区分	有形文化財							有形民俗文化財	無形民俗文化財	史跡	天然記念物	合計
種類	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡典籍古文書	考古資料	歴史資料					
国指定	13	6	3	3	1	0	0	0	0	3	1	30
県指定	2	8	10	11	1	2	0	2	2	3	6	47
市指定	16	57	47	40	21	2	4	7	6	24	27	251
合計	31	71	60	54	23	4	4	9	8	30	34	328
国登録	20	0	0	0	0	0	0	0	-	0	0	20

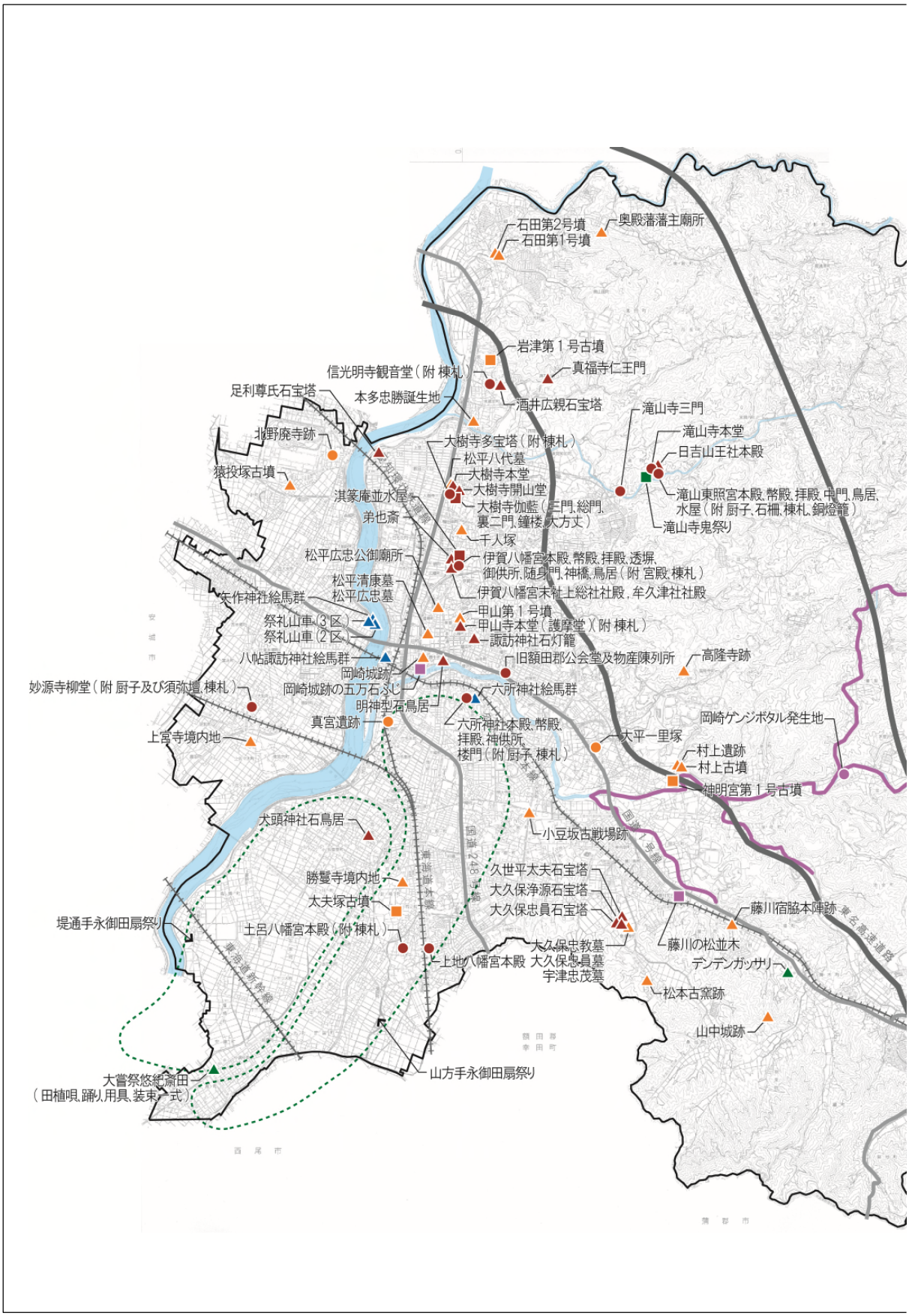
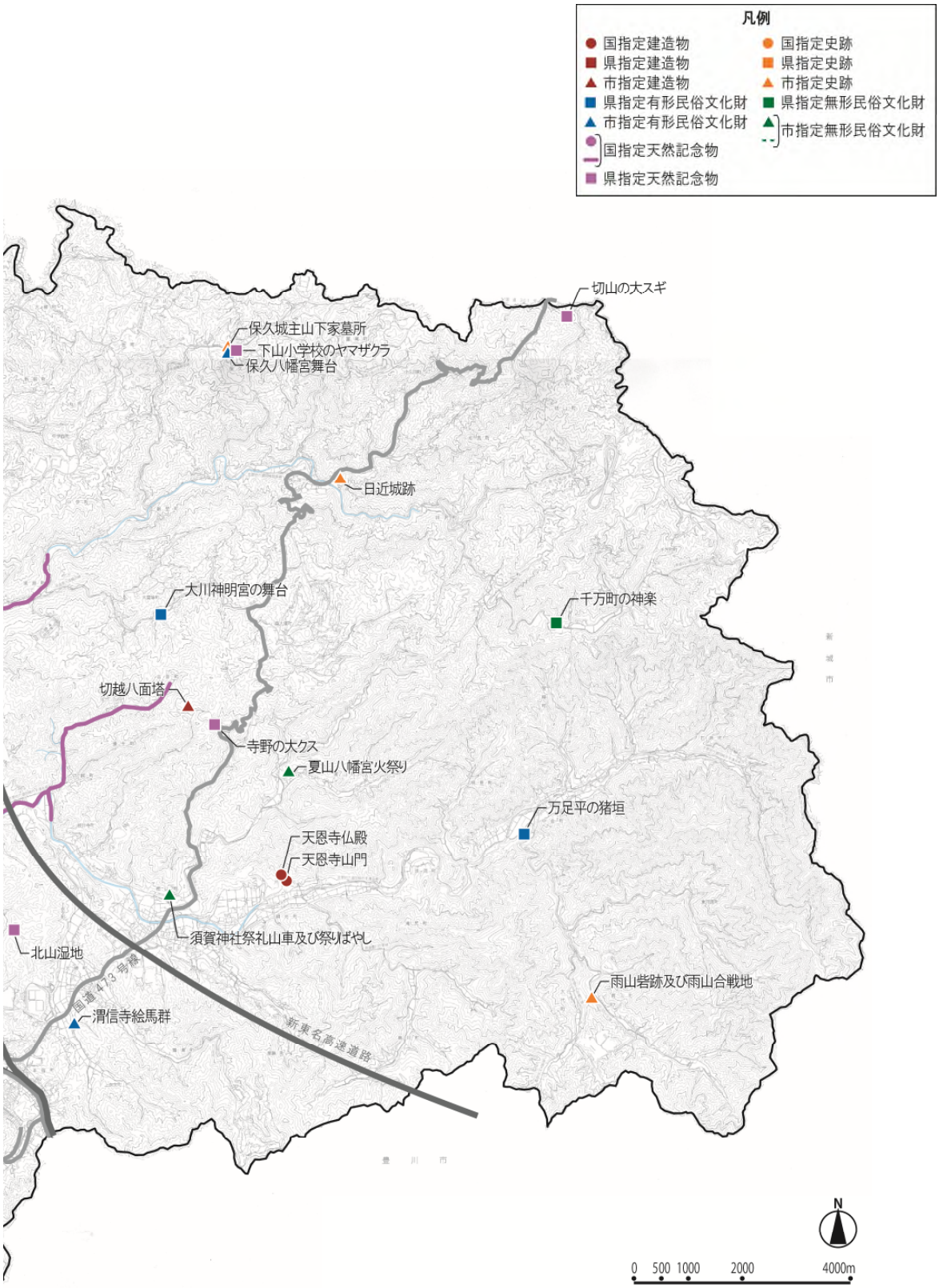


図1-7-1　国・県・市指定文化財の分布（国・県・市指定の建造物、史跡、有形・無形民俗文化財等を掲載）


凡例
国指定建造物
県指定建造物
市指定建造物
県指定有形民俗文化財
市指定有形民俗文化財
国指定天然記念物
県指定天然記念物
国指定史跡
県指定史跡
市指定史跡
県指定無形民俗文化財
市指定無形民俗文化財
切山の大スギ
保久城主山下家墓所
下山小学校のヤマザクラ
保久八幡宮舞台
日近城跡
大川神明宮の舞台
千万町の神楽
切越八面塔
寺野の大クス
夏山八幡宮火祭り
万足平の猪垣
天恩寺仏殿
天恩寺山門
須賀神社祭礼山車及び祭りばやし
北山湿地
国道473号線
渭信寺絵馬群
新東名高速道路
雨山砦跡及び雨山合戦地
N
0 500 1000 2000 4000m

(2)歴史上価値の高い建造物

①国指定等

ア.滝山寺三門　(建築年代:室町前期)

三間一戸、入母屋造、こけら葺の楼門で、下層中央の柱間を通路とするが扉は設けず、その両側後方に仁王像を安置している。寺伝では、権飛騨守藤原光延により、文永４年(1267)に建立とされているが、様式的には鎌倉時代末期から室町時代前期の建築と考えられる。

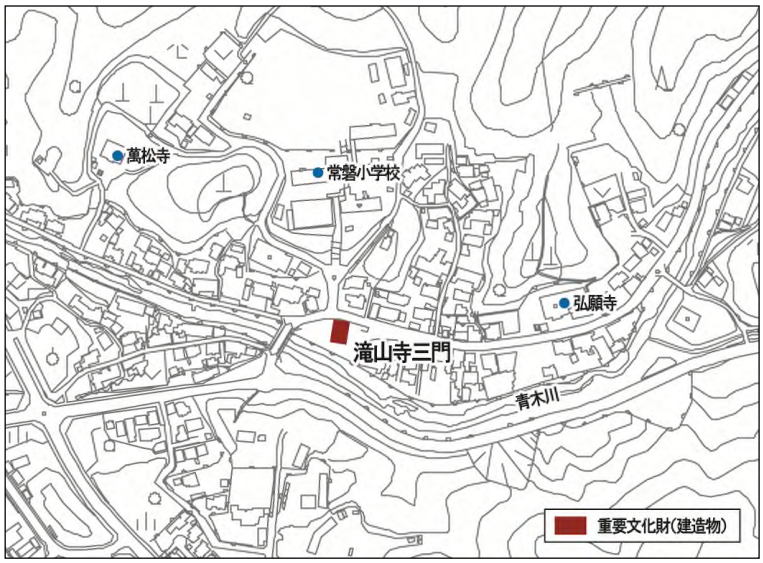


図1-7-2　滝山寺三門

図1-7-3　滝山寺三門の位置

イ.妙源寺柳堂　(建築年代:正和3年(1314))

桁行三間、梁間三間、寄棟造で、屋根を檜皮葺とし、前面に一間の向拝を付けている。棟札には正和３年(1314)の再建とある。妙源寺は安藤氏が河内の国より三河桑子に移住した時、聖徳太子像を安置するために建てられたもので、堂の前に柳の大木があったことから柳堂の名で呼ばれるようになった。

図1-7-4　妙源寺柳堂

図1-7-5　妙源寺柳堂の位置

ウ.信光明寺観音堂　(建築年代：文明10年(1478))

信光明寺は、宝徳３年(1451)岩津城主の松平３代信光が父親の菩提を弔うため創建された。方三間、入母屋造、こけら葺で、浄土宗寺院であるが、禅宗様の仏堂である。斗栱は詰組といって柱上以外にも密に組まれ、軒は二重の繁垂木で、それが禅宗様独特の扇形をなし見応えがある。

図1-7-6　信光明寺観音堂

図1-7-7　信光明寺観音堂の位置

エ.大樹寺多宝塔　(建築年代：天文4年(1535))

大樹寺は、浄土宗鎮西派に属し、松平４代親忠により文明７年(1475)に創建されたと伝えられる。多宝塔は、心柱の記年銘から天文４年(1535)の立柱であることがわかっており、家康公の祖父松平清康が建立し、大樹寺では最も古い建物である。一層が方形、二層が円筒形をした室町末期の様式をたたえる美しい二重の塔で、方三間、屋根は宝形造。本来はこけら葺だったが、現在は檜皮葺となっている。

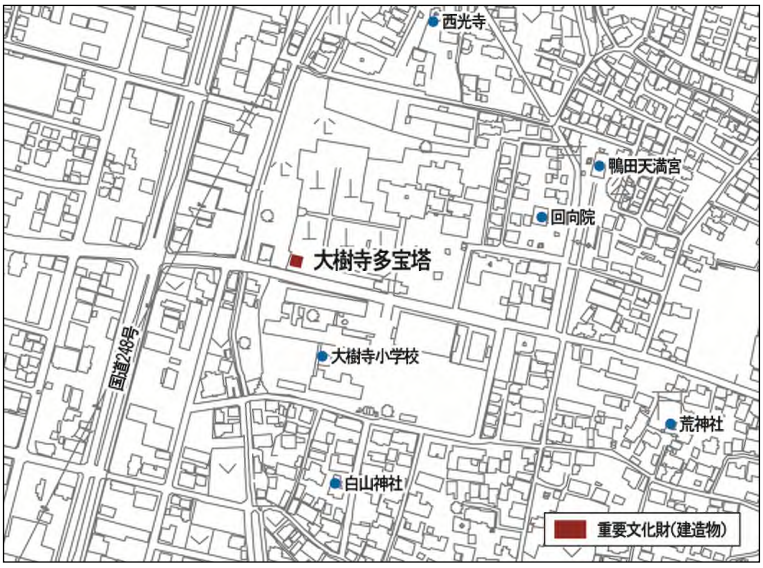


図1-7-8　大樹寺多宝塔

図1-7-9　大樹寺多宝塔の位置

オ.滝山寺本堂　(建築年代:室町前期)

桁行五間、梁間五間の寄棟造で、屋根は檜皮葺、内陣には禅宗様の大型厨子を置き、本尊を安置している。様式的には南北朝頃の建築と考えられる。滝山寺は寺伝によれば、朱鳥元年(686)に役小角が創建し、保安年間(1120～23)に仏泉上人により中興されたと伝えられている。

中世から時々の権力者の庇護を受け、源氏・足利氏との関係が深い。本堂の規模は岡崎市内でも最大である。

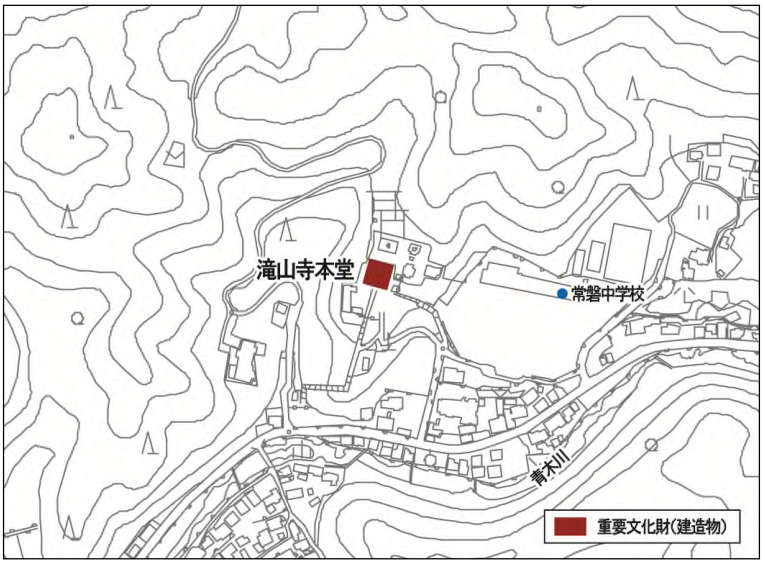


図1-7-10　滝山寺本堂

図1-7-11　滝山寺本堂の位置

カ.天恩寺仏殿　(建築年代:室町前期)

天恩寺は、寺伝によると、貞和元年(1345)足利尊氏の遺言により足利義満が建立したとされ、延命地蔵菩薩を本尊としている。仏殿は、桁行三間、梁間三間、入母屋造で、屋根は檜皮葺である。内部は土間とし、中央後方に来迎柱を立て、禅宗様の須弥檀を置いている。南北朝期の禅宗様建築をよく伝えている。

図1-7-12　天恩寺仏殿

図1-7-13　天恩寺仏殿の位置

キ.天恩寺山門 (建築年代:室町後期)

南向きに建てられた一間の薬医門であり、屋根は切妻造でこけら葺である。現存する薬医門としては最古級のものと考えられている。平成20年(2008)8月には屋根葺替えの保存修理工事が実施され、往時の姿を取り戻している。

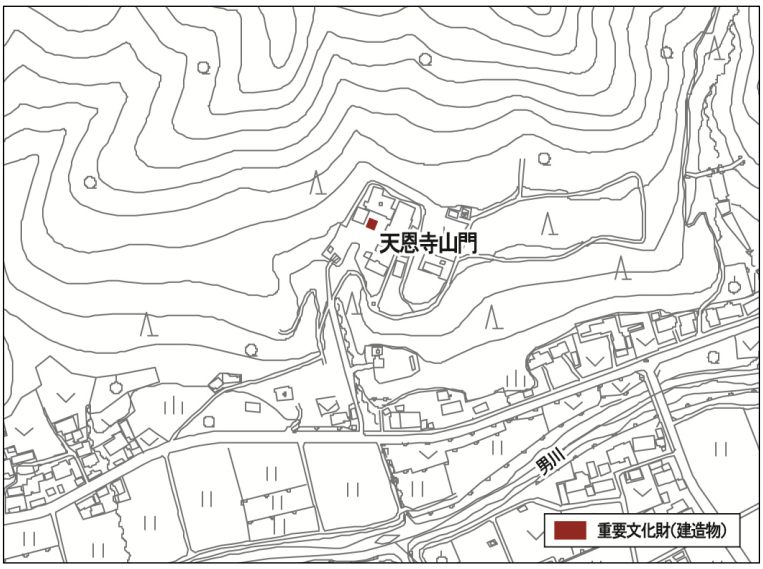


図1-7-14　天恩寺山門

図1-7-15　天恩寺山門の位置

ク.八幡宮本殿(上地) (建築年代:室町後期)

上地八幡宮は、社伝によれば、建久元年(1190)に源範頼が創建したと伝えられている。本殿は三間社流造、檜皮葺で、土呂八幡宮本殿と平面形式や意匠に多くの共通点がみられる。この地域の室町時代後期の特徴を示す貴重な建築物である。

図1-7-16　上地八幡宮本殿

図1-7-17　上地八幡宮本殿の位置

ケ.八幡宮本殿(土呂)　(建築年代:元和5年(1619))

土呂八幡宮は、社伝によれば、永禄７年(1564)３月、三河一向一揆の兵火により社殿が焼失したことから、後に徳川家康公が家臣の石川数正に再興させたものと伝えられている。本殿は三間社流造で、屋根は檜皮葺、江戸時代初期の建築であるが、木鼻等の意匠にこの地方の室町時代後期の伝統が残されている。

図1-7-18　土呂八幡宮本殿

図1-7-19　土呂八幡宮本殿の位置

コ.伊賀八幡宮本殿、幣殿、拝殿、透塀、御供所、随身門、神橋、鳥居　(建築年代:寛永 13 年(1636))

伊賀八幡宮は、社伝によれば、文明２年(1470)松平４代親忠が松平の氏神として、社を三重県の伊賀より勧請したことに始まると伝えられている。社殿は、本殿、幣殿、拝殿が連結した権現造で、寛永 13 年(1636)３代将軍家光により、現在の社殿に整えられた。家康公も大きな戦の前には必ず必勝祈願に訪れたとされ、東照大権現として合祀されている。平成 18～20 年(2006～2008)度にかけて、40 年ぶりに屋根の葺替えを中心とした保存修理工事が実施された。

図1-7-20　伊賀八幡宮拝殿

図1-7-21　伊賀八幡宮本殿等の位置

サ.六所神社本殿、幣殿、拝殿、神供所、楼門 (建築年代：本殿は寛永 13 年(1636))

六所(ろくしょ)神社は、岡崎に進出した松平氏によって勧請・信仰され、徳川家康公の産土神(うぶすながみ)となった。現在の社殿は、３代将軍家光の命により、寛永 13 年(1636)に再建された。本殿、幣殿、拝殿が連結した権現造で、華麗な彫刻、彩色が施されている。

図1-7-24　六所神社本殿等の位置

図1-7-22　六所神社拝殿

図1-7-23　六所神社楼門

シ.滝山東照宮本殿、幣殿、拝殿、中門、鳥居、水屋 (建築年代：正保3年(1646))

３代将軍家光の造営で、日光、久能山とともに三宮(さんぐう)と称せられた。滝山寺本堂の東、やや小高い敷地に南向きに建っている。拝殿と幣殿は連結し、中門(ちゅうもん)の奥に本殿がある。入母屋造で銅瓦葺(どうがわらぶき)、中門は一間(いっけん)一戸の小さな平唐門(ひらからもん)となっている。東照宮としての絢爛豪華な極彩色が施され、江戸初期の様式がよく表現されている。

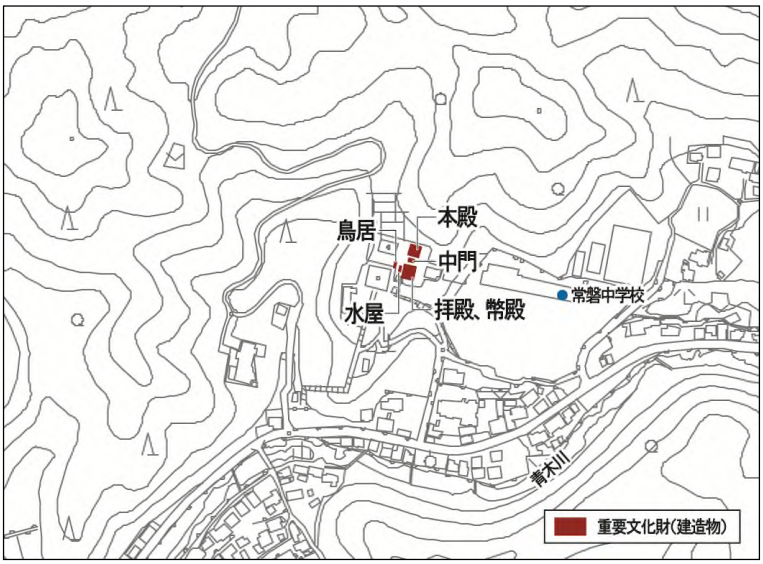


図1-7-25　滝山東照宮拝殿

図1-7-26　滝山東照宮本殿等の位置

ス.旧額田郡公会堂及物産陳列所　(建築年代：大正2年(1913))

２棟共に木造平屋建、桟瓦葺（さんかわらぶき）の建築物である。地元の職人たちが伝統的な職人技を基本としながらも、新しい西洋建築の様式を取り入れ、それを見事に修得していることを示すのがこの建築物の大きな特徴である。

旧額田郡公会堂は、大正２年(1913)８月の竣工で、同５年(1916)に岡崎市公会堂となり、昭和 44 年(1969)から平成 22 年(2010)まで岡崎市郷土館として利用されていた。

旧額田郡公会堂の東南側に隣接して建っているのが額田郡物産陳列所として使われていた建物である。大正２年(1913)額田郡公会堂の北側に建てられたが、昭和 36 年(1961)勤労会館(現せきれいホール)の建設に伴い現在の位置へ移転し、岡崎市郷土館の収蔵庫棟として利用されていた。公会堂と同様、西洋建築の意匠が随所に取り入れられている。初期の郡単位の公会堂と物産陳列所が揃って残されている点で貴重である。

市内の近代建築物として初めて国の重要文化財に指定された。

図1-7-29　旧額田郡公会堂及物産陳列所の位置

図1-7-27　旧額田郡公会堂

図1-7-28　旧額田郡物産陳列所

②県指定

ア.大樹寺伽藍（三門、総門、裏二門、鐘楼、大方丈） (建築年代：三門は寛永 18 年(1641))

大樹寺は浄土宗鎮西派に属し、松平４代の親忠により文明７年(1475)に創建されたと伝えられている。三門、総門、裏二門、鐘楼、大方丈の建築物が伽藍として指定されている。三門は３代将軍家光が建立し、境内から三門、総門を通して岡崎城が見えるように伽藍配置の工夫がされている。

図1-7-30　大樹寺三門

イ.淇園庵並水屋 (建築年代：正保年間(1645～1648)、宗徧茶室)

淇園庵は、吉田城小笠原忠知の依頼により、茶道宗徧流の流祖である山田宗徧が千宗旦の今日庵を写し建築したと伝えられている。茶室は、切妻造の平家建、桟瓦葺で、こけら葺の庇を付けている。宗徧好みの茶室として現存する唯一の建築物といわれている。

図1-7-31　淇園庵並水屋

③市指定

ア.真福寺仁王門 (建築年代：明応3年(1494)再建)

寺伝によれば、真福寺は推古２年(594)に創建されたと伝えられ、山岳仏教時代の名残をとどめる天台宗の名刹である。仁王門の創立時期は不明だが、応永 17 年(1410)の焼失後、明応３年(1494)に再建されたものと考えられる。

図1-7-32　真福寺仁王門

イ.諏訪神社石燈籠 (建築年代：天正 16 年(1588))

総高 185.0 センチメートル、花崗岩製で八角形。灯籠には普通、宝珠と受花があるが、この灯籠には受花ではなく露盤が造られている。露盤の軒には松長押の装飾がされており、一辺ずつの模様を交互に変えている。細部に独創が満ちた灯籠といえる。同燈籠群の中には、市内で最古の在銘(永禄３年(1560))燈籠がある。

図1-7-33　諏訪神社石燈籠

ウ.弟也斎（ていやさい）　(建築年代：天保の頃(1831～1845)、龍渓茶室)

淇菉庵と同様に主屋になっている四畳半と二畳の茶室からなる弟也斎は、江戸から岡崎に来て定住した宗偏流を**継ぐ茶人龍渓が、天保の頃に建てたものといわれている。**龍渓は江戸における宗偏流継承の第一人者とされ、各地を**歴訪の後、岡崎に定住し、この地で没した。**

図1-7-34　弟也斎

エ.明神型石鳥居　(建築年代：寛永 15 年(1638))

岡崎城主・本多忠利が菅生神社本殿を修復した際に奉納した。高さ 271.0 センチメートル、柱間 181.5 センチメートル、花崗岩製で明神型。笠木は一本通し、柱の表面が火災により一部剥離しているものの、左右どちらの柱の銘文も明確に読み取れる。

図1-7-35　明神型石鳥居

オ.甲山寺本堂(護摩堂)　(建築年代：元禄 15 年(1702)～元禄 16 年(1703)再建)

甲山寺は、享禄３年(1530)に松平清康が安城より薬師堂とその六坊を岡崎城鬼門の守護として移した。本堂は桁行五間、梁間五間、桟瓦葺の禅宗様式で、創建は、天文 13 年(1544)に松平広忠が和田村法性寺の六坊を移転、護摩堂を建てたことによる。慶長８年(1603)徳川家康公が本堂を再建、さらに元禄 15 年(1702)に５代将軍綱吉が再建している。

図1-7-36　甲山寺本堂

カ.日吉山王社本殿　(建築年代：慶長 13 年(1608)(推定)、正保2年(1645)修築(推定))

日吉山王社は 12 世紀前半に滝山寺の鎮守として勧請された。滝山寺本堂の北側に鎮座しており、全国的にも数少ない七間（しちけん）**社流造の建築物である。内陣の造りが、七間社以上の流造にみられる連結社殿ではなく、身舎**（もや）**を横長一室の内陣としている点が注目され、桟瓦葺(元檜皮葺)の江戸時代初期の建築物である。**

図1-7-37　日吉山王社本殿

キ.大樹寺本堂　(建築年代:安政4年(1857)再建)

桁行七間、梁間七間、入母屋造、本瓦葺。大樹寺の伽藍は３代将軍家光によって整えられたが、安政２年(1855)に三門、総門、裏門、鐘楼、開山堂を除いて焼失した。本堂は、やや規模を縮小して安政４年(1857)に再建された。近世の浄土宗本堂では、外陣については方丈のように三区分するもの、間仕切りのない横長一室のもの、さらには凹型のものがあるが、この本堂はいずれの形式の要素も取り入れられている点が注目される。

図1-7-38　大樹寺本堂

ク.大樹寺開山堂　(建築年代:江戸前期)

桁行三間、梁間三間、宝形造、桟瓦葺。内部のひとつの空間とし、背面に半間幅の箱仏壇を設けている。天井は格天井で、床は畳敷。屋根頂には露盤、宝珠を上げている。建立年は不明であるが、木鼻等の絵様や彫刻などから、江戸時代前半頃の建立と考えられる。

図1-7-39　大樹寺開山堂

ケ.伊賀八幡宮末社上総社(かずさしゃ)社殿、牟久津(むくつしゃ)社社殿　(建築年代:寛永 13 年(1636) (推定))

上総社は拝殿に向かって右側(東)に位置し正面を西に向け、牟久津社は上総社の反対側に位置している。両社殿とも木造一間社流造、檜皮葺で大きさも同じである。寛政２年(1790)に制作された古絵図にも記載があることや、両社殿の木鼻・虹梁の絵様が随身門・拝殿のものと近似していることから、３代将軍家光が社殿・境内の大造営を行った寛永 13 年(1636)に建立された可能性が高いと考えられる。

図1-7-40　伊賀八幡宮末社上総社社殿、牟久津社社殿

④国登録

ア.八丁味噌本社事務所、蔵（史料館）　(建築年代：事務所は昭和2年(1927)、蔵(史料館)は明治 40 年(1907))

江戸時代初期より豆味噌を作り続ける老舗のひとつが「カクキュー」を屋号とする早川家の八丁味噌である。

本社事務所は、昭和２年(1927)に建築された木造の建物で、伝統的建築である多くの蔵の建物群に囲まれて洋館のような意匠を持つ建築物として異彩を放っている。南北に２棟並び、ともに２階建で、バシリカ式教会堂のように中央部を一段高くし、頂部に棟飾りをつけている。

図1-7-41　八丁味噌本社事務所

イ.本光寺本堂、山門　(建築年代：本堂は大正2年(1913)、山門は文政 10 年(1827))

本堂は、寺伝によると、平安時代に比叡山良源の弟子證恵(でししょうけい)が額田郡稲隈(いねくま)の稲前天皇の別当職に任じられたのが寺の始まりといわれる。入母屋造桟瓦葺で、三間向拝を正面に付ける。典型的な浄土真宗平面で、三方に広縁と落縁を廻し、内陣は後門形式とする。内陣廻りには黒漆地に金箔張の彫刻や絵様が施されている。

図1-7-42　本光寺本堂

山門は、本堂の東、通りに面して建つ。入母屋造桟瓦葺の三間一戸の楼門。下層の側廻りは開放とし、上層は正・背面中央に桟唐戸を建て、他を格子の板壁とする。組物は出組詰組。内部に釈迦如来など三尊を安置している。

図1-7-43　本光寺山門

ウ.旧石原家住宅主屋、土蔵、庭門　(建築年代：主屋は安政6年(1859))

石原家は米穀業・金融業を本業とする商家で、六供(ろっく)杉本村(江戸時代は総持尼寺(そうじにじ)の寺領)の庄屋を務め、明治維新後は当村の戸長(こちょう)を務めた。４代目の石原東十郎(1813～1886)により主屋(おもや)・土蔵が新築された。主屋新築後は柳原家関係者や勤皇家(きんのうか)も訪れた。建築当時の普請帳(ふしんちょう)を基に復元され、昭和 53 年(1978)から 60 年(1985)までは、江戸時代の料理を復元し提供する料亭として活用された。

図1-7-44　旧石原家住宅主屋

角地に建ち、北側を正面とする。間口 18 メートル、奥行 9.1 メートルの木造つし２階建て。切妻造桟瓦葺で、南・北・東面に下屋(げや)を付設。東寄りに土間、西に２列各３室を配し、西端に仏間と座敷を並べ、土間正面に大戸(おおど)をたて、太格子(ふとごうし)や出格子(でごうし)を並べた町家らしい構えとなっている。

エ.岡崎信用金庫資料館(旧岡崎銀行本店) (建築年代:大正6年(1917))

旧東海道沿いの角地に建っている。鉄筋コンクリート造、２階建一部３階、スレート葺。設計は鈴木禎次(ていじ)で、塔屋を含めたリズミカルな外観は御影石と煉瓦の白と赤で構成する。ルネッサンス様式を基調としながら、当時流行していた幾何学的意匠も織り交ぜ、多彩な表情をみせる。

図1-7-45　岡崎信用金庫資料館

オ.旧愛知県第二尋常中学校講堂 (建築年代:明治 30 年(1897)、大正 14 年(1925)移築)

木造平屋建、寄棟造桟瓦葺で、南北各２箇所の屋根窓を設ける。西正面に切妻の玄関ポーチを付け、玄関欄間は三心アーチとする。東背面に奉安殿が突出。外壁はドイツ下見板張で上下窓の額縁を延ばしたスティックスタイル。内部は東に演壇を設け格天井とする。

図1-7-46　旧愛知県第二尋常中学校講堂

カ.旧愛知県岡崎師範学校武道場 (建築年代:大正 15 年(1926))

敷地の北寄りに南北棟で建っている。鉄筋コンクリート造で、外壁に柱や梁形を表し、細部にゼツェッション意匠を取入れる。小屋は引張材である下弦材を鋼材として他を木材とする混構造のトラスを組み、内部の大空間を軽快に見せる。

図1-7-47　旧愛知県岡崎師範学校武道場

キ.日本福音ルーテル岡崎教会教会堂 (建築年代:昭和 28 年(1953))

木造平屋建で北面し、切妻造妻入、桟瓦葺で、正面玄関に庇を付け、棟上に尖塔を立てて十字架を戴く。内部は三廊式で身廊にキングポストトラスを架け、側廊は間仕切により小部屋に分割できるよう工夫されている。白壁と赤屋根のコントラストが映える教会建築である。

図1-7-48　日本福音ルーテル岡崎教会教会堂

ク.旧本多家住宅主屋　(建築年代：昭和7年(1932)、平成24年(2012)移築)

旧藩主本多家の末裔・本多忠次が東京世田谷に建造した洋館。木造２階建で、全体の意匠をスパニッシュでまとめつつ、車寄せの尖りアーチなど、テューダー様式を加味している。また洋風外観で内部も洋間を主としながら、２階には３室続きの和座敷を持つ。洋風生活の浸透の中で和室を調和よく取入れた住宅である。

図1-7-49　旧本多家住宅主屋

ケ.善立寺（ぜんりゅうじ）本堂、七面堂、玄関、山門　(建築年代：本堂は享保19年(1734))、昭和5年(1930)・昭和中期改修)

本堂は、敷地の中央部やや西側に建ち、桁行六間、梁間七間、寄棟造、桟瓦葺、西に七面堂が接続する。前面に一間の向拝、北側背面に位牌堂が付く。内陣の来迎柱のみ円柱で、上方を極彩色で飾る。来迎壁の前には、典型的な禅宗様須弥壇が置かれている。

図1-7-50　善立寺本堂

七面堂は、本堂の西に並んで配置される。間口二間半、奥行六間の切妻造、桟瓦葺、前面に半間の濡縁と一間の向拝が付く。向拝まわりは極彩色の寛政期の様式が見られる。

図1-7-51　善立寺七面堂

玄関は、本堂の東側に接続して建つ。座敷３室を１列に並べ、渡り廊下により本堂に接続している。中央には唐から破風玄関を張り出す。正面から見ると、左から七面堂・本堂・玄関が一体化して見える。

図1-7-52　善立寺玄関

山門は、敷地の南西部に西を正面にして建つ。桟瓦葺の高麗門で、主柱は長方形断面、控柱は面取角柱で主柱間に楯を入れ、頂に冠木を通し、主柱や楯から前後に腕木を出して、出桁を受け、短い切妻の屋根をかける。

図1-7-53　善立寺山門

コ.冨田家住宅木南舎・土蔵

(建築年代：木南舎は文政 10 年（1827）・明治前期・平成 30 年（2018）改修/土蔵は明治9年(1876)・平成 30 年（2018）改修)

旧東海道が縦貫する本宿町にある幕末まで陣屋代官を務めた医師の住宅。木南舎は代官屋敷の旧主屋で東面して建つ。切妻造の棟に越屋根を載せ、背面の屋根を下屋まで葺下ろし、四周に下屋を廻す。内部は北を土間、南を床上とする。代官屋敷の景観を今に伝える。

土蔵は敷地南西の木南舎背面にある南北棟で、南の家財蔵と北の米蔵からなる。いずれも切妻造桟瓦葺で、鉢巻を廻す。家財蔵は東に、米蔵は北に戸口を開き、それぞれ戸前に下屋を付す。外壁は下見板張で、家財蔵２階は漆喰塗とする。屋敷構えの一角を形成する。

図1-7-54　冨田家住宅木南舎・土蔵

(3)史跡

①国指定

ア.北野廃寺跡　(年代:飛鳥後期)

矢作川右岸に広がる碧海台地の東縁に立地する。寺域は東西126.5メートル、南北146メートルで、四周に土塁をめぐらし、南大門・中門・塔・金堂・講堂・僧坊が南から北へ縦一列に並ぶ四天王寺式の伽藍配置である。過去の発掘調査により瓦、塼仏、磬形垂飾、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器等が出土しており、これらから飛鳥時代後期に創建された西三河最古の寺院であったことがわかる。

図1-7-55　北野廃寺跡

イ.大平一里塚　(年代:慶長9年(1604))

慶長９年(1604)に五街道の制が定められ、江戸日本橋を起点に１里(3.92キロメートル)ごとに一里塚を築いて榎を植えた。大平一里塚もこの時、西大平を領していた本多重次の嗣子成重により築かれた。昭和３年(1928)の道路改修で北側の塚は壊されてしまったが、現在の塚の規模は高さ2.4メートル、底部は縦7.3メートル、横8.5メートルの菱形である。

図1-7-56　大平一里塚

ウ.真宮遺跡　(年代:縄文晩期～平安)

乙川が矢作川に合流する地点の段丘上に位置する縄文時代晩期中葉を中心とした鎌倉時代までの集落跡である。発掘調査の結果、住居跡12基、土器棺墓37基及び土坑６基が確認され、石鏃・石斧・石皿などの生活道具のほか、土偶・石棒・石剣等の儀礼用の遺物も出土している。東海地方における当該期の代表的な集落跡であるとともに、多数の土器棺墓を有し、当時の墓制を解明する上で重要な遺跡である。他に弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物11軒、奈良・平安時代の竪穴建物19軒と掘立柱建物跡１棟などが確認されている。

図1-7-57　真宮遺跡

②県指定

ア.岩津第１号古墳　(年代：6世紀後半)

６基の古墳で構成される岩津古墳群中の１基で、直径約10メートルの円墳である。内部構造は複室の横穴式石室で全長約10メートルあり、奥壁とその両側壁には赤色顔料が塗られていた。石室からは飛禽鏡（ひきんきょう）、三葉環頭太刀柄頭（さんようかんとうたちつかがしら）とともに鳥形や４連坩等が付く三河随一の豊富な装飾須恵器が副葬されていた。３体分の人骨が確認され、６世紀後半に築造されたあと、７世紀前半まで追葬が行われたと考えられる。

図1-7-58　岩津第１号古墳

イ.神明宮第１号古墳　(年代：6世紀後半)

乙川右岸の標高約35メートルの段丘上に立地する。第１号墳の北西60メートルには第２号墳が存在する。墳丘（ふんきゅう）は現状で直径19メートル、高さ2.7メートルを測る円墳である。内部構造は複室の横穴式石室で、全長11.6メートル、高さ３メートルに及び、西三河で最大級の規模を誇る。奥壁は高さ2.9メートルの一枚岩で、全面にベンガラが塗られていた。石室からは須恵器、鉄鏃（てつぞく）の他、馬具や耳環（じかん）等が出土している。

図1-7-59　神明宮第１号古墳

ウ.太夫塚古墳　(年代：古墳中期)

矢作川右岸の中位段丘先端部に立地している。墳丘測量結果から直径約36メートル、高さ約5.5メートルの規模であったと推定される。須恵器の他に円筒埴輪（はにわ）、朝顔形埴輪、人物埴輪が出土しており、これらの遺物から５世紀後半の年代とされているが、埋葬された主体部については未確認であり不明な点も残る。

図1-7-60　太夫塚古墳

③市指定

ア.松平八代墓　(年代:室町)

大樹寺は松平氏の菩提寺。初代親氏から３代信光の墓は、４代親忠が大樹寺建立時に移設し、元和元年(1615)家康公が先祖八代の墓を建立した。

親忠の墓標を中心に向かって右側前３代の墓標は小さく向かって左側４代は大きく、左端の家康公の墓標は昭和44年(1969)に完成されたものである。

図1-7-61　松平八代墓

イ.岡崎城跡　(年代:享徳元年(1452)～康正元年(1455)築城)

矢作川と乙川(菅生川)の合流点の龍頭山に、享徳元年(1452)～康正元年(1455)に西郷弾正左衛門稠頼(つぐより)が築城したのに始まった。

天文11年(1542)徳川家康公が城内で生まれ、天正18年(1590)に城主となった田中吉政により城下町建設とそれを囲む総構えの大城郭となった。江戸時代には神君生誕城として格の高い譜代大名が城主となった。前本多家及び水野忠善の藩主時代の整備により城郭として完成し、城下を通る東海道は「二十七曲り」と呼ばれる非常に屈折の多い道筋となった。

明治６～７年(1873～1874)頃、建築物は取り壊されたが、城郭としての堀や石垣、えな塚、産湯(うぶゆ)の井戸は重要な遺構として残されている。明治８年(1875)、旧岡崎城の本丸・二の丸を中心に公園化され、昭和34年(1959)３月、三層五重の天守と井戸櫓(いどやぐら)、付櫓(つけやぐら)が再建された。

図1-7-62　岡崎城跡

ウ.山中城跡　(年代:大永4年(1524)清康入城)

山中城の築城については諸説あるが、西郷氏又は岡崎松平家によりその基礎がつくられたと考えられる。城は主郭を頂点として市方向へ伸びる尾根筋に階段状に郭をおき、土塁・空堀などで構成される連郭式の山城である。その城域は東西400メートル、南北200メートルに及び、県下でも最大級規模の中世城館である。

図1-7-63　山中城跡

エ.松平清康墓、松平広忠墓　(年代:天文4年(1535)清康没、天文 18 年(1549)広忠没)

西郷信貞の建立した寺で、後に岡崎城主松平清康の菩提寺となっている。天文４年(1535)に清康が、同 18 年(1549)に広忠が没するとここに遺物を収め、ともに墓をたてたといわれている。清康の墓は高さ 1.93 メートル、広忠の墓は高さ 1.55 メートルで、いずれも五輪塔で各輪に梵字が刻まれているが地輪のみ大樹寺に移されたことになっており、現在は無銘の切石で代用されている。

図1-7-64　松平清康墓(左)
松平広忠墓(右)

オ.松平広忠公御廟所　(年代:慶長 10 年(1605))

松應寺は永禄の３年(1560)徳川家康公が父広忠菩提のため、隣誉月光を開山として創建された。広忠は天文 18 年(1594)に家臣の岩松八弥に刺殺され、野見原で火葬された。広忠廟所は慶長 10 年(1605)広忠の 57 回忌に家康が建立したもので廟所、鳥居、拝殿、本堂が建てられた。

図1-7-65　松平広忠公御廟所

カ.甲山(かぶとやま)第1号墳　(年代:古墳中期)

甲山第１号墳は乙川と伊賀川に挟まれた愛宕山丘陵縁辺の甲山山頂に立地する。これまで直径 60 メートルの大円墳と考えられていたが、近年は前方後円墳の可能性も指摘されている。防空壕の掘削時に大量の木炭が確認されていることから、内部施設には木炭槨が推定される。同時に鉄刀が出土したとされるが、戦災で消失している。築造年代は４世紀末～５世紀初頭と考えられる。

図1-7-66　甲山第1号墳

キ.千人塚　(年代:応仁元年(1467)井田野の戦)

西光寺南方の周囲を民家に囲まれた場所に所在する。塚の頂部には２メートル程の石碑が建てられ、その周囲に碑や墓が 20 基程建てられている。中央の大きな碑の正面に「南無阿弥陀仏」左側面に「井田埜○○霊金壷」右側面「元禄九壬年八月二十九日大樹寺　廿八世忍誉碑金名」とある。松平親忠が井田野の戦いで戦死者を敵味方の区別なくこの地に埋葬したと伝えられる。

図1-7-67　千人塚

ク.藤川宿脇本陣跡　(年代:江戸)

江戸期の東海道五十三次のうち 37 番目の宿駅(しゅくえき)である。中世から交通の要地で、慶長６年(1601)の伝馬(てんま)制度により設置された。脇本陣(わきほんじん)跡には門が現存し、昔の名残を留めるものとして貴重である。門は享保４年(1719)の大火後再建され現在に至っている。明治以降は藤川村役場、昭和 30 年(1955)の合併後は岡崎市藤川連絡所として利用され、現在は藤川宿資料館となっている。

図1-7-68　藤川宿脇本陣跡

(4)天然記念物

①国指定

ア.岡崎ゲンジボタル発生地

指定区域は、国道１号の大平橋付近から旧額田町までの乙川、男川(おとがわ)と、山綱川(やまつながわ)、竜泉寺川(りゅうせんじがわ)、鉢地川(はっちがわ)、古部川(こぶがわ)の一部の総延長約 25 キロメートルにのぼり、稀に見る広がりを持つ。

都市化の影響を受け、一時生存が危ぶまれたが、美合(みあい)及び河合地区の保存会、小中学校による保護増殖の活動が功を奏している。また、上流区域並びに区域外に及ぶ生息地まで大切に保全されている。

図1-7-69　岡崎ゲンジボタル発生地

②県指定

ア.藤川の松並木

慶長９年(1604)五街道の制が定められ、江戸日本橋から京都まで東海道五十三次が整えられた。東海道の街道沿いには松が植えられ、道行く旅人たちにうるおいを与えた。藤川町地内には、旧道の約１キロメートルの間に約 90 本の松が群生し、往時を偲ばせている。

図1-7-70　藤川の松並木

イ.岡崎城跡の五万石ふじ

岡崎城跡(岡崎公園)の南西部、乙川を望む 1,300 平方メートルの範囲に生育するフジの古株である。かつて岡崎城の入り口付近にあったものを現在の場所に移植したと伝わる。岡崎藩の所領石高にちなんで「五万石ふじ」と呼ばれており、5月初旬の花期には、約 160 センチメートルに及ぶ花穂が開花し、優美な姿を展開する。

図1-7-71　岡崎城跡の五万石ふじ

(5)歴史及び伝統を反映した人々の活動

①県指定（有形民俗文化財）

ア.大川神明宮の舞台

大川神明宮にある豊楽座は明治 15 年(1882)建立で、入母屋造、茅葺平入、棟には千木を載せている。間口 12.28 メートル、奥行 9.41 メートル、高さ 10.9 メートル、舞台間口 10.65 メートル、同奥行 9.41 メートル、同床高 87 センチメートルである。この舞台には直径 6.7 メートルの回り舞台が設置されており、22 個の木車のついた皿回し式となっている。盆の背面 4 か所に腕木が取り付けてあり、床下で操作するようになっている。回り舞台の盆には 3.6 メートル×1.5 メートルの穴があけられ、上下するせり出しの仕掛けとなっている。舞台機構も多く備え、地方舞台としては貴重なものである。

図1-7-72　大川神明宮の舞台

イ.万足平の猪垣

猪垣は猪・鹿が田畑へ侵入するのを防ぐ目的で、江戸時代中期頃から築かれた。猪垣は、宮崎地区を中心に分布し、その総延長は約 50 キロメートルにもおよび全国的にも貴重な存在であるといえる。この地域一帯で採取される、硬く平らな板状に割れやすい領家片麻岩を多く利用している。万足平の猪垣はその代表的な例で、高さ約２メートル、底幅１メートル、上幅 60 センチメートル、現存長で 612 メートルあり、文化２年(1805)と天保３年(1832)の２度にわたり築かれたという記録が残っている。猪垣は、ムラ人の吉右衛門と孫左衛門が専門家集団の手ほどきをうけ、その技術を学び、地元の石を積み上げて造り上げたものである。

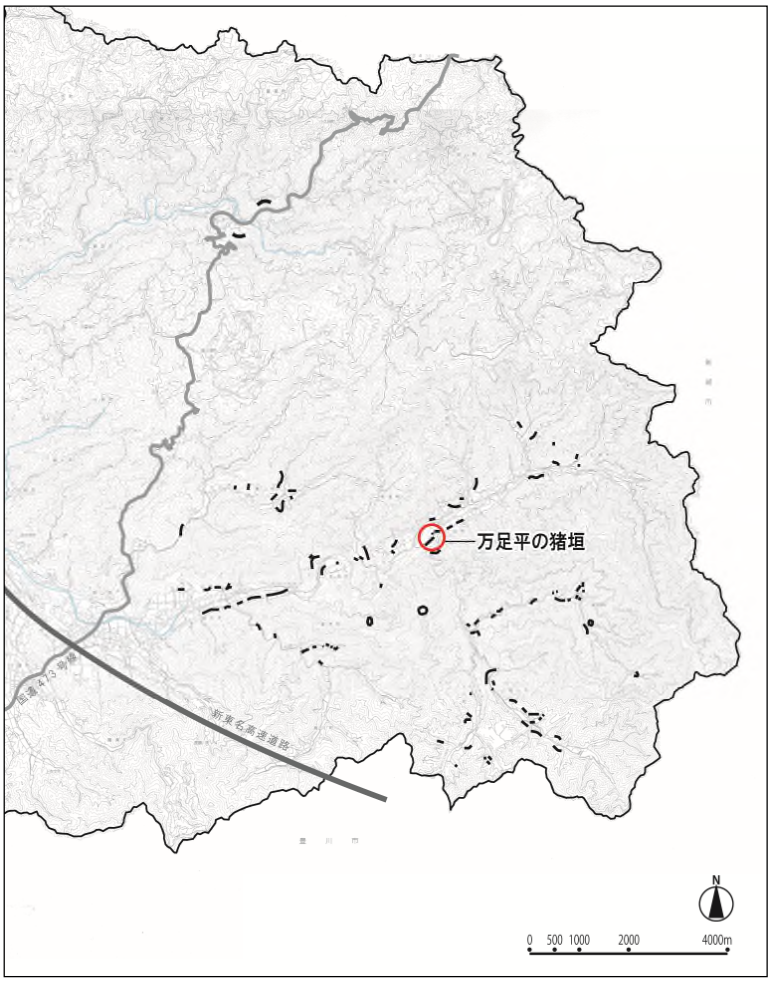


図1-7-74　猪垣の位置

図1-7-73　万足平の猪垣

②県指定（無形民俗文化財）

ア.滝山寺鬼祭り

祭　典　：旧暦１月７日に近い土曜日

起　源　：源頼朝の祈願に始まると伝えられ、正保４年(1647)３代将軍家光の時代に復活されて以後、徳川幕府の行事として盛大に行われるようになった。

旧暦元日から７日まで、天下泰平と五穀豊穣を祈願する「修正会」の最終日の夜に行われる祭りで、仏前法要、鬼塚供養、庭祭り(田遊祭)、火祭りが行われる。特に、半鐘・太鼓・双盤の乱打、法螺の音とともに、燃えさかる松明を持った男達と祖父面・祖母面・孫面を被った３鬼が、本堂の回廊と内陣を廻る火祭りは、非常に壮観である。

図1-7-75　滝山寺鬼祭り

イ.千万町の神楽

祭　典　：４月 16 日に近い日曜日

起　源　：八剱神社の祭礼で奉納される神楽で、嫁(娘)獅子神楽としては県下で最も長い伝統がある。文献に初めて見られるのは宝暦元年(1751)で、豊作と悪魔祓いの願いが込められていると伝わる。

舞方・後持方・笛方(２人)・太鼓方・囃子方で構成され、獅子は御幣と鈴を持って「幕の舞」と「鈴の舞」を神社拝殿で奉納する。また、若宮社への神輿渡御が行われ、若宮社南の広場で舞が奉納される。

図1-7-76　千万町の神楽

③市指定（有形民俗文化財）

ア.祭礼山車（矢作三区）

正面には唐破風屋根を二重に作り、これに諸種の彫刻をはめ、金銀箔を押している。破風上には楠公訣別、下段には飛竜力士の彫刻があり最も人目を引く。山車の両側と背面には猩々緋の幕が垂れ、黒地に竜を刺繍した水引を張り、その刺繍には金銀糸を用い眼に玉をはめ、爪に銀箔が貼ってある。山車の大きさは、縦 4.24 メートル、横 2.42 メートル、台の高さ 6.37 メートル、車輪の直径 0.90 メートル。矢作町にはかつて４台の山車があったが、現在では

図1-7-77　祭礼山車

「東中之切」と「西中之切」の２台が保存されている。江戸時代末期の作である。

イ.祭礼山車（矢作二区）

正面には唐破風屋根を二重に作り、一番下の箱段には牛若丸と鞍馬天狗の彫刻が施されている。その上の御拝の２本の柱には登り竜と降り竜を彫り、蟇股・懸魚等にも彫刻がある。全てに金箔を押して極彩色が施されている。幕類は大幕猩々緋、水引は金通し地金に麒麟と鳳凰の金銀色糸の刺繍が施されている。山車の大きさは、縦 4.29 メートル、横 2.48 メートル、台の高さ 7.09 メートル、車輪の直径 1.18 メートル。江戸時代末期の作である。

図1-7-78　祭礼山車

④市指定（無形民俗文化財）

ア.大嘗祭悠紀斎田

祭　典　：６月第１日曜日

起　源　：大正４年(1915)、大正天皇即位の大嘗祭で、悠紀斎田に六ツ美村中島(現中島町)が選ばれた。

「大嘗祭」は、天皇即位後初めて新穀をもって皇祖と神々を悠紀・主基の両殿に迎え、収穫祝いと今後の豊作を祈願する宮中の儀式である。京都より東日本を「悠紀の地」、西日本を「主基の地」と称し、大嘗祭に供える米を作る田を「斎田」という。当地には、その際に行われた、お田植唄、お田植踊り及び装束・用具・記録が保存伝承されている。

図1-7-79　大嘗祭悠紀斎田

イ.デンデンガッサリ

祭　典　：新暦１月３日

起　源　：山中八幡宮に古くから伝わるお田植え神事である。

歌詞の初めに「デーンデーンガッサリヤー」という詞があるので「デンデンガッサリ」といわれている。前歌・後歌・せりふ・所作により年間の農作業を表現し、天候の恵みと稲の豊作を祈願する。苗に見なした餅を大鏡餅に植える所作、豊作を表す大鏡餅を牛の背に載せ、牛が重さに耐

図1-7-80　デンデンガッサリ

えきれず倒れる所作が特徴的である。牛が運搬、豊作の象徴として登場してくることが極めて珍しく貴重なものである。

ウ.須賀神社祭礼山車及び祭りばやし

須賀神社の春の祭礼で、かつては「祇園祭」として６月に行われていた。祭礼は、須賀神社の祭神が同じ町内にある神明社の祭神を、山車とお囃子などで、にぎやかに訪問することが目的といわれている。現在、山車は４台あり、入船山車(新居野組)・竜神山車(原組)・恵比寿山車(仲組)・鳳凰山車(庄野組)である。河瀬・宮北市組は、花組と称し花車(チャラボコ)で参加している。祭り囃子はこれらの山車上で演奏される。囃子の伝承にそれぞれの組が工夫・努力をしている。

図1-7-81　須賀神社祭礼山車及び祭りばやし

エ.夏山八幡宮火祭り

夏山町の柿平・平針地区が１年ごとに当番となり祭りを執行している。祭りの当日、神社境内の林から伐採した生木を、拝殿前の広場に高さ３メートル程積み上げて「ソダ山」を築き、「太夫」と呼ばれる鬼が拝殿で矢竹で熾した火種で点火する。この火の周りで「鈴の舞」「獅子討ち」を行った後、鬼が燃える木を持って逃げる参拝者を追い掛け回す。火の粉にあたるとその年は風邪を引かないといわれる。夏山八幡宮には、永禄元年(1558)の銘のある獅子頭が残されている。作者は「光國」と記されている。

図1-7-82　夏山八幡宮火祭り

オ.堤通手永御田扇祭り（つつみどおりてながおたおうぎまつり）

祭　典　：７月の日曜日

起　源　：御田扇祭りはその形態から岡崎藩の農民支配制度である手永制度との深い関わりが指摘されている。

旧岡崎藩領の堤通手永の区域内(現岡崎市 16 箇所、西尾市４箇所)で行われ、五穀豊穣・町内安全・天下和順等を願い、毎年１年毎にマチからマチへと神輿を中心とした渡御行列により手永内を巡行する伝統行事である。

図1-7-83　堤通手永御田扇祭り

カ.山方手永御田扇祭り

祭　典　：７月の日曜日

起　源　：御田扇祭りはその形態から岡崎藩の農民支配制度である手永制度との深い関わりが指摘されている。

　旧岡崎藩領の山方手永の区域内(現岡崎市 12 箇所、額田郡幸田町１箇所で構成)を、五穀豊穣･町内安全･天下和順等を願い、毎年１年毎にマチからマチへと神輿を中心とした渡御行列により手永内を巡行する伝統行事である。

図1-7-84　山方手永御田扇祭り

⑤指定等以外

ア.能見神明宮大祭

祭　典　：５月の第２土・日曜日(その他神事を月曜日)

起　源　：江戸時代より続く岡崎を代表する祭りの一つ。能見神明宮は、旧岡崎市街の中部に位置し、氏子も大変多い。「御神輿渡御」は一番重要な神事で、御神体(天照大神)が御神輿に移され、先獅子を先頭に長い行列を組み、氏子の 11 町内に設けられた御旅所を巡行し、町の安全と繁栄を祈願してお祓いを受ける。「山車の宮入り」は町ごとに８台の山車が明かりを点し、お囃子の音と共に町内を巡り、揃って神明宮に入る最大の見せ場である。踊り子には氏子の家の女児がなり、身内の人は山車に付いて回って「花」と呼ばれる包み金を投げる。

図1-7-85　神明宮大祭

⑥伝統産業

以下に示す伝統産業のうち、昔からの伝統工業の技術を守り、育て、発展させるため、経済産業大臣により「伝統的工芸品」に指定されたものに、「岡崎石工品(石材加工)」と「三河仏壇(三河仏壇製造)」がある。

ア.石材加工 [伝統的工芸品:岡崎石工品]

家康公が関東に移った天正 18 年(1590)に田中吉政は岡崎城主となり、城郭や城下町の整備等を行った。その際、大坂の河内(かわち)や和泉(いずみ)から大勢の石工を呼び寄せ、地元の花崗石(みかげいし)で堀や石垣を作らせている。

その後、宿場町の北に位置する随念寺周辺の八軒町と裏町(現花崗(みかげ)町)(別名石屋町)に居住した石工たちは、その石工技術を活かして燈(とう)籠(ろう)、鳥居、手水鉢(ちょうずばち)等を作って生計を立てた。こうして受け継がれてきた技術が、現在の岡崎の石材加工業に活かされている。

図1-7-86 石燈籠

石材加工の主体は新たな石工団地に移ってはいるが、現在でもこの場所には十数軒の石材店や鍛冶屋(かじや)等が建ち並び、石屋町としての風情が残っている。

イ.三河仏壇製造 [伝統的工芸品:三河仏壇]

文献によると、三河仏壇は元禄 17 年(1704)に、矢作川(やはぎがわ)から運ばれる松、杉、檜等の良材と三河北部の漆を材料として、仏壇師が製造したのが始まりといわれている。

三河仏壇は、八職と称する専門職(木地師(きじし)、宮殿師(くうでんし)、彫刻師、錺金具師(かざりかなぐし)、塗師(ぬし)、蒔絵師(まきえし)、箔押師(はくおしし)、組立師)による合作により製造される。

図1-7-87 三河仏壇

仏壇は価値の高い商品であるとの認識があったため、岡崎城下大手門近くの材木町を中心に仏壇町が形成された。仏壇の技術が山車製作にも活かされている。その後市内各所に店舗ができ、現在でも数件の仏壇店が岡崎城下で営業している。

ウ.八丁味噌製造

八丁味噌は、600 年程前から地元大豆と矢作川の伏流水を用いて醸造されていたといわれている。戦国時代には武士の携行食として重宝され、家康公が幕府を開いた際には、三河武士たちにより、諸国大名にその名が伝えられ広まったとされている。

現在は、江戸期創業の二つの老舗、早川商店(現:カクキュー)と大田商店(現:まるや)が、昔ながらの製法と趣のある味噌蔵を脈々と受け継ぎ、岡崎を代表する味となっている。

エ.花火製造

家康公に仕えた稲富伊賀守直家が、鉄砲隊の指導者として砲術・火術(稲富流火術)を伝えた。これを弟子の沢田四郎右衛門が平和のための火術として改良を重ね、大筒、手筒による打上げ花火の製作に応用し、現在の三河花火の基を作ったといわれている。

文化５年(1822)、これらの大筒、手筒花火は菅生神社で五穀豊穣を願う農民により神への奉納とされ始め、現在の天王祭りに受け継がれている。

オ.やはぎの矢作り

やはぎの矢は、明治３年(1870)、静岡県三ケ日にて矢師となった初代小山嘉六(こやまかろく)に始まり、伝統的な手法により代々竹矢の製造に取り組んできた。70 もの製造工程を持つため、完成までに２年の歳月を要するといわれている。現在は、流鏑馬(やぶさめ)神事を始めとした各神事で使用されている。

図1-7-88　矢

製法は、まず竹を切り出し、熱して柔らかくして竹の曲がりがなくなるまでしごく。その後、小刀で削り、再び焼いて真直ぐにする。砂で擦って小刀で削りめを取り、焼き色をつけて砂と水で磨く。仕上げ砥ぎをし、最後に重心が揃うように鉄粉を混ぜた松脂を焼け火箸で矢竹の端に入れ込み、完成させる。

昭和 40 年代以降、量産可能なアルミ製の矢が主流となり、現在、昔ながらの製法を守る矢師は全国でも 10 名程度となったが、その内３名が岡崎市に残る１軒に勤め、代々受け継いできた竹矢づくりの技法を後世に伝承し続けている。

カ.五月武者絵幟作り

かなめ染め武者絵幟は、江戸時代中期に職人の町・三河国土呂(福岡町)の地で誕生した。かなめ本染めは、今なお熟練の職人により全て手づくりされ、下絵も含め、変わることなく受け継がれている。

キ.ちゃらぼこ太鼓作り

ちゃらぼこ太鼓は、この地方独特の祭り囃子で演奏される太鼓のことである。なお、「ちゃらぼこ」とは太鼓のリズムを言葉で言い表したものである。

「ちゃらぼこ」については諸説あるが、蒲郡等の海沿いの地域では南の海から伝わったといわれ、岡崎市・安城市辺りでは東海道から京都のものが伝えられたとされている。

図1-7-89　ちゃらぼこ太鼓

明治・大正期には西三河に太鼓店がいくつかあったが、昭和になりそのほとんどが廃業した。今ではちゃらぼこ太鼓を製作できるのは全国でも２軒のみで、そのうちの１軒が慶応元年(1865)に創業してから今日までの 150 年余り、岡崎城下で製作を続けている。

ク.しめ縄作り

しめ縄には、御霊を宿す神聖な境・領域を他と区別するために奉り、周囲の汚れを清め、災い等の侵入を防ぐという意味がある。わらをなった縄に、縁起が良いとされる飾り物を付ける。

岡崎におけるしめ縄の生産は、明治20年(1887)代前半、伊勢神宮へ参拝した石川米吉が神宮のしめ縄を参考に開発したことに始まる。生活様式の変化により、従来に比べ生産量の減少は否めないものの、手づくり、本物志向により注目されている。

図1-7-90　しめ縄

ケ.三州岡崎和蝋燭(わろうそく)作り

ハゼの木の実からとれる「木蝋(もくろう)」を原料として製造される和蝋燭(木蝋燭)は、江戸時代に入ると需要が急伸し、各藩において重要な産業として各地に蝋燭問屋ができた。和蝋燭の製法が本市へ伝授されたのも、その頃(17 世紀後半)といわれている。

現在、和蝋燭の製造は全国で 20 軒ほどとなったが、本市には３軒が営業をしている。現在でも、「あかり」として仏事を始め寺院・茶道・記念行事など幅広い用途に用いられ、根強い需要がある。

図1-7-91　和蝋燭

(6)近代化産業遺産

ア.ガラ紡（遺産名称：紡績関連遺産）

ガラ紡は、ブリキの筒に綿打した原綿を入れ、筒を回転させることにより撚りをかけて糸を上に巻き取る仕組みの和紡で、回転する筒の音からガラ紡と呼ばれた。

臥雲辰致の「ガラ紡績機」の発明が、繊維工業・機械工業の近代化に向けた一つの大きな転機となった。三河地域を中心として「ガラ紡」は急速に普及し、さらに水車動力の採用と船に水車を取り付け船中に紡機を設置して水量豊富な矢作川などの河川につなぐ「船紡績」への技術発展により、三河のガラ紡績は明治 20 年(1887)頃に最盛期を迎えた。

イ.八丁味噌（遺産名称：八丁味噌カクキュー関連遺産、㈱まるや八丁味噌関連遺産）

良質な大豆と天然の湧水、矢作川の水運に恵まれた八丁村(岡崎市八帖町)で生まれた八丁味噌は、カクキュー(合資会社八丁味噌)とまるや(㈱まるや八丁味噌)という二大企業により愛知を代表する醸造製品として全国に知られるようになった。

八丁味噌は古くは三河武士の兵糧として重用された保存食であったものを、味が良く、栄養価が高く、長期保存にも耐えられる味噌のブランドとして二社が江戸時代に商品開発したものである。

コラム　二七市

二七市（ふないち）は、旧岡崎城総堀にあたる八幡町（はちまんちょう）の二七市通りで毎月下一桁の数字が2と7のつく日に開催される青空市である。 市内だけでなく、市外からも露店商が来て出店し、青果や乾物等の食料品だけでなく、衣料品、植木・切り花等を扱う店も加わり、賑わっている。

この時、二七市は、第二次世界大戦後の闇市に始まる。戦後、東岡崎駅から明大寺町（みょうだいじちょう）にかけての通りに集まった闇市の商人は、交通障害になるという理由から八幡町に移転させられた後、中央マーケットを設立した。その後の昭和 27 年(1952)、中央マーケットが、康生町のたつき百貨店と本町の中央マーケットに分かれて再移転した後、人が集まらなくなった八幡町では、八幡町発展会が露店商組合と共同で市を出したのが現在の姿である。

現在では、開催時に交通規制を行い、歩行者天国になった通りに露店商等が出店し、賑わいを見せている。なお、平成 28 年(2016)には、60 周年を迎える。